

## C I 部

# 日本語構造の基本

C I 部では日本語の構造の基本的事項を扱う。「主語・主格・主体」「主題・話題」等、「主語」に関わる概念を構造モデルを用いて体系的なものとして整理しつつ日本語に気づかれずに存在する多くの二重主語構造を示す。次に「疲れる文」「同格複実体描写」「うなぎ文」「形容詞+です」等基本的構造を論じたうえで、最後に「活用」の構造伝達文法での捉え方を示す。

C 1 章では、主格に基本 3 主格( $\emptyset_1$ , ガ<sub>1</sub>, ガ<sub>2</sub>)があることを確認し、12機能主語(うち11は二重主語)について述べ、主語の実相を明らかにする。

C 2 章では、「君の話は疲れる」の文が「因果の複主体」という二重主語構造を持つことを述べる。

C 3 章では、複数の実体(名詞)が同じ格にある場合の描写を「対等な実体」「一方が下位概念」「一方が数量」の3種類に分けて論じる。

C 4 章では、「うなぎ文」は「形式的補充」であることを述べ、「だ」を3種類に分ける。「形容詞+です」を「形式断定基」の一種とする。

C 5 章では、国語学的な「活用」の捉え方の不備を指摘しつつ、本文法の捉え方を詳述するとともに、活用を担う各形態素の機能を明らかにする。



## C1章

# 日本語の主語

### C1.0 日本語の主語

「主語」とは何か、と問われることがある。「主語」は「主格」や「主題（題目語）」と同じものなのか、違うものなのか、また、「対象語」は主語ではないのか、そもそも日本語に主語はあるのか、と問われることもある。ここでは日本語構造伝達文法での「主語」のとらえ方について、以下の順に述べる。

#### C1.1 構造と文

構造は「実体・格・属性」で構成され、描写されて文になる。

#### C1.2 主体と客体

「実体」は「主体／客体」のいずれかで構造中に存在する。

#### C1.3 主語

「主語」は「主体」である。文中では属性より先に位置する。

#### C1.4 主題……主題主語、主題客語

「主題」は「は」のついたもので、「主語／客語」両方にある。

#### C1.5 話題……話題主語、話題客語

「話題」には何もつかない。「主語／客語」両方にある。

#### C1.6 主語の現れ方……基本3形式（01, が, は）、8種類の基本主語

主語は「01／が／は」の形で現れ、8種類の基本主語となる。

#### C1.7 二重主語6種類……機能主語 12種類

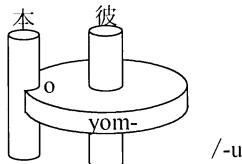
「対象語」を含め、「が」で言えるものはすべて主語である。

記述内容は『日本語構造伝達文法』、『日本語構造伝達文法 発展A』で扱ったものを、「主語」という観点から改めて再構成、増補した性格のものになっている。要点を述べているので、これだけでは分かりにくい記述になっている。ぜひ、改めて前著に当たっていただければ幸いである。

## C1.1 構造と文

## C1.1 (1) 構造と描写

ここにごく基本的な構造がある(図C1-1)。この構造は1つの属性「yom-」と2つの実体「彼」、「本」で構成されている。実体「彼」は属性「yom-」に対して「主格」にあるので「主体」と呼ばれ、実体「本」は「を格」にあるので「客体」と呼ばれる。



構造とは脳内(深層)に想定される実体と属性の論理関係で構築される構築物である。  
(=深層構造・判断構造)

図C1-1 彼 Ø1 本を yom-u. (表層文)

構造とは、発話者が脳内(深層)に構築する、論理的構築物(深層構造・判断構造)である。これを聞き手に伝達するために、各要素を音声形式で「描写して」「文(表層文)」を作る。聞き手はその音声で示された文(表層文)を聞いて、自分の脳内(深層)に他者のこの論理的構築物(深層構造・判断構造)を再構築して文の意味を理解する。(的確に再構築できないと正確な理解ができない。)

上の構造(図C1-1)は、たとえば次のような文(表層文)として描写される。

C1-1) 彼 Ø1 本を yom-u. (第1主格……C1.2参照)

C1-2) 彼 が 本を yom-u. (第2主格……C1.2参照)

## C1.1 (2) 実体と属性と格

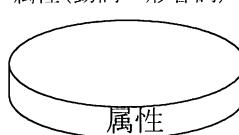
構造上で「実体」と呼ばれるものは、簡単にいえば名詞(実詞)であって、細長い円柱で示される(図C1-2)。この「実体」は「属性」(主として動詞・形容詞のこと)の円盤(図C1-3)のどこかに位置をとる。

実体(名詞)



図C1-2

属性(動詞・形容詞)

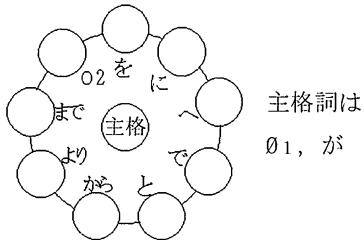


図C1-3

「実体」と「属性」とは、「実体」が「属性」の「行為者／行為対象／発生の場所／発生の時」などを示す関係にあり、多くの「意味関係」を持つが、こ

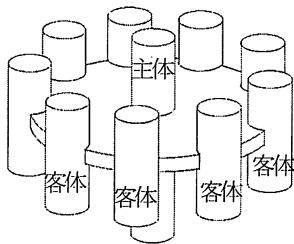
の意味関係のことを「格」という。「格」には「主格」と「客格」があり、ともに「格詞」で表示される。(「格詞」は一般的には「格助詞」と呼ばれている。)

「主格」は「属性」の円盤の中央に位置をとり、「客格」は周辺に位置をとる(図C1-4, -5)。(この理由については『文法』第1章参照。)



図C1-4 格の位置

主格詞は  
θ<sub>1</sub>, が



図C1-5 主体と客体

## C1.2 主体と客体

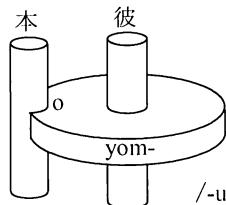
「主格」はその「実体」が「属性」の「持ち主」であることを意味し、格詞「θ<sub>1</sub>」ないし「が」で表示される(C1-1), C1-2)。「実体」が「主格」に立つとき、その実体を「主体」という(図C1-5)。

主格には、「θ<sub>1</sub>格」と「が格」があるが、「θ<sub>1</sub>格」は日本語にもともと存在する本来的な主格であり、第1主格と呼ぶ。音形式がなく、無音の形で表現される。一方の「が格」は歴史的には比較的新しく、鎌倉・室町時代に名詞修飾節の中の主格表示という制約のある形で生まれた主格である。今日でも制約があり、まだ第1主格を表示するには至っていない。「が格」には第2主格(が<sub>1</sub>)と第3主格(が<sub>2</sub>)がある。以上の詳細については『文法』2.2, 11.6, 『発展A』A2.3, A2.4, また、本章C1.5以降を参照されたい。

格詞「θ<sub>1</sub>」は無音なので、ある実体が主格にあるかどうかを確認する場合は、音声で表示される主格詞「が」を用いて描写ができるかどうかで確認する(不自然な場合もあるが、確認はできる)。「海が見える」のように「が」が使えば、その実体(実詞、名詞)「海」は主格にあるといえる。

「客格」は、「実体」が「属性」の「対象・存在場所・生起時・基準など」であることを意味し、格詞「を, に, へ, で, と, から, より, まで, θ<sub>2</sub>」で表示される。「客格」に立つ「実体」を「客体」という(図C1-5)。

以上のこととを図C1-1の構造を用いて再言すれば、こうなる。



図C1-1(再) 彼 Ø1 本を yom-u

主体：彼……主格(中央)にある実体

客体：本……客格(周辺)にある実体

属性：yom-

主格の格詞：Ø1, が

客格の格詞：を, に, へ, で, と,

から, より, まで, Ø2

構造は「実体」「属性」「格」の「3要素」によって構成される。単純な構造でも複雑な構造でも、この3要素によって同一の原理で構成される。

### C1.3 主語

#### C1.3 (1) 文中では主語は属性より前の位置にある

「主語」とは「主体」が表層の文の中に描写されたもののことであるが、その主体に関わる情報を属性で述べようとしているので、属性より先に描写され、文中では、属性より前に位置する。(倒置等の修辞の場合を除く。)

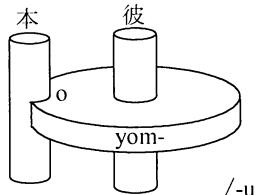
#### C1.3 (2) 主体が主語である場合

たとえば図C1-1の構造を描写して表層文を作るとき、

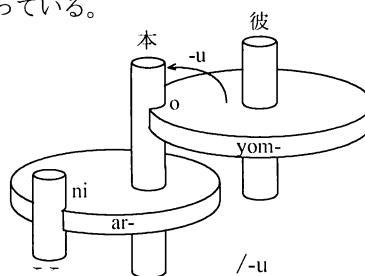
C1-3) 彼 Ø1 本を yom-u.

C1-4) 彼 が 本を yom-u.

のように、主体「彼」が格詞「Ø1」か「が」とともに属性 yom- より先に描写される場合に、「彼」は「主語」になっている。



図C1-1(再) 彼 Ø1 本を yom-u



図C1-6 彼が yom-u 本 Ø1 ここにある

また、図C1-6の構造を描写すると表層文は次のようにになる。

C1-5) 彼 が yom-u 本 Ø1 ここに ar-u.

この文では「彼が読む」が従属節になっていて「本」を修飾している。このときも、主体「彼」が属性 *yom-* より先に描写されているので、「彼」は「主語」である。ただし「従属節の中の主語」である。

この文には「本 Ø<sub>1</sub> ここに ar-u」の部分があるが、この部分においても、「本」がその属性 *ar-* より先に描写されているので、「本」は「主語」である。この部分は従属節ではなく主文であるので、「本」は「主文の主語」である。

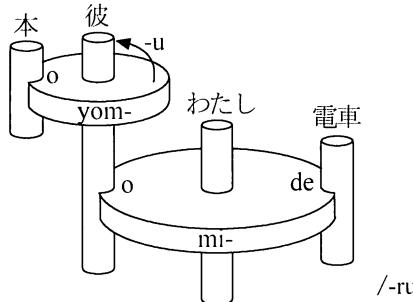
ここからわかるように、「主語」には「主文の主語」(本)と「従属節の中の主語」(彼)がある。

### C1.3 (3) 主体が主語でない場合

また、図C1-7の構造を描写すると表層文は次のようになる。

C1-6) わたし Ø<sub>1</sub> 本を *yom-u* 彼を 電車で *mi-ru*.

この文では「本を *yom-u* 彼」となっていて、属性 *yom-* が主体「彼」を修飾している。このとき、主体「彼」は属性 *yom-* より後に描写されているので、属性 *yom-* に対する「主語」ではない。構造上の「主体」であっても、属性に修飾される主体であるときは、文中ではその属性に対する「主語」でない。



図C1-7 わたし Ø<sub>1</sub> 本を *yom-u* 彼を 電車で *mi-ru*

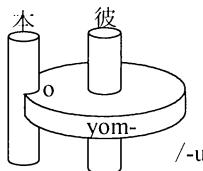
一方、主体「わたし」はその属性「*mi-*」より先に描写されているので「主語」である。「主文の主語」である。

### C1.4 主題……主題主語、主題客語

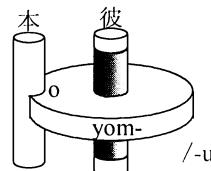
#### C1.4 (1) 主題の図示

「主題」と呼ばれるものがある。これは構造内のある実体(主体、客体)を目立たせて描写して、それについて何かをのべるという気持ちを伝えようとする

ものである。それで、普通「主題」は文頭に出る。



図C1-1(再) 彼 Ø1 本を yom-u。



図C1-8 彼 Ø1 は 本を yom-u。

目立たせるために「は」が使われる。「は」は構造上では実体に色紙を巻いて表現する（図C1-8）。実体の「ふちどり」をするような形になるが、これにより、その実体を「目立たせる」とともに、他の潜在的な実体との「対比」が行えるようになる。

#### C1.4 (2) 主題主語

図C1-1 では「主題化」を行わずに描写するので、表層文はこうなる。

C1-7〉 彼Ø1 本を yom-u.

図C1-8 では「主題化」を行って描写するので、表層文はこうなる。

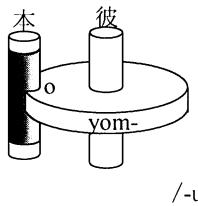
C1-8〉 彼Ø1 は本を yom-u.

ここでは「主語」である「彼」が主題化されているので、主語は「主題主語」となっている。「主題化主語」「主語主題」といってもよい。

#### C1.4 (3) 主題客語……「を格」の場合

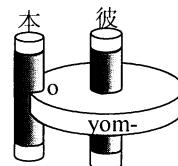
一方、図C1-9においては「を格客体」である「本」が「は」により目立つようにされて主題化されている。描写においては文頭に出ることが多い。

C1-9〉 本卷は 彼が yom-u.



/-u

図C1-9 本卷は 彼が yom-u



/-u

図C1-10 本卷は 彼 Ø1 は yom-u

格詞「を」は、元来日本語に不要だったものであり、現代語でも特に口語では、かなりの場合使用しなくてすむ。それで、「は」が付いて主語提示部が「をは」のように長くなると、「を」は必ず消去される。

ここでは「客語」である「本」が主題化されているので、客語は「主題客語」である。「主題化客語」「客語主題」といってもよい。

また、図C1-10においては主体と客体の両方が主題化される。

C1-10) 彼①は 本巻は yom-u。

このような場合、傾向として、文頭にある「彼」が「主題」であり、文中にある「本」が「対比」の効果をもつ。ただし、発話者の心理によっては、逆の場合も、また、両方がともに主題ないし対比である場合もありうる。

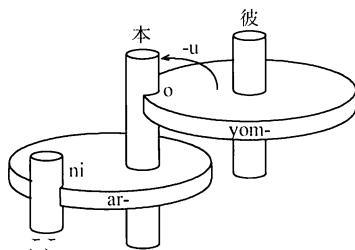
C1-11) 本巻は 彼①は yom-u。

と順序を変えて描写されれば、一応「本」が主題であることになるが、話者の心理次第で、上と同じことがいえる。

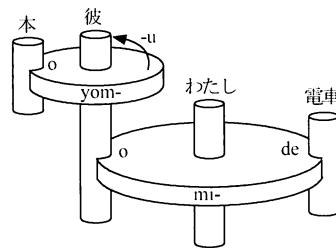
#### C1.4 (4) 主題化図示は必須ではないこと

主題化は構造の一部を目立たせる「気持ち」なので、構造形式を変化させるものではない。構造形式を変化させないので、主題化を構造上に表すことは必須ではない。主題化を明確に構造上に示す必要がある場合以外は、構造上の実体に色紙巻きによる「ふちどり」をしなくてもよい。

#### C1.4 (5) 主題客語……「に格」「で格」「へ格」の場合



図C1-11 彼がyom-u本①ここにar-



図C1-12 本をyom-u彼を電車でmi-

図C1-11において、「ここ」を主題化すればこういう文になる。

C1-12) ここには 彼が yom-u 本が ar-

※文末に -u がなく、文として完成していくなくとも、構造描写文とする。

「に」格客体「ここ」が主題化されているので「ここには」となる。「に格詞」は次のように省略されることもある。

C1-13) ここ(に)は 彼が yom-u 本が たくさん② ar-

図C1-12 の構造において、「電車」を主題化すればこういう描写文になる。

C1-14) 電車ではわたし① 本を yom-u 彼を mi-

この文では「で」格客体「電車」が主題化されているので「電車では」となる。  
「で格詞」は省略されることもある。

C1-15) 電車(で)は 携帯電話を使わないでください。

「へ」格例については C1.5(8)を参照されたい。

#### C1.4 (6) 主題一解説

一般に「主題」は「述べられる対象」となるものであり、その主題についての「解説」が後に続くと捉えられており、ここに「主題一解説」の関係があると考えられている。このこと自体に誤りはないのであるが、この「主題一解説」の視点に立つ研究では、主題と述語(属性)の格関係(論理関係)を考えない傾向がある。格関係はないものと確信している場合もある。つまり、その視点に立つ研究では「格」が名詞と属性の論理関係を示すものとして十分に認識されていない。これは構造伝達文法と大きく異なる捉え方である。

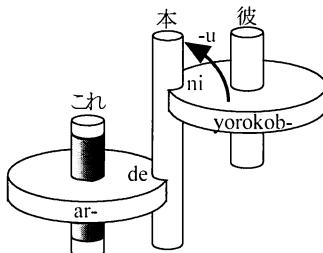
#### C1.4 (7) 主文主語の「は」は主題化と対比、従属節主語の「は」は対比

「は」は主文主語につく場合は、「主題化」と「対比」の両方の機能を持つことができるが、従属度の高い従属節主語につく場合は「対比」の機能しかない。

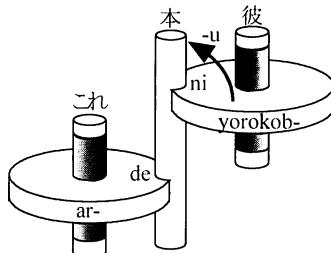
[主文主語に「は」がつく場合]

C1-16) 彼①は本を yom-u。

この「彼①は」という形式は「彼」について述べる(解説する)気持ちを表すこともできるし、(彼女は本を読まないが)「彼①は」読む、という対比の気持ちを表すこともできる。(「は」が対比の場合は音声的卓立があることが多い。それで「は」を「は」のようにゴシックで示すこともある。)



図C1-13 これ①は彼が喜ぶ本だ



図C1-14 これ①は彼がは喜ぶ本だ

図C1-13 の構造から次の描写文が得られる。

C1-17) これのは 彼が 喜ぶ 本 だ。

ここで「は」を伴っているのは主文主語の「これ」であり、主題と対比の両方の機能を持つ可能性がある。

#### [従属度の高い従属節主語に「は」がつく場合]

一方、文中の「彼が喜ぶ本」の「彼が喜ぶ」は「本」を修飾している「従属節」である。この従属節の主体「彼」に「は」をつけると、図C1-14 のようになる。このとき、ここから

C1-18) これのは 彼がは 喜ぶ 本 だ。

という表層文が得られる。ここに得られた「彼は」は、「彼について」述べようという意思の表れではないので「主題」を表していることになりにくい。このような場合は、たとえば「彼女は喜ばないけど」「彼は喜ぶ」というような、対比の気持ちを表していることになる。つまり従属度の高い従属節主語での「は」は「主題主語」であるよりは「対比主語」である傾向が強い。(従属度の低い従属節は「<田中さんは良い人だ>ということを聞いた。」の <> 内のように、元の主文主語がそのまま主題として生きるような引用節などの従属節である。) (「彼が」に「は」が付いて「がは」となるとき「が」が消えるのは、C1.4(3)に見た「をは」の「を」が消えるのと同じ理由による。)

#### C1.4 (8) 相対化描写詞

構造伝達文法では「は」や「も、こそ、さえ、しか」を「相対化描写詞」と呼んでいる(『文法』3.1 参照)。「は」の代わりに「も、こそ、さえ、しか」も使用される。

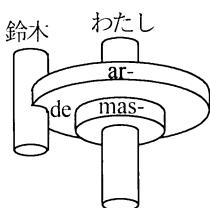
### C1.5 話題……話題主語、話題客語

#### C1.5 (1) 「が」も「は」も使わない主語

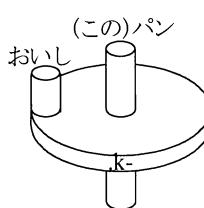
日本語の主語を示すのに「が」も「は」も使わないことがある。これは、「むかし、をとこありけり」(伊勢物語),「かぐや姫、もとのかたちになりぬ」(竹取物語)などのように日本語本来の主語の表示法である。現代語ではたとえば次のように言う。それぞれの構造は図C1-15～-18 のように図示できる。

C1-19) わたし鈴木です。 (図C1-15)

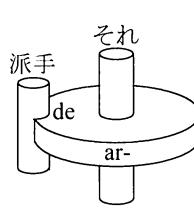
C1-20) このパンおいしい。 (図C1-16)

C1-21) それ派手だ。 (図C1-17)C1-22) 電車止まってるよ。 (図C1-18)

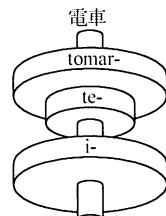
わたしØ1 鈴木です



このパンØ1 おいしい



それØ1 派手だ



電車Ø1 止まってる

図C1-15

図C1-16

図C1-17

図C1-18

## C1.5 (2) 主格詞「Ø1」……ゼロイチ

図C1-15～18 から明らかのように、それぞれの主語はしっかりと主格の位置にある。つまり、格はしっかりと「主格」なのだが、それを表す「主格詞」が文中にない。格詞「が」の省略ではないかと考えて、「が」を復元してみると意味が変化してしまうから、「が」の省略ではない。すぐ述べるが、主格詞「が」は鎌倉・室町時代ごろに、従属節中の主格（つまり、制限された主格）に使用されるようになったもので、それまでは主格詞というものはなかった。必要がなかった。（ただし、A2.4 2)参照） 現在でも典型的な主格を表す主格詞はない。それで、しっかりと主格にはあるが、格詞がないことを「Ø1」（ゼロイチ）という主格詞で表示することにする。すると、C1-19)～-22) の文は、C1-23)～-26) のように表示できることになる。

C1-23) わたしØ1 鈴木です。 (図C1-15)C1-24) このパンØ1 おいしい。 (図C1-16)C1-25) それØ1 派手だ。 (図C1-17)C1-26) 電車Ø1 止まってるよ。 (図C1-18)

ある実体が主格にはあるが、そのことを示す主格「詞」がないということを「Ø1」という「格詞」で表示することになるのであるが、これは数学の10進法で、「あるものが存在すると想定されるところ」に、あるものが「存在する」ことを「1」～「9」の数字で表して、「存在しない」ことを「0」で表すのと似ている。「0」であることも意味のある1つのあり方なのである。

### C1.5 (3) なぜ主格に格詞がないのか

では、なぜ主格には格詞がないのか、ということが疑問になる。

日本語ではある他動詞があれば、その主語と目的語があるのは当然のことなので、わざわざ格詞を用いてそれを明示する必要はなかった。

たとえば、

C1-27) みな人, 乾飯のうへに涙 落としてほとびにけり。(伊勢・9)

(人はみなく悲しくなり)乾飯の上に涙を落としたので乾飯がふやけた。)

という例に、「落とす」という他動詞がある。この他動詞に主語と目的語があるのは当然のことなので、主語「みな人」、目的語「涙」はわざわざ格詞を用いなくともそれと知れる。主格、目的格には元来格詞が必要なかったのである。しかもこれは日本語に限らず、多くの言語に共通のことである。

しかし、日本語の主語は「が」や「は」で表されるではないか、ということが次に疑問になる。

「が」は元来「の」と同じで、名詞と名詞をつなぐ（名詞で名詞を修飾する）機能をもつていて「君が代」「君が道」のように使用されていたが、歴史上の次の段階で動詞もこの名詞を修飾するようになり、「君が<行く>道」の形式が発生し、さらに次の段階で「<君が行く>道」のように文が名詞を修飾しているように感じられるようになり、「君」は名詞(道)を修飾する文の中の「主語」を表すものようになった。この時から「が」が制約された主格詞となつた。その後、「<君が行く>道」の従属節(修飾節)が独立する形で「君が行く。」という独立文(主文)が生まれ、「が」が主文の主語を表すようになつた。この最後の段階は鎌倉・室町時代のころに始まり、現代まで続いている。

C1-28) 「君が道」 名詞つなぎ (先史時代から)

↓

C1-29) 「<君が行く>道を焼き滅ぼす」 従属節内主格 (先史時代から)

↓

(万葉集3724参照)

C1-30) 「君が行く。」 主文主格 (鎌倉・室町時代から)

この格詞「が」は、もともと従属節内にある主語を表すものとして発生したので、主文の主語を表すようになってからも制約を受けており、すべての主格を表すことができるようになってはいない。このことについて次に述べる。

## C1.5 (4) 基本3主格

主格には、「ある事物について述べるための第1主格」、「出来事を述べるための第2主格」、「属性が先に決まっているときの主体を選び出すための第3主格」の3種類がある。詳しくは、『文法』2.2ないしA1章を参照されたい。ここには表C1-1を再掲載するにとどめる。

表C1-1 基本3主格

構造形式との関係	分類	分類の基準 主体と属性の設定順序	主格の下位分類 (名称)
	全構造形式に共通	主体の設定が先	
		主体と属性の設定が同時	第2主格／が <sub>1</sub> 格
		属性の設定が先	第3主格／が <sub>2</sub> 格

表A1-1 (再掲載)

## C1.5 (5) 「が」は第1主格主語(本来的な主格主語)を表せない

(3)すでに述べたが、格詞「が」はもともと従属節内にあった主語を表すものなので、主語としては制約があり、今日でもその制約内にある。つまり、「が」が表すことのできる主格主語は、第2主格主語と第3主格主語なのであって、第1主格主語を表すことはまだできるようになってはいない。

C1.5 (6) 第1主格主語は「θ<sub>1</sub>」か「θ<sub>1</sub>は」で示される

「が」が表すことのできない第1主格は、現代語でもまだ格詞がなく、「θ<sub>1</sub>」のままである。それで、第1主格「主語」は C1-31) ～32) のように「θ<sub>1</sub>」ないし相対化描写詞の「は」がついた「θ<sub>1</sub>は」という形で示される。音声では「θ<sub>1</sub>」では無音、「θ<sub>1</sub>は」では「は」だけの形となる。

C1-31) 君θ<sub>1</sub>歌う。 (君歌う。)

C1-32) 君θ<sub>1</sub>は歌う。 (君は歌う。)

## C1.5 (7) 主題主語、事象主語、話題主語

現代語では以下のように、主語を表すのに基本的に「θ<sub>1</sub>、が、は」の表し方がある(「は」ではなく「も、こそ、しか」などが使用されることもある)。このそれぞれは次のように名付けて把握しやすくすることにしている。

C1-33) 君θ<sub>1</sub>は歌う。 「主題主語」

この主語ではすでに述べた主題化の「は」が使われているので「主題主語」とする。その名詞をとりたてて、それについて語るという気持ちがある。

C1-34) 君が歌う。 「事象主語」

この主語は、出来事の主語を表現するので「事象主語」とする。

次のように、「は」も「が」も使用しない、格詞が無音の「0」だけのものは「話題主語」とする。ポーズ(「、」で示す。)が置かれることが多い。

C1-35) 君0、歌う。 「話題主語」

これは、特に「話し言葉」において、主題化せずにそれについて述べようという気持ちを表す主語の形である。(改まった気持ちになっている書き言葉では一般に「話題主語」は使用せず、「は」を用いた「主題主語」を使用する。)

この「主題・事象・話題」という用語は、次項のように客格の場合にも適用できる。

## C1.5 (8) 主題客語、事象客語、話題客語

## [を格]

C1-36) 源氏物語をは読んだ。 「主題客語」

C1-37) 源氏物語を読んだ。源氏物語を読んだ。 「事象客語」

C1-38) 源氏物語を、読んだ。 「話題客語」

## [に格]

C1-39) 田中さんには知らせた。田中さんをは知らせた。 「主題客語」

C1-40) 田中さんに知らせた。田中さんを知らせた。 「事象客語」

C1-41) 田中さんを、知らせた。 「話題客語」

## [へ格]

C1-42) 北海道へは行きました。北海道をは行きました。 「主題客語」

C1-43) 北海道へ行きました。北海道を行きました。 「事象客語」

C1-44) 北海道を、行きました。 「話題客語」

なお、第2主格は、鎌倉・室町時代ごろに格詞「が」で示されるようになったのだが、下記の例のように、古代語においては格詞「を」で示されてた場合もあると考えられる(『発展A』A2.4参照)。今後さらに考察を進めたい。

## [従属節内主語]

C1-45) [乙女らを袖振る] 山の瑞垣の久しき時ゆ思ひけり我は

(乙女たちが袖を振る、その布留山の神垣のように、久しい間思つてきた  
よ。私は) (万葉 11/2415)

## [ミ語法従属節内主語]

C1-46) 采女の袖吹き返す明日香風 [京を遠み] いたづらに吹く

〈采女らの袖を吹き返していた明日香風は、(藤原の新しい)都が遠いので、むなしく吹いている。〉  
(万葉 1/51)

C1.6 主語の現れ方……基本3形式 ( $\emptyset_1$ , ガ, は), 8種類の基本主語

前節で主語は「 $\emptyset_1$ , ガ, は」の形で表されることを述べたが、さらに細かく考察すると、実は8種類のものとして分類することができることが分かる。一覧表の形になっているので、ここに図C1-2として再掲載しておく。それぞれの主語に名称が与えられている(『文法』3.4 参照)。

表C1-2 8種類の主語(1)

格	は	主語の実現形式	主語の種類	例 文
①	$\emptyset_1$	ナシ ~ $\emptyset_1$	ナシ	話題主語 あの鐘、鳴る。
②	は	~ $\emptyset_1$ は (内部重点) は (外部重点)	主題主語	あの鐘は鳴る。
③			対比主語	あの鐘は鳴る。
④	ナシ	~ ガ <sub>1</sub>	事象主語	鐘が鳴ってる。
⑤		~ <del>ガ<sub>1</sub></del> ナシ	事象話題主語	鐘、鳴ってる。
⑥	が <sub>1</sub>	~ <del>ガ<sub>1</sub></del> は (内部重点) は (外部重点)	事象主題主語	鐘は鳴ってる。
⑦			事象対比主語	鐘は鳴ってる。
⑧	が <sub>2</sub>	ナシ ~ ガ <sub>2</sub>	選択主語	あの鐘が鳴る。

表3-2 (再掲載)

この表中の8種類それぞれの主語について簡単に述べておく。

- ① 話題主語「~  $\emptyset_1$ 」………… その主体について口語的に述べる。
- ② 主題主語「~  $\emptyset_1$ は」………… その主体について述べる。
- ③ 対比主語「~  $\emptyset_1$ は」………… 他の主体との対比でその主体について述べる。
- ④ 事象主語「~ ガ<sub>1</sub>」………… その出来事について述べる。
- ⑤ 事象話題主語「~ ~~ガ<sub>1</sub>~~」………… 出来事について話題主語で述べる。
- ⑥ 事象主題主語「~ ~~ガ<sub>1</sub>~~は」………… 出来事について主題主語で述べる。
- ⑦ 事象対比主語「~ ~~ガ<sub>1</sub>~~は」………… 出来事について対比主語で述べる。
- ⑧ 選択主語「~ ガ<sub>2</sub>」………… 先決の述語に対する主語を選んで補う。

## C1.7 二重主語 6種類……機能主語 12種類

## C1.7 (1) 6種類の複主語……6種類の複主体構造

日本語には複主体の構造がある。複主体の構造とは、基本的に1つの属性に2つ（以上）の属性が立つ構造である。これには6通りの形式があるが、複主体構造におけるそれぞれの主体と、単主体構造における主体のあり方を数えると、12通りの異なる主体のあり方として捉えられることになる。『発展A』A1章でこれを扱い、表A1-2を得た。ここに表C1-3として再掲載しておく。

表C1-3 12機能主格

表A1-2（再掲載）

構造形式との関係		構造分類	属性と主体	機能による分類	
構 造 形 式 に 依 存 す る 主 格	単主体構造	A	1属性に1主体が立つ	(無標)主格	1
	複主体構造	B	1属性に複主体	感觉主格	2
				帶感主格	3
		C	単位構造が属性 (結果的に複主体)	本主格	4
				属性主格	5
		D	動・態各属性に主体 (結果的に複主体)	行為主格	6
				態主格	7
		E	-テアルの目的語が主体 (結果的に複主体)	テ主格	8
				対テ主格	9
		F	属性実現の時場が主体 (結果的に複主体)	時場主格	10
				(他の機能主格)	
		G	主体と数量主体の置換 (時差をおく複主体)	時差主格	11
				数量主格	12

複主体は描写されて文中に置かれると、そのまま「複主語」となる。

なお、C1.5(4)で「基本3主格」について触れたが、それらは単主体構造、複主体構造のいずれにも共通する主格のあり方である。それに対して、ここで述べる12種類の主格のあり方は、機能を持つ構造のあり方に依存したものであるので、「12機能主格」と呼ぶことになっている。

なお、「水が飲みたい」の「水」のような「対象語」といわれるものは、表中[3]の「帶感主格」にある「帶感主体主語」にあたる。本文法では、すべ

ての「が」を主格として捉え、すべての「が」で格表示される実詞（名詞）を主語と捉えている。

### C1.7 (2) 12機能主格……12種類の主体……12種類の主語

ここで、表中の12機能主格のそれぞれについて簡単に述べておく（詳しくはA1章を参照されたい）。主体が描写されて主語になるので12種類の主語について簡単に述べることになる。

#### C1.7 [A] 単主体構造

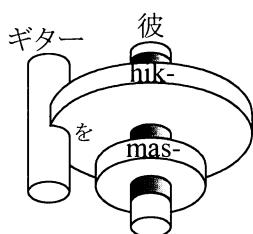
##### [1] 主体（無標主体、典型的主体）……（単主体）主語

1つの属性に対して1つの主体が立つものを単に「主体」という。この主体は典型的な主語となる。

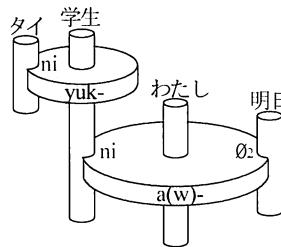
C1-47) 彼 $\emptyset_1$  はギターを弾きます。

C1-48) わたし $\emptyset_1$ 、タイに行く学生に、明日 $\emptyset_2$ 会う。

「彼」は属性 hik-i=mas- の单一の主体であり、「わたし」も属性 a(w)- の单一の主体である。ともに典型的な主語となっている。



図C1-19 彼 $\emptyset_1$ はギターをhik-i=mas-



図C1-20 わたし $\emptyset_1$ 、学生にa(w)-

#### C1.7 [B] 1属性に複主体が立つ複主体構造

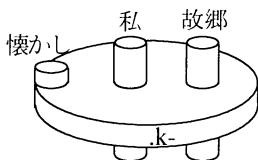
##### [2] 感覚主体……感覚（主体）主語

##### [3] 帯感主体……帯感（主体）主語

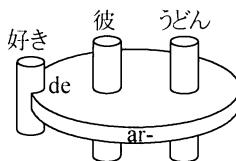
C1-49) 私 $\emptyset_1$ は故郷が懐かしい。（図C1-21）

という構造において、感覚的な属性「懐かしい」に対して、「私」は「それを感じる」という形でその属性を直接に保持する主体「感覚主体」となっており、「故郷」は感覚主体「私」の感覚の中で「その感じを帶びている」という形でその属性を直接に保持する主体「帯感主体」となっている。つまり、「私」は

「**感覺(主体)主語**」であり、「故郷」は「**帶感(主体)主語**」である。



図C1-21 私 $\emptyset$ は故郷が懐かし。k-



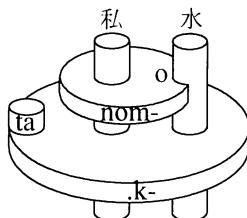
図C1-22 彼 $\emptyset$ はうどんが好き-d=a-

C1-50) 彼 $\emptyset$ はうどんが好きだ。(図C1-22)

についても同じことが言え、「彼」が「**感覺主体**」「**感覺(主体)主語**」であり、「うどん」が「**帶感主体**」「**帶感(主体)主語**」である。

C1-51) 私 $\emptyset$ は水が飲みたい。(図C1-23)

の場合は「水を飲む」という構造が上にあるが、「(飲み)たい」という属性に対して、「私」は「**感覺主体**」「**感覺(主体)主語**」であり、「水」が「**帶感主体**」「**帶感(主体)主語**」である。この構造については『文法』21.2 を参照。

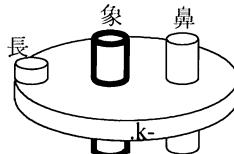


図C1-23 私 $\emptyset$ は水が nom-i=ta. k-

## C1.7 [C] 単位構造が属性となる複主体構造……結果的に複主体を構成

[4] 本主体……本(主体)主語

[5] 属性主体…属性(主体)主語



図C1-24 象 $\emptyset$ は鼻がnaga. k-

C1-52) 象 $\emptyset$ は鼻が長い。(図C1-24)

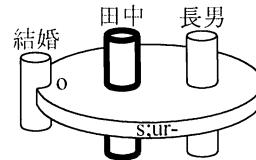
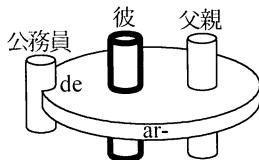
の構造では「象」という主体が「鼻が長い」という単位的な構造全体を属性と

して持っている(『文法』19.2)。「鼻」は「鼻が長い」という属性の中での主体である。それで、「鼻」を「属性主体／属性(主体)主語」と呼び、「象」を「本主体／本(主体)主語」と呼ぶ。本主体は太線で図示する。)

C1-53) 彼 $\emptyset_1$ は父親が公務員だ。(図C1-25)

C1-54) 田中さん $\emptyset_1$ は長男が結婚する。(図C1-26)

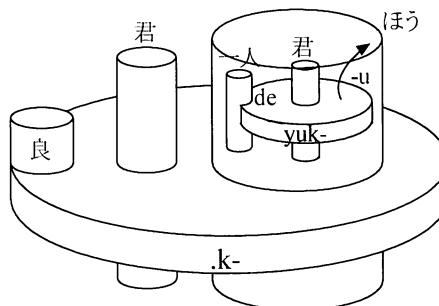
でも同じで「父親・長男」が「属性主体」「属性(主体)主語」であり、「彼・田中さん」が「本主体」「本(主体)主語」である。



・図C1-25 彼 $\emptyset_1$ は父親が公務員-de=ar- 図C1-26 田中さん $\emptyset_1$ は長男が結婚=s-  
なお、この構造に準ずるものとして次の2つものがある。

C1-55) 君 $\emptyset_1$ は一人で行くほうがいい。「ほうがいい」慣用表現(図C1-27)

この構造では「<一人で行く>ほう」という包含実体が属性主体になっている。これから先、つまり未来のことに対する忠告になっている。もし「一人で行ったほうがいい」という表現であれば、「た」(相対テンス)が使用されているので、未来のことであっても「行く」ことの実現後がイメージされている。



図C1-27 君 $\emptyset_1$ は一人で行くほうがいい

また、2つのうちのもう1つの構造は次のような文の構造である。

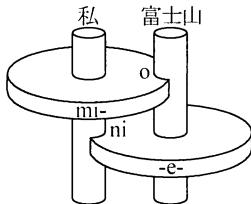
C1-56) あなたの話 $\emptyset_1$ は疲れる。

この構造については、C 2章で「疲れる文」として詳述する。

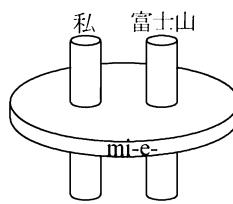
## C1.7 [D] 態複主体構造

[6] 行為主体……行為(主体)主語

[7] 態主体………態(主体)主語



図C1-28

私 $\emptyset_1$ は富士山が mi-e-

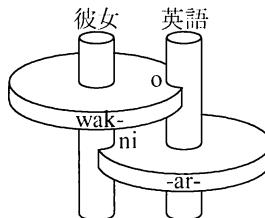
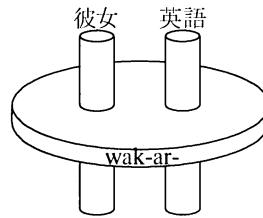
図C1-29

C1-57〉 私 $\emptyset_1$ は富士山が見える。(図C1-28, -29)

この文では「富士山」が主語になっている。これは「富士山」が「許容態 -e-」の主体になっているからである。図C1-28 のような態構造になっており、「私」という mi- の「行為主体」「行為(主体)主語」があり、また「富士山」という -e- の「態主体」「態(主体)主語」がある。この mi-e- が一語化した構造になると、図C1-29 のように完全な複主体構造となる。

C1-58〉 彼女 $\emptyset_1$ は英語が分かる。(図C1-30, -31)

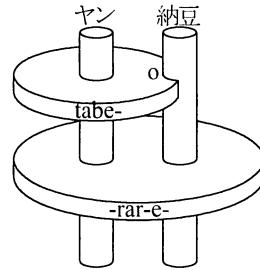
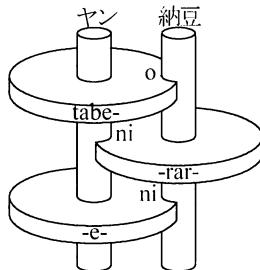
の文でも同じで、「彼女」が英語を「wak-」（理解・識別・判別するの意味の古語）の「行為主体」「行為(主体)主語」であり、「英語」が受影態 -ar- の「態主体」「態(主体)主語」である。一語化して複主体構造となる。

図C1-30 彼女 $\emptyset_1$ は英語が wak-ar-

図C1-31

C1-59〉 ヤンさん $\emptyset_1$ は納豆が食べられる。(図C1-32, -33)

の場合も同様であるが、「ヤンさん」は tabe- の「行為主体」「行為(主体)主語」でありながら、許容態 -e- の「態主体」「態(主体)主語」にもなっている。「納豆」は受影態 -rar- の「態主体」「態(主体)主語」である。



図C1-32 ヤンさんøは納豆が tabe-rar-e- 図C1-33

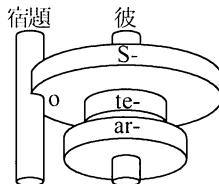
### C1.7 [E] 一テアル複主体構造

[8] テ主体………テ(主体)主語

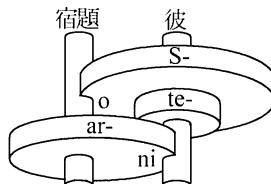
[9] 対テ主体………対テ(主体)主語

C1-60》彼øは宿題がしてある。

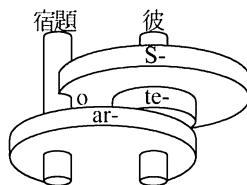
この複主体主語の場合はこう考えられる。



図C1-34 彼øは宿題をしてある



図C1-35 (彼には)宿題がしてある



図C1-36 彼øは宿題がしてある

C1-61》彼øは宿題をしてある。(図C1-34)

C1-62》(彼には)宿題がしてある。(図C1-35)

という2つの単主体構造があつて、両者ともに属性が ar- である。この共通の

属性が両主体の共有となることができるため、図C1-36のような複主体構造が生じる。その結果として次の二重主語の描写文が得られる。

C1-63) 彼 $\emptyset_1$ は宿題がしてある。(図C1-36)

このとき、「彼」は =te- 属性を持つので「テ主体」「テ(主体)主語」と呼び、動詞属性 s- の「を」格にある「宿題」を「対テ主体」「対テ(主体)主語」と呼ぶことになる。

### C1.7 [F] 時場複主体構造

#### [10] 時場主体……時場(主体)主語

C1-64) 彼 $\emptyset_1$ は明日 $\emptyset_2$ 忙しい。(図C1-37)

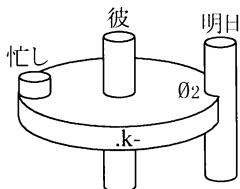
C1-65) 彼 $\emptyset_1$ は経済に明るい。(図C1-38)

の構造はそれぞれ図C1-37、図C1-38のようになっている。

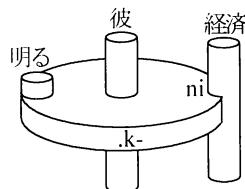
ところが、時を表す「 $\emptyset_2$ 」格に立つ「明日」と、「(認識の)場」を表す「に」格に立つ「経済」が次のように主格に立つことがある。

C1-66) 彼 $\emptyset_1$ は明日が忙しい。(図C1-39)

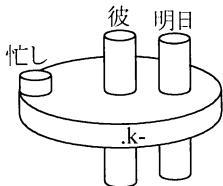
C1-67) 彼 $\emptyset_1$ は経済が明るい。(図C1-40)



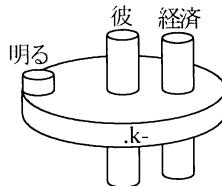
図C1-37 彼 $\emptyset_1$ は明日 $\emptyset_2$  isogasi. k-



図C1-38 彼 $\emptyset_1$ は経済に akaru. k-



図C1-39 彼 $\emptyset_1$ は明日が isogasi. k-



図C1-40 彼 $\emptyset_1$ は経済が akaru. k-

これは、属性が状態性である場合に「時・場」を表す実体「明日」「経済」がその「状態」を実現させる「時・場」の主体であると感じられるためであり、

その結果として複主体構造が生まれる。このような、元来は「時と場」の格にある実体が主格に立ったものを「時場主体」「時場(主体)主語」という。

次のような場合もある。

C1-68》 彼 $\emptyset_1$ は明日からが忙しい。(図C1-42)

「明日から」は実体(名詞)に格詞が付いたもので、これが主格の「が」を取っている。格詞に格詞が直接に続くのは文の中の現象であって、構造においては格詞が直接格詞に関わっているわけではない。

構造では図C1-41のようになっており、次のように表層化(描写)できる。

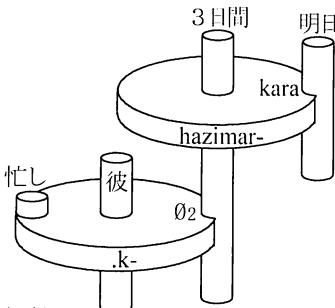
C1-69》 彼 $\emptyset_1$ は明日から [始まる 3 日間]  $\emptyset_2$ 忙しい。(図C1-41)

発話者は例えば「3日間」という実体(名詞)に相当する概念を抱いているはずである。この「3日間」が「時場主体」となって「が」を取るようになる。

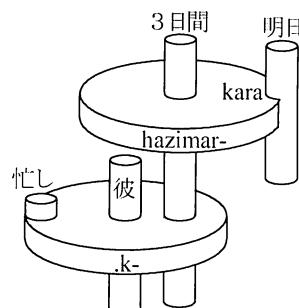
C1-70》 彼 $\emptyset_1$ は明日から [始まる 3 日間] が忙しい。(図C1-42)

そして、さらに [ ] 部分の省略が行われて次のようになる。

C1-71》 彼 $\emptyset_1$ は明日から が忙しい。(図C1-42)



図C1-41



図C1-42

明日から [始まる 3 日間]  $\emptyset_2$ 忙しい

明日から [始まる 3 日間] が忙しい

また、この構造に実体をつなぐ「の」を適用して描写することも可能である。

C1-72》 彼 $\emptyset_1$ は明日から の 3 日間  $\emptyset_2$ /が忙しい。(図C1-42)

もちろん、「が」のない

C1-73》 彼 $\emptyset_1$ は明日から忙しい。

の場合は

C1-74》 彼 $\emptyset_1$ は明日∅₂忙しい。(図C1-37)

の $\emptyset_2$ 格がカラ格に変わっただけである。図C1-37の「明日」がカラ格に移動す

るだけである。

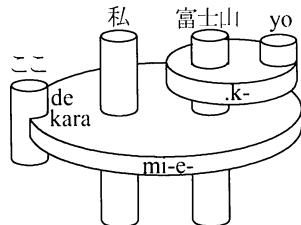
また、次のような場合もある。

C1-75) ここ で／から 富士山がよく (yo.k-u) 見える。 (図C1-43)

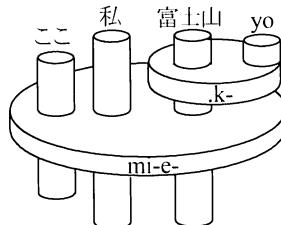
この例の「見える」は [D] の構造で (図C1-28, -29)，すでに複主体構造であるが、「ここ」が「で／から」格で「場」を表し，かつ「見える」が状態性であることから

C1-76) ここ θ1 は 富士山がよく (yo.k-u) 見える。 (図C1-44)

というふうに「ここ」が「時場(主体)主語」になることが可能である。このような場合にも「時場主体」が現れる。



図C1-43 ここで/から山が yo.k-u 見える



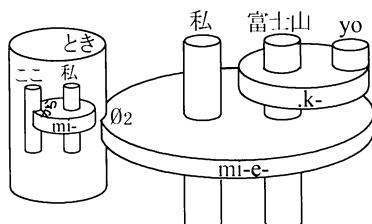
図C1-44 ここが山が yo.k-u 見える

C1-77) ここからが 富士山がよく (yo.k-u) 見える。 (図C1-46)

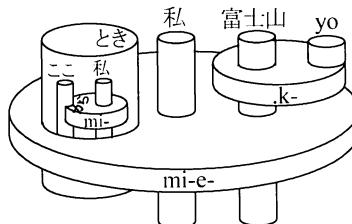
のときは「ここから見るとき」が「時場主体」となっていて、この中の「見るとき」が省略されている。

C1-78) ここから [見るとき] θ2 富士山がよく (yo.k-u) 見える。 (図C1-45)

C1-79) ここから [見るとき] が 富士山がよく (yo.k-u) 見える。 (図C1-46)



図C1-45



図C1-46

ここから [見るとき] θ2 よく見える

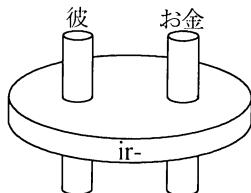
ここから [見るとき] が よく見える

さらに、「時場主体」は次のように語源に関わる場合もある。

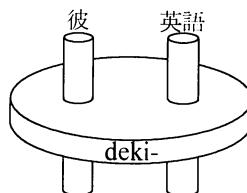
C1-80》 彼がお金が要る。 (図C1-47)

C1-81》 彼<sub>01</sub>は英語が出来る。 (図C1-48)

この場合、「要る」は語源的には「必要物に入る」の意味であり、「出来る」は「出現する」の意味であるが、「必要」「可能」の意味を持つ状態性の属性となっており、また、2つの「彼」はともに元来「に」格にあって（「彼に」）属性の成立する「場」を示すことから、両者は「(時)場主体」となることができたのである。



図C1-47 彼<sub>01</sub>はお金が要る



図C1-48 彼<sub>01</sub>は英語が出来る

### C1.7 [G] 数量複主体構造 (時差複主体構造)

[11] 時差主体……時差(主体)主語

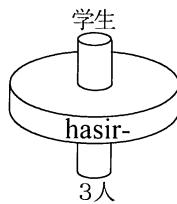
[12] 数量主体……数量(主体)主語

C1-82》 学生が3人が走る。 (図C1-49)

この構造は、実体「学生」と数量実体「3人」が時差をとて同一格（この例では主格）に立つものである。2実体が時差をとて同一格に立つ場合、日本語ではどちらかの格詞を消去する必要がある。

C1-83》 学生<sub>01</sub>3人が走る。 (図C1-49)

というように前の格詞を消去することもできる。



図C1-49 学生が3人が走る hasir-／学生<sub>01</sub>3人が走る hasir-

基本的に上にあるものが先に、下にあるものが後に、時差をもってその格位

置に置かれる。異なる主体が同一属性の上に立つのであるから、これも複主体の構造である。実体(学生)の立つ格を「時差主格」とし、ここに立つ主体を「時差主体」「時差(主体)主語」とし、数量実体(3人)の立つ格を「数量主格」とし、ここに立つ主体を「数量主体」「数量(主体)主語」とする。

C1-84) 学生①は3人~~が~~走る。(図C1-49)

C1-85) 学生①は3人~~が~~は走る。(図C1-49)

のように「は」を付けることもできる。このとき数量(主体)主語に「は」の付いた「3人~~が~~は」では「3人」を「2人」や「5人」「10人」等との「対比」においてとらえており、「少なくとも3人」の意味になっている。

以上のように、本文法ではすべての「が」格詞で示される格は、「主格」であると考えている。(このC 1 章は前著の要約的記述なので、分かりにくいかもしれない。改めて前著に当たっていただければと思う。)

### コラム 1 私の願い……文法を化学のような科学に

私には1つの大きな夢がある。1つであって2つではない。(日本語)  
文法を化学のような科学にするという夢である。

日本語の文法はすでに研究しつくされており、これから若い研究者が入っていく余地はない、と考える人もいる。先人たちの行っていた研究方法を探るならば、そうかもしれない。しかし、その方法は唯一の正しい方法とはいはず、非常に日本の要素がある。

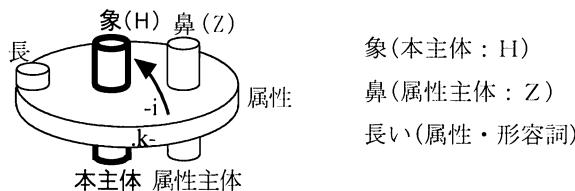
日本語の文法は言語学の基本どおりに正確な形態素分析を行うのがよく、それらの形態素が構造を作り上げる原則を見いだすのがよいのである。構造の基本は非常に単純で、実体(名詞的なもの)と属性(動詞、形容詞等)とそれを関係づける「格」によって構成されていて、立体モデルで示すことができる。テンス・アスペクト等もモデルによって容易に把握できるようになる。

私は還暦はとうに過ぎた。「文法を化学のような科学にする」という夢を若い研究者に託したいと思う。

## コラム2 二重主語の形容詞も多い

日本語では形容詞で名詞を修飾する際、形容詞だけでは意味が曖昧になることがある。①「長い象」、②「遠い彼」がその例であるが、③「多い彼」、④「ない私鉄」となると意味不明に近くなる。

①「長い象」は「象は鼻が長い」(図Cコ2-1)という二重主語(二重主格)の構造を持っていて、形容属性(長い)のみで本主体(象:H)を修飾するためにこの曖昧な表現になってしまふのである(『文法』第19章〔特徴2〕参照)。この構造では「象(H)」という本主体が「鼻(Z)が長い」という単位構造全体を属性としているので、「鼻(Z)の／が」を補って、「鼻(Z)の／が長い象(H)」としなければならない。



図Cコ2-1 象は鼻が長い(naga.k-i) (kは発音されない。)

②「遠い彼」は「彼(H)は家(Z)が遠い」の構造を持つので、「家(Z)の／が遠い彼(H)」としなければならない。③「多い彼」、④「ない私鉄」は、③「口数(Z)の多い彼(H)」、④「スト(Z)がない私鉄(H)」とする。

一方、⑤「美しい彼女(H)」、⑥「おいしい魚(H)」などの意味が明瞭な形容詞では、属性主体(Z)が一定のもの(容姿・味)に固定していると考えられる。それで、わざわざ属性主体(Z)を言う必要がないのである。「彼の車は(色が)白い」「ここは(気温感覚が)暑い」も同じである。

このようなことから、日本語の形容詞は二重主格の構造において使用されているものも多いと考えられる。属性主体(Z)が自明の形容詞は「Z」を言う必要がないか、単主語で使用されるのである。そう考えると形容詞の、特に名詞修飾の場合の説明がしやすくなる。

## C 2 章

## 疲れる文(因果の複主体)

## C2.0 原因ー結果の複主体構造

「あなたの話は疲れる。」の文で「疲れる」のは話を聞く発話者であり、「話」そのものが疲れるわけではない。この種類の文は「こんにゃくは太らない。」という文から「こんにゃく文」と言われることもある。ここでは、その構造を「複主体構造」の一種で、「属性としての単位構造が結果の事態を表し」、「本主体がその原因となっている」構造として捉える。これは『文法』第19章「複主体」及び C1.7[C]に位置付けられる項目である。次の順に述べる。

## C2.1 「あなたの話は疲れる」はどんな構造をしているか

「あなたの話は疲れる」は「話」が「疲れる」わけではない。

## C2.2 「あなた=の=話」は便宜的に1実体(1名詞)として扱う

## C2.3 「あなたの話」は何格にあるか……「に／で」格、「が」格

「あなたの話に／で／が疲れる」 なぜ「が」格も？

## C2.4 「あなたの話」と「私」がともに主格にある……複主格

「あなたの話(が)は私が疲れる」

## C2.5 複主体構造……本主体が単位構造を属性とする

## C2.6 原因ー結果の複主体構造

本主体(原因)が属性単位構造の事態(結果)を引き起こす。

## C2.7 構造Aと構造B(因果の複主体構造)の違い

「田中さんは長男が結婚する」と「あなたの話は(私が)疲れる」

## C2.8 構造Aの特徴がそのまま構造Bの特徴であるわけではない

構造Aの「特徴1：明瞭な関係」は構造Bに適合しない。

## C2.9 二義性の存在

「田中さんは疲れる」が二義文であること。

## C2.1 「あなたの話は疲れる」はどんな構造をしているか

ここに次のような文がある。

C2-1) あなたの話は疲れる。

これはごく自然に発話される文であるが、次の文と比べると、おかしな文であることに気がつく。

C2-2) 私は疲れる。

つまり、「私」は有情物であり、心理を持つので、「私」が「疲れる」のは当然のこととして理解できるのであるが、なぜ、非情物で心理を持たない「話」が「疲れる」のか、という疑問がわく。主語—述語の結びつきに疑問がわく。同様の例として次のような文もある。

C2-3) 遅刻は困る。

C2-4) サッカーは興奮する。

また、心理の問題ではないが、やはり主語—述語の結びつきに疑問のある文がある。

C2-5) 肉は太る。

C2-6) エアコンは冷える。

いずれも日常自然に発話される文であり、特に不自然さは感じられないが、文法的に構造を考えようすると、「犬が走る。」のような単一の主語—述語の関係にないことに気がつく。

では、「あなたの話は疲れる。」のような文はいったいどのような構造をしているのだろうか。考えてみたい。

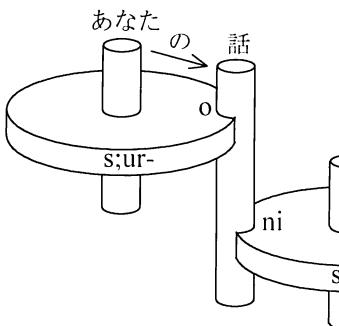
## C2.2 「あなた=の=話」は便宜的に1実体（1名詞）として扱う

「あなたの話」は「あなたが話をする」の構造から「の」つなぎ(『文法』3.6.1～6.2)によって描写されたものなので、正確には「あなた=の=話」のように3要素に分解できる。例えば

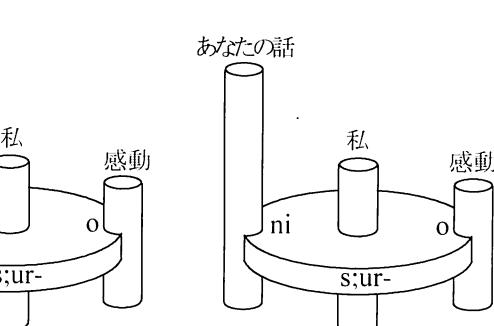
C2-7) 私はあなたの話に感動する。

のような文の構造は図C2-1のようになっている。

しかし、考察を単純にするために「あなた=の=話」を1つの実体(名詞)「あなたの話」のように扱うことにして、図C2-2のように表示することにする。



図C2-1 あなたの話に感動する



図C2-2 あなたの話に感動する

## C2.3 「あなたの話」は何格にあるか……「に・で」格、「が」格

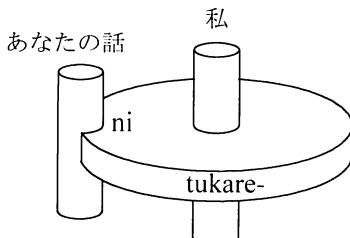
さて、「あなたの話は疲れる。」という文において問題なのは、「は」が使用されているために「あなたの話」が何格にあるのかが明示されていないことである。「あなたの話」は属性「疲れる」に対して何格にあるのだろうか。「あなたの話」の格が何格であるかを考えるために、「は」を外して、11の格表示形式（格詞）リストの中から当てはまるものを探すことになる。

C2-8) あなたの話

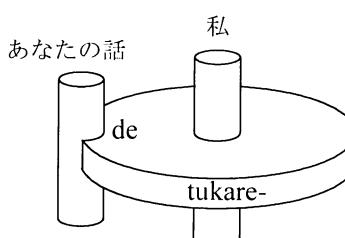
θ₁／が／を／に／へ／で／と／より／から／まで／θ₂

疲れる。

この11の格表示形式の中から、音声形式のある格を当てはめてみると、まず、「に」と「で」の可能性のあることがわかる。

C2-9) あなたの話 に 疲れた。(図C2-3) （「た」の図示は省略）C2-10) あなたの話 で 疲れた。(図C2-4) （「た」の図示は省略）

図C2-3 あなたの話に疲れた



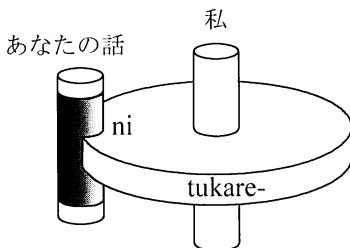
図C2-4 あなたの話で疲れた

このような「に」格、「で」格の場合は、特に問題はない。実体「あなたの話」が「原因」を表す「に」格や「で」格に立ったものと考えられるからである。このとき「疲れる」主体は「私」であるものと想定できる。

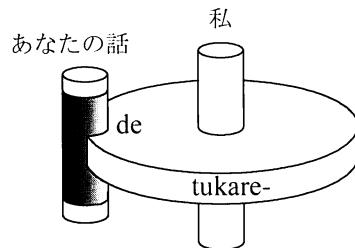
「は」をつけて「主題化・対比化」することもある。

C2-9'〉(私 $\theta_1$ )あなたの話 (に) は 疲れた。(図C2-5)

C2-10'〉(私 $\theta_1$ )あなたの話 (で) は 疲れた。(図C2-6)



図C2-5 あなたの話(に)は疲れた



図C2-6 あなたの話(で)は疲れた

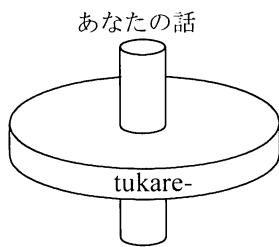
この「に」「で」2つの格では、意味的には若干の違いはあるものの、構造的には問題がない。問題なのは

C2-11〉あなたの話 が 疲れる。(図C2-7)

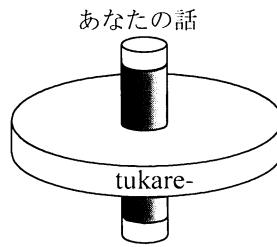
のように「あなたの話」が「が」格にあると考えられる場合である。

C2-12〉あなたの話 が いちばん $\theta_2$ 疲れる。

などと言うこともあり、感覚としては非常に自然である。



図C2-7 あなたの話 $\theta_1$ ／が疲れる



図C2-8 あなたの話 $\theta_1$ は疲れる

「は」をつけると「が」が発音されなくなるので、

C2-13〉あなたの話 $\theta_1$ は疲れる。／あなたの話 $\theta_1$ は疲れる。(図C2-8)

となるが、ここで問題になるのは、「話」がなぜ「疲れる」のかということである。「話」は非情物なので(修辞としてでなければ)「疲れる」はずがないか

らである。図C2-3～-6に見るように、「疲れる」の主格（主格実体）が「私」などの有情物であればこの問題はない。

C2-14) 私 $\emptyset_1$ は疲れる。

「あなたの話」が図C2-7～-8のように主格にあるときに問題なのである。

#### C2.4 「あなたの話」と「私」がともに主格にある……複主格

C2-1(再) あなたの話は疲れる。

と言うとき、私たちは

C2-15) あなたの話を聞くと、私は疲れる。

ということを表現しているのであり、「疲れる」のはやはり「私」なのであって、文には描写されていないけれども、構造においては実体「私」が「疲れる」の主格にあるはずである。また、実体「あなたの話」も「が格」にあるのであり、主格にある。

ということは、構造上では「私」と「あなたの話」の両方が「主格」にあるのであって、ここに複主体が見いだせることになる。

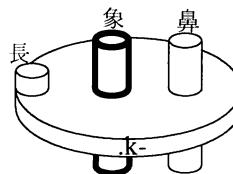
#### C2.5 複主体構造……本主体が単位構造を属性とする

「複主体」といえば、「疲れる」のように、属性が動詞（結婚=する）である場合の複主体の例として、次のような文があった。

C2-16) 田中さん $\emptyset_1$ は長男が結婚する。（図C2-9）（図C1-26）



図C2-9 田中さん $\emptyset_1$ は長男が結婚する



図C2-10 象 $\emptyset_1$ は鼻が長い

これは「単位構造を属性とする構造」（『文法』第19章）の複主体であるが、この複主体の場合は、

C2-17) 象 $\emptyset_1$ は鼻が長い。（図C2-10）（図C1-24）

という文において「象」が「鼻が長い」という単位構造を属性として保持して

いるのと同じように、「田中さん」は「長男が結婚する」という単位構造を属性として保持している。

実体「象」や「田中さん」を「本主体」といい、実体「鼻」や「長男」は属性(単位構造)を構成する主体という意味で「属性主体」ということになっていた。また、「本主体」は図のように太線で表示することになっていた。

## C2.6 原因ー結果の複主体構造

では、

C2-1(再)》あなたの話は疲れる。

の構造はどのようなものなのだろうか。この文は構造的には

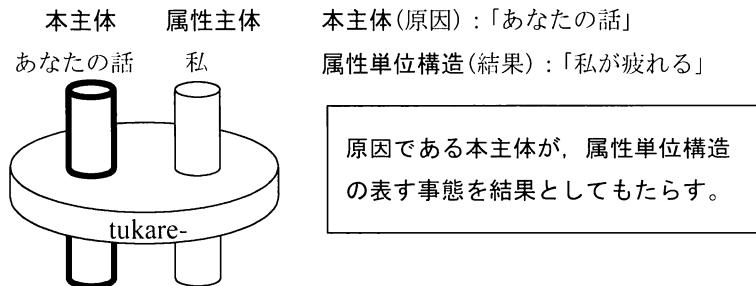
C2-18》あなたの話は私が疲れる。(図C2-11)

の形式を持つものとして考えられる。「あなたの話」という本主体が、「私が疲れる」という単位構造を属性として持つ、複主体の構造である。これは基本的に「単位構造を属性とする構造」(『文法』第19章)の複主体構造であるが、意味的には特徴があり、結果としての単位構造「私が疲れる」の原因になるものが本主体「あなたの話」であるということを表している。つまり、

原因である「本主体」(あなたの話)が結果として

「属性単位構造」(私が疲れる)の事態をもたらす

のである。この点において、『文法』第19章で扱った「単位構造を属性とする構造」とは異なっている(C2.7参照)。



図C2-11 あなたの話は私が疲れる  
あなたの話は 疲れる

◎なお、改めて言及するが、「本主体」は原因であるので、基本的に原因を表す格「で」格ないし「に」格に置くことが可能である。（図C2-3～-6）

### C2.7 構造Aと構造B（因果の複主体構造）の違い

ここで、似てはいるが異なる構造を「単位構造を属性とする＜構造A＞」とし、この構造を「単位構造を属性とする＜構造B＞」と呼び分けることにする。

構造Aは

C2-16(再) 田中さんθ₁は長男が結婚する。（図C2-9）

の構造で、本主体「田中さん」が単位構造「長男が結婚する」全体を属性として持っている。この構造では本主体が「結婚する」だけを属性として直接に持つわけではないので、属性主語（長男）を省略した次のような描写

C2-19) 田中さんθ₁は結婚する。（図C2-9）

はできない。「田中さん」その人が結婚するかのように意味が変わってしまうからである（『文法』19.3 特徴2参照）。

一方、構造B

C2-18(再) あなたの話θ₁は私が疲れる。（図C2-11）

では本主体「あなたの話」も同様に単位構造「私が疲れる」全体を属性として持つのであって、「疲れる」だけを属性として直接に持っているわけではない。しかしながら、

C2-20) あなたの話θ₁は疲れる。（図C2-11）

という描写ができる。属性主体（私）を省略しても意味が変わらないのである。

ここには常識の作用もある。

C2-19(再) 田中さんθ₁は結婚する。（図C2-9）

においては、「長男」ではなく、「田中さん」その人が「結婚する」意味になってしまふが、

C2-20(再) あなたの話θ₁は疲れる。（図C2-11）

においては、常識的に「あなたの話」そのものが「疲れる」はずではなく、「疲れる」のは発話者の「私」であることが了解される。日本語では常識上自明な要素は描写を省略することが多いので、属性主体である「私」は省略が可能なのである。言語の経済性から「構造上にあっても、その存在が聞き手に容易に

感知される(と話し手が判断する)要素はわざわざ描写しない」という原則が想定できる。

なお、次のような慣用的表現もこの構造Bの一種と思われる。

C2-21) 「絶世の美女」が聞いてあきれる。(「私」が「あきれる」)



図C2-12 「絶世の美女」が聞いてあきれる

「私」が「彼の奥さんは〈絶世の美女〉である」と聞いて、後日その実相を知った際にこう発話するわけであるが、その際には耳にする「絶世の美女」という表現が原因となって「あきれる」事態が発生する。やはり構造Bである。

さて、ここで、構造Bの「本主体」が原因となって属性単位構造の表す事態を結果としてもたらす複主体の例を、2種類に分けていくつか挙げてみたい。

「本主体」には普通「は」を使うが、主格にあることを確認するために「が」も表示しておく。

①常識的に「属性主体」が自明であって省略される例 ( )内に属性主体を記載

C2-22) この本が／は疲れるわ。(「私」が「疲れる」)

C2-23) 遅刻が／は困る。(「私」が「困る」)

C2-24) 肉が／は太る。(「人」が「太る」)

C2-25) この株が／は儲かる。(「金」が「儲かる」)

C2-26) 暖炉が／は暖まる。(「体」が「暖まる」)

C2-27) エア・コンが／は冷える。(「体」が「冷える」)

C2-28) 空きっ腹が／は悪酔いする。(「人」が「悪酔いする」)

C2-29) サッカーが／は興奮する。(「私」が「興奮する」)

C2-30) たばこが／は肺がんになる。(「人」が「肺がんになる」)

C2-31) ケーキが／は喜ぶ。(「彼」が「喜ぶ」)

②「属性主体」が自明でないので、属性主体（下線部）を省略しない例

C2-32) この映画が／は女性が(は)眠くなるよ。

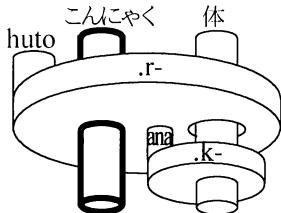
C2-33) ビールが／は話が弾む。

C2-34) 彼の挨拶が／は元気が出る。

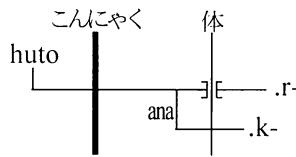
C2-35) この本が／は頭が痛くなる。

C2-36) 寝不足が／は判断が鈍る。

ちなみに、ここで「こんにゃくは太らない」の構造図を掲げておきたい。



図C2-13a



図C2-13b

金谷(2003)は「こんにゃく」を「で格」において解釈しようとしている。

## C2.8 構造Aの特徴がそのまま構造Bの特徴であるわけではない

構造Aには8つの特徴があった（『文法』19.3）が、構造Bにはこの特徴は必ずしも当てはまらない。たとえば、構造Aの特徴1を検討してみたい。

[特徴1] 明瞭な関係……構造Aにおいて属性主体(例：長男，鼻)として可能なのは、本主体(例：田中さん，象)と明瞭な関係をもつ実体である。

この特徴は上例で明らかのように、構造Bには必須のものではない。例えば、

C2-18(再) あなたの話は私が疲れる。

において、属性主体(私)は本主体(あなたの話)と明瞭な関係にある必要はない。

C2-23') 遅刻は私が困る。

の「私」も「遅刻」と明瞭な関係にはなく、

C2-31') ケーキは彼が喜ぶよ。

の「ケーキ」も「彼」と明瞭な関係にあるわけではない。

つまり、「特徴1」は構造Bに必須のことではないことがわかる。

「特徴2」以下についても検討の必要がある。

## C2.9 二義性の存在

ここで、構造Bが二義文を作ることに触れておきたい。

C2-18(例) あなたの話θ1は私が疲れる。(図C2-11)

と同様に、発話者が

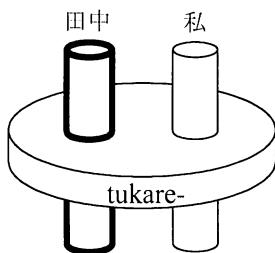
C2-37) 田中さんθ1は私が疲れる。(図C2-14)

という構造を作り、「私が」を省略して

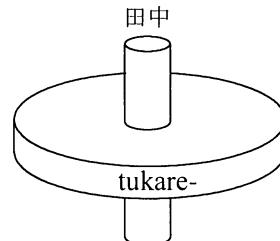
C2-38) 田中さんθ1は疲れる。(図C2-14)

と発話した場合、この発話文は、「田中さん」が直接に「疲れる」という属性をもつ単主体構造（単位構造）（図C2-15）から描写された文と同じになってしまう。つまり、「田中さんは疲れる。」の文では、「田中さんに対して私が疲れる」という読みばかりでなく、「田中さん自身が疲れる」という読みも可能な二義性が発生するのである。

この二義性が発生するのは、その構造が複主体の構造であっても、本主体（例：田中さん）が属性単位構造（例：私が疲れる）の属性（例：疲れる）そのものの直接の主体でもありうる場合である。それはつまり、本主体が属性主体と同じ有情物であると見なされる場合である。



図C2-14 田中さんθ1は私が疲れる  
田中さんθ1は 疲れる



図C2-15 田中さんθ1は疲れる

図C2-14から描写される2つの表層文のうちの1つは、図C2-15から描写される表層文と同じ形式「田中さんθ1は疲れる」になる。それで二義性が生じるのである。

以上、C1章の複主体構造[C]の一つとしての「因果の複主体構造」についてやや詳しい記述を行った。

## C 3 章

# 同格複実体描写

### C3.0 同格複実体描写

「同格複実体」というのは、ある属性に対して同じ格に立っている、異なる2つ(以上)の実体のことである。この異なる複数の実体をA, B (, C, D……)とすれば、同じ格に立つときのこの実体A, B (, C, D……)のあり方は3種類(C3.1～C3.3)に分類することができる。この複実体がどのように描写されて文になるのかについて考えたい。

#### C3.1 A, Bが対等な同格実体である場合の描写

「手帳(A)とカレンダー(B)を買った。」のような対等な実体A, Bが同じ格にあって列挙される場合を扱う。

#### C3.2 BがAの下位概念になっている同格実体である場合の描写

「葛飾(A)は柴又(B)に生まれた。」のような実体Aが主題となり、その下位概念Bが同じ格にあって限定を行う場合を扱う。

#### C3.3 BがAの数量を表す同格実体である場合の描写

「選手(A)は3人(B)メダルを取った。」のような実体Aの数量を表す実体Bが同じ格にある場合であるが、これは『文法』第38章「数量実詞」で述べたので、ここでは扱いを省略する。

#### C3.4 似ているが本章の対象にならないもの

「象(A)は鼻(B)が長い」の実体Aと実体Bはともに主格にあり、同格複実体のように見えるが、実は主格には12種類の機能主格があるので、厳密に言うと、これは同格とは言えない。それで、ここでは扱わない。A 1章で扱っている。C1.7も参照されたい。

## C3.1 A, Bが対等な同格実体である場合の描写

C3.0 に述べたが、「同格複実体」というのは、ある属性に対して同じ格に立っている、異なる2つ(以上)の実体のことである。この異なる2つ(以上)の実体をA, B(, C, D……)とする。

## C3.1.1 同格実体列挙描写

## [A, Bが主格にある場合]

いま、このような文がある。

C3-1) 私(A)と彼(B)が歌を歌う。

この文は分解して2つの文にすることができる。

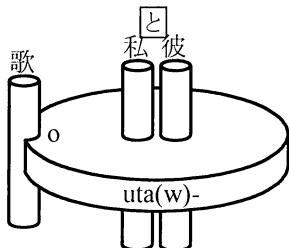
C3-2) 私(A)が歌を歌う。

C3-3) 彼(B)が歌を歌う。

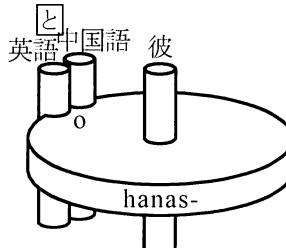
2つの文にして分かることは、C3-1) の文の「私」と「彼」は共に「(歌を)歌う」に対して主格にあることである。それで、このことを明確に示すとすれば、次のような発音されない〔が〕を伴う表示になる。

C3-4) 私[が]と彼が歌を歌う。

こうすれば両実体とも主格にあることが明確に示せる。そしてこの文を立体構造で示せば図C3-1のようになる。



図C3-1 私[が]と彼が歌を歌う



図C3-2 彼 $\emptyset$ は英語[を]と中国語を話す

この例では2実体は共に主格にある。この構造が描写されて文になるときは、2実体が列挙されるわけであるが、「私がと彼が」のようにはならないで、「私と彼が」のようになる。つまり、前の「が」は発音されずに、後の「が」が発音される。これは、実体がそれより多い場合でも同じである。

C3-5) 私と彼と鈴木さんとこうちゃんが歌う。

列挙される実体の最後の実体にだけ「が」が付く。このように描写される。

なお、主格には1つの問題がある。上と同じように考えると、

- C3-6) 象(A)<sub>01</sub>は鼻(B) が長い。 (象は鼻が長い。) (図C1-24)  
 という文において、「象」も「鼻」も主格にあるから、

C3-7) 象(A)[が]と鼻(B) が長い。 (象と鼻が長い。)

と言えるはずである。しかし、実際は「象と鼻が長い。」とは言わない。ここに主格の問題がある。つまり、「象／鼻」は同じ主格といっても、「象」は「本主格」にあり、「鼻」は「属性主格」にがあるので、両者は機能が異なる主格にある。つまり、主格といっても機能からみると、実は格が異なっているのであって、主格には12種類の機能主格が認められるのである(C1.7参照。また『日本語構造伝達文法』第VII部、及び『発展A』A1.5参照)。そこで、同格複実体が主格にあるときには、まず、どの機能主格であるかを明らかにする必要があるということになる。ちなみに

- C3-1) (再掲) 私(A)と彼(B)が歌を歌う。  
 の場合の主格は、両方とも機能主格としては「(無標)主格」である(表C1-3)。

さらに、次のような問題もある。同じ機能主格「(無標)主格」ではあっても、

C3-8) 咳(A)が止まった。

C3-9) 車(B)が止まった。

を1文にして、次のようにすることはできない。

C3-10) 咳(A)と車(B)が止まった。

ここには、意味の上で格の異なりがあるからである。このことについてはC3.1.4で述べることにする。

### [A, Bが客格にある場合]

複数の同一格に立つ実体A, Bが共に同一の客格にある場合もある。

- C3-11) 彼<sub>01</sub>は英語(A)と中国語(B)を話す。  
 この場合は「英語」と「中国語」が、属性「話す」に対して共に「を格」にある。このことを明示するためには次のような表示になる。

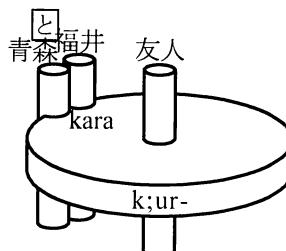
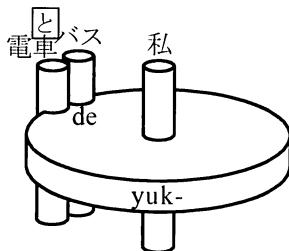
C3-12) 彼<sub>01</sub>は英語[を]と中国語を話す。

しかし、この[を]が発音されることはない。構造を図示すれば図C3-2となる。

さらに客格の他の格の例も挙げてみる。

C3-13) 私 $\theta_1$ は電車[で]とバスで行く。 (図C3-3)

C3-14) 友人 $\theta_1$ は青森[から]と福井から来る。 (図C3-4)



図C3-3 私 $\theta_1$ は電車とバスで行く 図C3-4 友人 $\theta_1$ は青森と福井から来る

同格実体は主格にある場合と客格にある場合があり、以上のように描写される。

### C3.1.2 同格実体列挙描写詞 と／に／や／θ／か

以上のような同じ格にある複数の実体を列挙するときに「同格実体列挙描写詞」が使用されるのであるが、これには上で見た「と」だけではなく、「に／や」がある(『文法』表5-6参照、19.3[特徴7]③、A1.3)。この3者には次のようなニュアンスがある。

と： すべてを取り上げる感じで列挙する。

私 $\theta_1$ は電車(A)とバス(B)で行く。

に： 先に取り上げたものに付け加えて取り上げる感じで列挙する。

彼 $\theta_1$ は英語(A)に中国語(B)を話す。

や： 代表的なものを列挙し、「など」を伴うことが多い。

友人 $\theta_1$ は青森(A)や福井(B)(など)から来る。

さらに θ の同格実体列挙描写詞もある。音声表現がないので、文中では「、」や「・」で表示する。

θ： 単に列挙する場合と、セット的な感覚で列挙する場合がある。

今度の旅行は、北京(A)、上海(B)を回る。

この製品の3色は、赤(A)・緑(B)・黒(C)である。

なお、選択のために列挙する「か」という描写詞もある。

か： 複数の実体が選択対象であることを示しつつ実体を列挙する。

私①は電車(A)かバス(B)かタクシー(C)で行く。

したがって、同格実体列挙描写詞は「と／に／や／θ／か」であることになる。

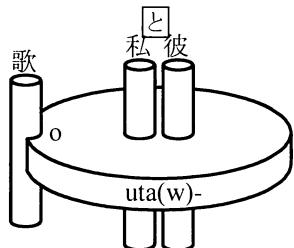
### [描写詞と格詞の区別] と／に

ここで同格実体列挙描写詞と格詞の区別について述べるが、「同格実体列挙描写詞」という名称は長いので「列挙描写詞」と省略することにする。

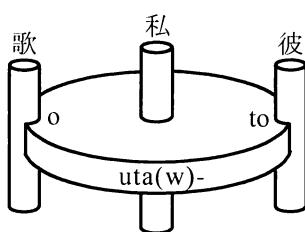
「列挙描写詞」の「と」と「に」は、格詞の *to* と *ni* とは異なるので注意が必要である。まず「と」から、次の組み合わせで例を示したい。

C3-15) 私と彼が歌を歌う。(列挙描写詞の「と」) (図C3-5)

C3-16) 私が彼と歌を歌う。(格詞の *to*) (図C3-6)



図C3-5 私[が]と彼が歌を歌う



図C3-6 私が彼と歌を歌う

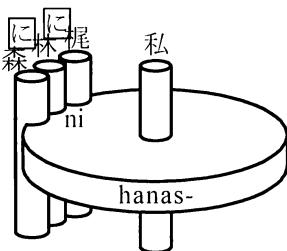
図で異なりがよく表されていると思うが、列挙描写詞の「と」(図C3-5)は同じ格(主格)にある2つの名詞を列挙している。一方、格詞の「と(to)」(図C3-6)は「名詞と動詞(実体と属性)の論理関係」(格)を示すものであり、この場合は、名詞「彼」が動詞「uta(w)-」行為の「随伴者」である、という論理関係(格)を示している。

「に」の場合は次の例で違いを示したい。

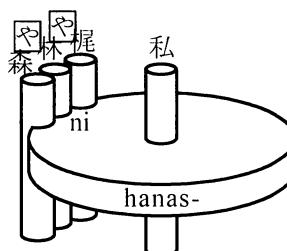
C3-17) 私は、森さんに林さんに梶さん *ni* 話す。 (図C3-7)

「森さんに林さんに梶さん」の中の「に」は列挙描写詞であり、つけ加えるような気持ちで列挙している。格は「話す」に対して「*ni* 格」にあるので、この発音されない情報も〔 〕内に入れて示せば、C3-18) のようになる。

C3-18) 私は、森さん[ni]に林さん[ni]に梶さん *ni* 話す。 (図C3-7)



図C3-7 森[ni]に林[ni]に梶ni話す



図C3-8 森[ni]や林[ni]や梶ni話す

文中の「話す」の直前にある ni は格詞の「に」である。この格詞の ni は 3 つの苗字を表す名詞「森／林／梶」が、動詞「話す」に対して「情報伝達の相手」であるという論理関係を示している。

この例で、もし同格実体列挙描写詞を「に」ではなく「や」にすることにすればこの関係がより分かりやすくなる。

C3-19) 私は、森さん[ni]や林さん[ni]や梶さん ni 話す。 (図C3-7)

また、言語では発話者が構造を描写して文にするときに一定の自由度があるので、C3-18) の文前部の 2 つの「に」を格詞を描写したつもりで発話して、C3-20) のようにすることも可能である。

C3-18(再掲) 私は、森さん[ni]に林さん[ni]に梶さん ni 話す。

C3-20) 私は、森さん ni  $\emptyset$  林さん ni  $\emptyset$  梶さん ni 話す。 (図C3-7)

この場合は、同格実体列挙描写詞が「に」ではなく「 $\emptyset$ 」のつもりで発話していることになる。表層化される文としては C3-18) と同じになるが、発話者が構造のどこを表層化しているのかの意識に違いがあるわけである（無意識でそういうしている場合もあるが）。

以上のように、特に「と」「に」の場合に、それが同格実体列挙描写詞なのか格詞なのかを見分ける必要がある。

## C3.1.3 公式化

この C3.1 で扱っているのは、複数の実体 A, B が意味的に対等な関係にある場合である。この場合の文の形の公式化を考えてみたい。

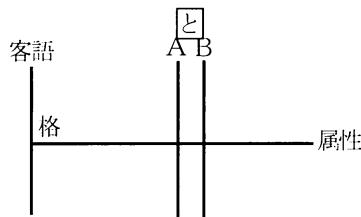
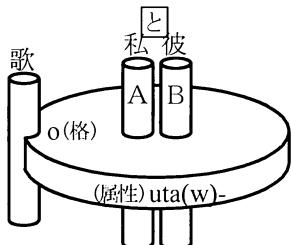
## [A, B が同一の機能主格にある場合]

両者が主格にある C3-21) の文を公式化して示せば、C3-22) のようになる。

C3-21) 私(A)と彼(B)が(歌を)歌う。

C3-22)  $A = \boxed{が}$  と／に／や／θ／か  $B - \boxed{が}$  (客語-格) 属性 (公式)

この公式化された文の構造図は図C3-9, 図C3-10 のようになる。



図C3-9  $A = \boxed{が}$  と／に／や／θ／か  $B - \boxed{が}$  (客語-格) 属性 図C3-10

図では と のかわりに に や θ か が置かれることもある。

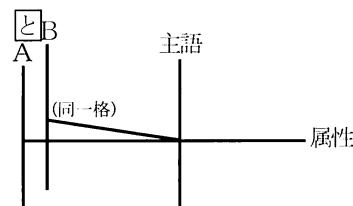
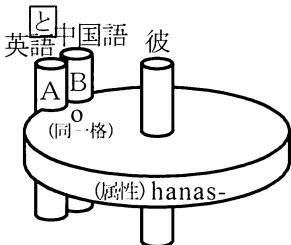
## [A, B が同一の客格にある場合]

また、A, B が同一客格にある C3-23) の文の場合は、公式化して示せば、C3-24) のようになる。

C3-23) 彼 $\theta_1$ は英語(A)と中国語(B)を話す。

C3-24) 主語- $\theta_1$ は  $A = \boxed{\text{格}}$  と／に／や／θ／か  $B - \boxed{\text{格}}$  属性 (公式)

図は図C3-11, 図C3-12 のようになる。



図C3-11  $A = \boxed{\text{格}}$  と／に／や／θ／か  $B - \boxed{\text{格}}$  属性 図C3-12

この図でも同じく、と のかわりに に や θ か が置かれることもある。

## C3.1.4 格詞が同じでも格が同じとは限らない

同一格であれば同一格詞で示されるが、逆に同一格詞であれば同一格かというと、そうでないことも多い。例えば、次の例でこのことを示すことができる。

C3-25) \*富士山(A)とスープの味(B)をみた。

おかしな文である。こんなことは日本語話者の一生の間にまず言ふことはない。

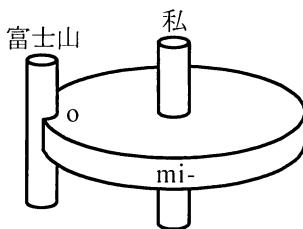
この文を分解して2つの文にする。

C3-26) 富士山(A)をみた。 (図C3-13)

C3-27) スープの味(B)をみた。 (図C3-14)

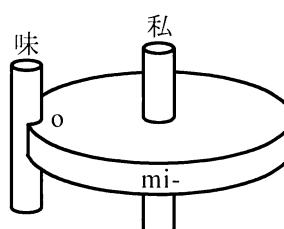
「富士山(A)」「スープの味(B)」の両者とも「みる」という属性の「を格」にあるから、同じ格にあるようであり、前の節で見たことから、C3-25)は文として成立してもよいはずである。しかし、成立しない。これは、「格」(論理関係)そのもので分析すると、両者が異なっているからである。

「富士山(A)をみる」の「を」格は、実体と属性が「視覚で存在を捉えられる物体」(実体)と「視覚で捉える行為」(属性)という論理関係にあることを示しているのに対して、「スープの味(B)をみる」の「を」格は、「味覚で様子を捉えられる様態」(実体)と「味覚で捉える行為」(属性)という論理関係にあることを示している。



mi- の意味が異なり、o の論理関係が異なる

図C3-13 富士山を mi-



図C3-14 味を mi-

つまり、同じ「を」で表現していても、一方は視覚に関わる行為(属性)と視覚の対象(実体)という論理関係があり、一方は味覚に関わる行為(属性)と味覚の対象(実体)という論理関係にあるのであって、格(論理関係)が異なっているのである。日本語では「対象」であれば「を」で示すことが普通であるが、「対象」(実体)と「動作」(属性)のあり方に多様な論理関係(多様

な格) があるのであって、「を格」といっても、「を格」は「を1格」「を2格」「を3格」「を4格」……のような異なる格の集合体であると考えざるを得ないことになっている(コラム4参照)。

このように「格詞」は同じでも、「格」が異なる場合には、格詞を1つにまとめて表現することはできないので、次のような例もおかしい文となる。

C3-28) \*図書館(A)とパソコン(B)で書いた。

「図書館(A)で書いた」の「で格」は「行為と場所」の論理関係を示すが、「パソコン(B)で書いた」の「で格」は「行為と用具」の論理関係を示しており、同じ「で格詞」でも、実質的には格が異なっている。それで文として成立しないのである。

同様に次の諸例も2つの格が異なるので文として成立しない。

C3-29) \*沖縄と第一巻から届いた。(「空間的起点」「順序の初め」)

C3-30) \*学校と迎えに来た。(「空間的着点」「行為の目的」)

C3-31) \*象と鼻が長い。(「本主格」「属性主格」表C1-3, 『文法』第19章参照)

C3-32) \*咳と車がとまつた。(「繰り返し身体作用の停止」「移動の停止」)

では、次の例はどうだろうか。

C3-33) ?あの日は田中さん(A)と地震(B)が来た。

この例では、文として成立する場合としない場合がある。2つの出来事を「人が訪問する」の論理関係と「自然現象が起こる」の論理関係として捉えると、同じ機能主格の「が格」であっても、論理関係(格)が異なるので文として成立しない。ところが両者とも例えば「(災いが)来訪する」の論理関係として捉えると、論理関係、つまり格が同一なので文として成立することになる。このように、同じ文でも、格が異なっている場合と同一である場合の2つの解釈ができることがある。

## C3.2 BがAの下位概念になっている同格実体である場合の描写

考察の順序は C3.1 と逆になるが、両実体が客格にある場合を先に考えたい。

### C3.2.1 両実体が客格にある場合

いま、このような文がある。

C3-34) 私は、九州(A)は福岡(B)に行った。

この文の特徴は、BがAの下位概念になっていることである。

この文では、まず上位概念の実体（A）で主題を提示し、下位概念の実体（B）で限定をしている。

この文には、実体「九州」（A）が動詞「行く」に対して何格にあるのか、という問題がある。「福岡」（B）は「に格」にあることが明白なのだが、「九州」の方は主題化する「は」が付いて「九州は」のようになっていて、格詞が省略されているので、何格にあるのかについては改めて考える必要がある。

今考えられるのは次の2とおりである。

C3-35) 私は、九州(A)では福岡(B)に行った。

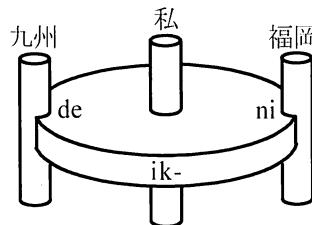
C3-36) 私は、九州(A)には福岡(B)に行った。

つまり、「で格」か「に格」である（「へ格」の可能性もあるが、「に格」と同じ「帰着点」を表すということで「に格」に絞ることにする）。両方とも可能であるが、「で格」の場合はAが「範囲」か「行為の場所」を表している。

C3-37) 九州(A)では福岡(B)に行った。

範囲として……………九州(A)という範囲の中では、福岡(B)に行った。

行為の場所として……九州(A)という場では、福岡(B)に行くことをした。



図C3-15 九州では福岡に行った

一方、「に格」の場合は「九州に」となり、「福岡に」と同格になる（図C3-16a）。つまり、この章で扱っている「同格複実体描写」ということになる。この場合、「は」を伴って前に置かれる実詞A（九州）は、後に置かれる実詞B（福岡）の上位概念に当たる関係になっている。文として表現することは、前に置かれる上位概念A（九州）を、後ろの実詞B（福岡）で狭く限定して添加することになる。このとき、前に置かれる上位概念の実詞Aにも格詞を〔〕（「発音されない」の意味）に入れて示せば、C3-38) のようになる。

C3-38〉 私は、九州(A) [に] は福岡(B)に行った。 (図C3-16a, b)

もし、この2つの実体が C3.1 で見たように、対等の別々のものであれば、「九州(A)と福岡(B)に行った」のように「と」で列挙できるが、この文はおかしい。対等の別々のものではなく、福岡(B)が九州(A)の一部になる包摂関係にあって、AとBはいわば1つのものであるからである。つまり「同格実体列挙描写詞 と／に／や／θ／か」で結べない。これが C3.1 との相違点である。

ただし、次のように同格実体列挙描写詞 θ で結べるから、やはり別々の実体ではないか、との疑問があるかもしれない。

C3-39〉 私は、九州(A), 福岡(B)に行った。

確かに、この例では同格実体列挙描写詞 θ が使われているように見えなくもない。しかし、当てはめて確認すれば分かるように、この場合は「と／に／や／か」などが省略されているわけではなく、「[に]は」が省略されているのである。あるいは「福岡は九州にある」という構造から描写される、「のつなぎ」による「九州の福岡」と同種の「+つなぎ」の「九州+福岡」である(A17章⑯⑰参照)。意味で考えればよく分かる。それで「同格実体列挙描写詞」の θ があるわけではないので、やはり C3.1 とは異なることになる。

また、同格実体が2つであって、3つ以上ではないということも C3.1 との相違点である。

C3-40〉 ?私は、九州(A)は福岡(B)は博多(C)に行った。

(言って言えないこともないとは思うが、普通のことではない。)

加えて、「AのB」とすることができることも C3.1 との相違点である(『文法』38.5 時差同位格の「の」参照)。

C3-41〉 私は、九州(A)の福岡(B)に行った。

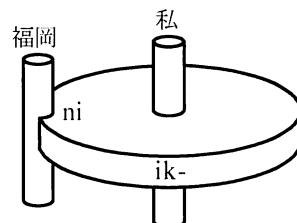
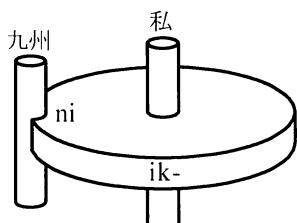
これは上述の「福岡は九州にある」の「のつなぎ」と考えることも可能である。

### C3.2.2 時差同位格（客格）

「九州(A)は福岡(B)に行った。」を構造で扱うときは、上位概念のAが下位概念のBを包摂するので、AとBは別のものではなく、1つのものの言い換えと考えることにする。まず上位概念Aで言って主題として示し、次に下位概

念Bで言い換えて限定する。つまり、ある格にある実体Aが時差において、同一物の部分名Bで表現される。この現象を「時差同位格」の現象と呼ぶ。（BがAの数量実詞になっている場合も同様のものとして扱う。『文法』第38章、A1.6[G]、C1.7[G]）。

「時差同位格」を構造図で示すと図C3-16aとbのようになる。まず上位概念「九州」が「に格」に置かれ、次にそのまったく同じ格に下位概念「福岡」が置かれ、その順に描写される。そのあとで属性「行く」が描写される。このことを1つの実体で表すことにはすれば、「九州」と「福岡」を別々の実体のように描かないで、図C3-17のように、同一実体の上と下に実体名を置いて表示し、上下で時差を表すことにすることが考えられる。これを図C3-16aに組み込めば、図C3-16aとbを同時に表示したことになる（図C3-22参照）。



図C3-16a 九州は福岡に行った。図C3-16b

図C3-17 時差実体

もし「九州」と「福岡」が別々のものであれば、公式 図C3-11 のようになるはずである。しかしながら、そうすると「九州と福岡に行く」という表層文が導けてしまうので、適切ではないことになる。それで、図C3-17のように同一実体の時差名称とすることになるのである。

このような時差同位格にある実体の例をいくつか挙げておく（図は図C3-22参照）。『車は』のように主題があるときは、（自明の）主語が省略されることが多いので、以下の例では「私は／彼は」などの主語主題は省略してある。

C3-42) 車(A)はトヨタ(B)を買った。 を格

C3-43) 映画(A)はアバター(B)を見た。 を格

C3-44) 中国(A)は上海(B)から来ました。 から格

C3-45) 葛飾(A)は柴又(B)で生まれた。 で格 (コラム3参照)

C3-46) アメリカ(A)はニューヨーク(B)で仕事をしている。 で格

### C3.2.3 両実体が主格にある場合

次に同格複実体が主格にある場合のことを次のような例で考えてみたい。

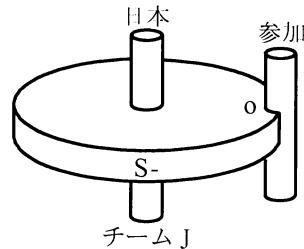
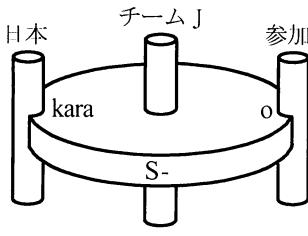
C3-47) 日本(A)はチームJ(B)が参加する。

いま前提となっているのは「日本(A)」がスポーツ競技会に参加する団体の上位概念で、「チームJ(B)」がその団体の具体名で下位概念であることである。

日本(A)は「から格」「が格」の可能性があるが、「から格」から考える。

C3-48) 日本(A)からはチームJ(B)が参加する。 (図C3-18)

この捉え方では「日本(A)」と「チームJ(B)」は必ずしも上位・下位概念の関係になくてもよい(ただし、別のものではあっても同格にはないので「と／に」等で列挙することはできない)。「日本」に所属している「チームJ」が「日本」を出どころとして代表となることを意味している。



図C3-18 日本(から)はチームJが参加する

図C3-19 日本[が]はチームJが参加する

次に、日本(A)が「が格」にある場合は、「日本(A)」と「チームJ(B)」が同一主格に立っていて、同格実体となっている。しかも時差同位格にあることになる。ここで改めて主格の時差同位格について述べれば次のようになる。

### C3.2.4 時差同位格(主格)

C3-49) 日本(A)はチームJ(B)が参加する。

A, Bが同一主格に立っているので、両者に「が」による格表示をすることができる。

C3-50) 日本(A)[が]はチームJ(B)が参加する。

ここでの認識は「日本(A)」と「チームJ(B)」が別のものではなく、AがBを包摂する形での同一のものであるとの認識である。それが時差を置いて同一主格に立つのである。図示すれば図C3-19となる。

## C3.2.5 公式化

以上、C3.2 で見てきたことを、ここで公式化して表すことにする。この C3.2 で扱っているのは、複数の実体 A, B が同格にあり、かつ B が、A の下位概念にあたる場合である。文の形の公式化は次のようにになる。

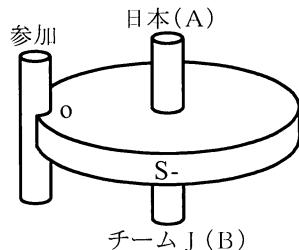
[A, B が同一の機能主格にある場合]

A, B が同一の機能主格にある C3-51) の文を公式化して示せば、C3-52) のようになる。

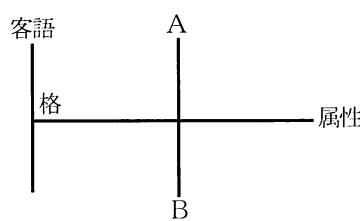
C3-51) 日本(A)はチーム J (B)が参加する。

C3-52)  $A = \cancel{\theta_1}$  は  $B - \theta_2$  属性 (公式)

この公式化された文の構造図は図C3-20、図C3-21 のようになる。



図C3-20  $A = \cancel{\theta_1}$  は  $B - \theta_2$  属性



図C3-21

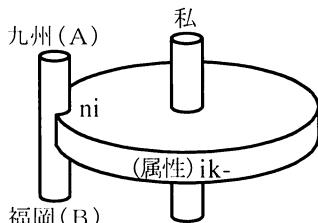
[A, B が同一の客格にある場合]

また、A, B が同一客格にある C3-53) の文の場合は、公式化して示せば、C3-54) のようになる。

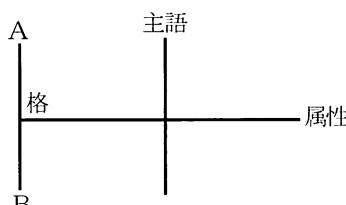
C3-53) (私 $\emptyset_1$ は) 九州(A)は福岡(B)に行く。

C3-54) (主語- $\emptyset_1$ は)  $A = \text{格詞}$  は  $B - \text{格}$  属性 (公式)

図は図C3-22、図C3-23 のようになる。



図C3-22



$A = \text{格詞}$  は  $B - \text{格}$  属性

図C3-23

以上のように、C3. 2の場合は時差同位格という概念を使用するのであるが、この概念は次のC3. 3の場合にも使用する。

### C3. 3 BがAの数量を表す同格実体である場合の描写

次の例のように実体Aの数量を表す実体Bが同じ格にある場合がある。

C3-55) 選手(A)は3人(B)メダルを取った。 両者主格

C3-56) 本(A)を5冊(B)買った。 両者を格

このような場合も時差同位格の概念を使用するので、本章の考察の対象になるのであるが、この場合についてはすでに、『文法』第38章「数量実詞」で述べたので、ここでは再び扱うことをしない。そちらを参照していただければ幸いである。

### C3. 4 似ているが本章の対象にならないもの

次の例のように実体Aも実体Bも主格にある場合がある。

C3-57) 象(A)は鼻(B)が長い。 両者主格

しかし、実は主格には12種類の機能主格があって、厳密にいうとAとBの格は同格とは言えないので、似てはいるが、ここで扱う対象にはならない。このことについては C1. 7 で、さらに詳しくは A 1 章「主格の下位分類」、『文法』第VII部「複主体」で扱っている。そちらを参照していただければ幸いである。

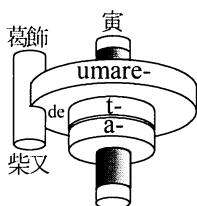
以上、C 3 章では同格複実体の描写について考えてみた。

## コラム3 葛飾は柴又の生まれ

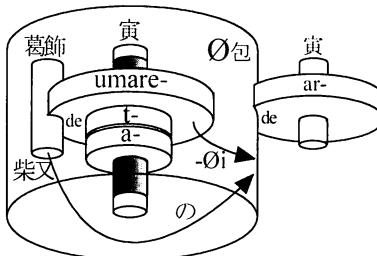
C3.2.2において、次の文の構造は図C3-22であるものと考えた。

C3-45(再掲) 葛飾(A)は柴又(B)で生まれた。

この文の構造を改めて詳しく表示すれば、図C3-1のようになる。



図C3-1 葛飾は柴又で生まれた



図C3-2 葛飾は柴又の生まれだ

(動詞「生まれる umare-」はここでは1詞として扱うが、実は3詞 um-ar-e-である。)

この文に関連して、ここで

C3-1) 寅さんは葛飾(A)は柴又(B)の生まれだ。

という文にも触れておく。この文の主述の関係は次のように分析できる。

C3-2) 寅さんは〔葛飾(A)は柴又(B)の生まれ〕だ。

この分析を構造図で表せば、図C3-2のようになる。

包含実体「Ø包」の中には図C3-1の構造がそのまま入っている。

動詞 umare- が実体修飾第2描写詞(-i) (C5.6⑧)で包含実体 Ø包 を修飾することにより umare-Øi=Ø包 「うまれ」 という実体(名詞)が形成される。

さらにその構造の実体「柴又」が「のつなぎ」(『文法』36.1/A16.1)で包含実体を修飾して「柴又(で)の umare-Øi=Ø包」を構成する。「葛飾」はその前に包含実体を修飾して「葛飾(で)の umare-Øi=Ø包」を構成するが、主題化して「は」を取り、すぐにより限定性の高い「柴又」に置き換えられて、全体で「葛飾(で-)のは柴又(で)の umare-Øi=Ø包」となる。

このようにして「寅さんが葛飾は柴又で生まれた」事象が実体(名詞)化され、この事象が改めて「寅さん」の属性として「-de=ar-」で表現されて、C3-1) が成立する。

## C 4 章

# うなぎ文（形式断定基）

### C4.0 「うなぎ文」

「ぼくはうなぎだ。」の文に代表されるいわゆる「うなぎ文」。「うなぎ文」では、主語(ぼくは)と述語(うなぎだ)が文法的に整合しないことに問題があるが、日常それと気がつかないほど自然に頻繁に使用している。この章ではうなぎ文について次の順に論じつつ、「形式断定基」を扱うことにする。

### C4.1 「うなぎ文」の特異性……Aは「Bだ」の主語でない

「うなぎ文」では主語が正当な述語を持たない。

### C4.2 「だ」は「である」と同じ構造

構造 -de=ar- を省力描写して -d=a- としている。機能は同じ。

### C4.3 「うなぎ文」の本文法でのとらえ方……省略文の形式補充

省略文に文の完結性を与えるために形式断定基を使用したもの。

### C4.4 形式断定基

断定基を形式的に使用。形式断定基の主語は何と特定できない。

### C4.5 ほかの例

いくつかの例を構造図とともに示す。

### C4.6 「うなぎ文」の主語

主語には「だ<sub>2</sub>、です<sub>2</sub>」構造に関わる2つの特異性がある。

### C4.7 「うなぎ文」の「だ」は述語の「代用」か

「だ」は「代用」ではなく「省略文完結のための形式的補充」。

### C4.8 「白い／です」も形式断定基を使用

形式断定基を使用するが、「うなぎ文」ではない。

### C4.9 「だ、です」の3種類……「だ<sub>1</sub>・です<sub>1</sub>」「だ<sub>2</sub>・です<sub>2</sub>」「です<sub>3</sub>」

「だ、です」を使用法により3種類に分類する。

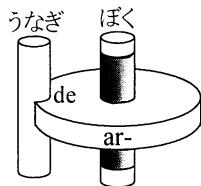
## C4.1 「うなぎ文」の特異性……Aは「Bだ」の主語でない

「うなぎ文」というものがある。

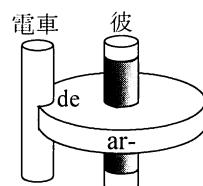
C4-1) ぼく<sub>01</sub>はうなぎだ。 (図C4-1)

C4-2) 彼<sub>01</sub>は電車だ。 (図C4-2)

この文で問題なのは、この文を聞いた人がこのまま構造を再構成すると、「ぼく・彼」は人間なのに「うなぎ・電車」であることになって、矛盾が生じてしまうことである。



図C4-1 ぼく<sub>01</sub>はうなぎだ



図C4-2 彼<sub>01</sub>は電車だ

「AはBである。」の「である」の構造を本文法では「断定基」と呼ぶが（構造は図C4-1, -2のとおり）、断定基で結ばれる「A」と「B」は「日本(A)は島国(B)である。」のようにAをある側面から言い換えたものがBなのであり、いわばAとBは同一物なのである。つまり、「ぼく」が「うなぎ」そのものであり、「彼」が「電車」そのものであれば、上例の「断定基」は正当に機能していることになる。正当に機能しているときの「だ、です」を「だ、です」とする。しかし、「ぼく」「彼」が人間であれば「うなぎ」「電車」であることはありえないでの、この例では正当に機能してはおらず、表現に矛盾が生じている。ここに「うなぎ文」の特異性がある。「主語」に着目して言えば、Aが「Bだ」の正当の主語になってはいないのである。

## C4.2 「だ」は「である」と同じ構造

ここで改めて確認したい。「だ -d=a」は「である -de=ar-u」と同じ構造をしている（図C4-1）。「だ -d=a」は「-d(e)=a(r-u)」なのであるが、描写（ことば化）において省力が行われ、「-d(e)=a(r-u)」の( )内が省略されて「だ -d=a」となっているのである。したがって、-d は -de と同じく「格」を表しており、a は ar- と同じく動詞であって、「存在」を表している。

## C4.3 「うなぎ文」の本文法でのとらえ方……省略文の形式補充

このようないわゆる「うなぎ文」のようなものについては、本文法では次のように考えることになっている。

まず、もともと次のような文（構造）がある。

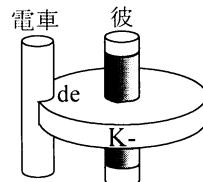
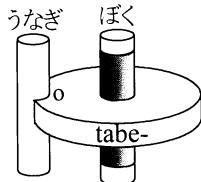
C4-3) ぼく $\emptyset_1$ はうなぎを食べる。（図C4-3）

C4-4) 彼 $\emptyset_1$ は電車で来る。（図C4-4）

日本語ではわかりきったことは省略して言うから、状況などがあれば、同じことを次のように言う。

C4-5) ぼく $\emptyset_1$ はうなぎ。（図C4-3）

C4-6) 彼 $\emptyset_1$ は電車。（図C4-4）



図C4-3 ぼく $\emptyset_1$ はうなぎ（食べる）

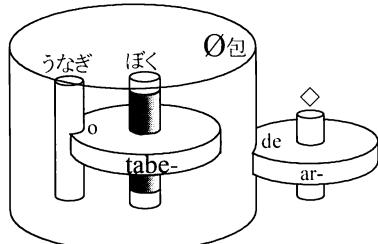
図C4-4 彼 $\emptyset_1$ は電車（で来る）

ところが、これではいかにも省略文という感じなので、何とか完結した文の形にしたい。それで、「断定基」の「である -de=ar-」「だ -d=a」を使うことにする。つまり、省略文に形式補充をするのである。

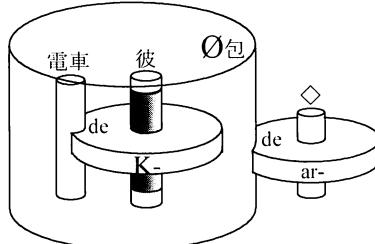
C4-7) ぼく $\emptyset_1$ はうなぎ／だ。（図C4-5）

C4-8) 彼 $\emptyset_1$ は電車／だ。（図C4-6）

これで一応完結した文のようになり、普通は省略文だと感じられなくなる。



図C4-5 ぼく $\emptyset_1$ はうなぎ／-de=ar-



図C4-6 彼 $\emptyset_1$ は電車／-de=ar-

ここで使用した記号「／」は、その後が形式断定基であることを示す。わざ

わざこの記号を使用するのは、「／」の後がその前の内容と意味的に何も関係がないということを示すためである。「／」の後は、その前の部分で示すことのできない、文の完結性、丁寧さ、テンス、ムードを表すだけである。

このような「うなぎ文」の「／」の後の「だ、です」を「だ<sub>2</sub>、です<sub>2</sub>」とする。

#### C4.4 形式断定基

##### C4.4 (1) 形式断定基……肯定の場合

つまりこれは、操作としては、構造の全体を「ゼロ包含実体」の中に入れて、疑似的な実体（名詞）を作り、これを「断定基」の「で」格に置いたことになる（図C4-5,-6）。（「ゼロ包含実体」については『文法』6.6参照）

ここに使用される「断定基 -de=ar-」は、文（構造）の内容と直接には何の関係もない。まったく形式的なものである。それで、この断定基を「形式断定基」と呼ぶ。あくまでも形式的なものなので、この断定基の主語が何であるかを言うことはできない。恐らく「事情・実情・状況」のような観念であるであろうから、断定基の主体そのものは「事情主体」として考えることにするが、語では表現できないので、構造においては「形式主体」として扱い、「◇」の記号で表すことにする。

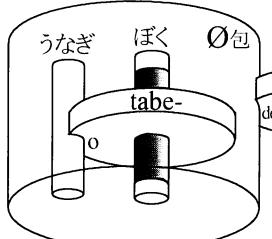
しかし、この形式断定基があるおかげで、C4-5) -6) の省略文を

C4-9) ぼくØ1はうなぎ／です。（図C4-7）

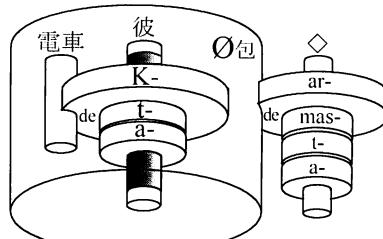
のように丁寧化（です）することができるし、

C4-10) 彼Ø1は電車／でした。（図C4-8）

のように、それを過去（でした）にしたりすることもできる。



図C4-7 ぼくØ1はうなぎ／です



図C4-8 彼Ø1は電車／でした

※「です」は「であります」と同構造で、省力描写した形式である。

-de=ar-i=mas-u …… -de=(ar-i=ma) s-u

※「でした」は「でありました」と同構造で、省力描写した形式である。

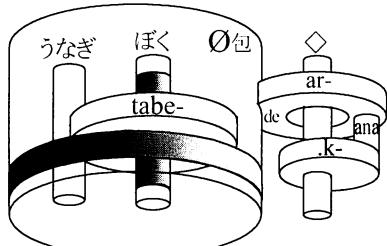
-de=ar-i=mas-i=t-θ=a-θ …… -de=(ar-i=ma) s-i=t-θ=a-θ

#### C4.4 (2) 形式断定基……否定の場合

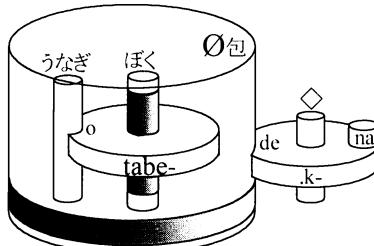
また、否定にすることもできる。

C4-11) ぼく $\emptyset_1$ はうなぎ／ではない。 (図C4-9, -10)

「だ・ある」は図C4-5, -6 のとおりである。これを否定にすると「ではあらない」になる(図C4-9)が、普通はこう言わずに、「ではない」(図C4-10)と言う。(「あらない」と「ない」の関係については『文法』第30章参照)

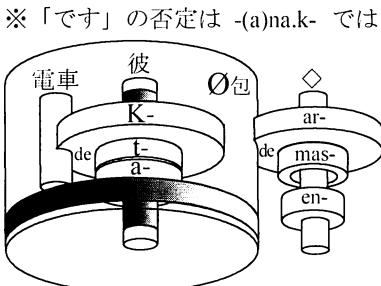


図C4-9 ぼく $\emptyset_1$ はうなぎ／ではあらない  
丁寧の否定形にもなる。

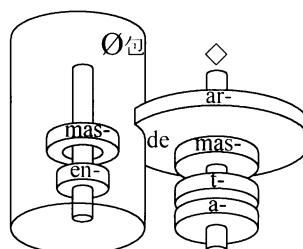


図C4-10 ぼく $\emptyset_1$ はうなぎ／ではない

C4-12) 彼 $\emptyset_1$ は電車／ではありません。 (図C4-11)



図C4-11 彼 $\emptyset_1$ は電車／ではありません



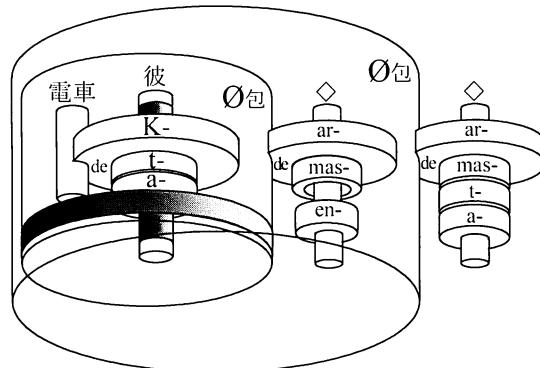
図C4-12 ませんでした基

丁寧の否定をさらに過去にすると C4-13) のようになる。

C4-13) 彼 $\emptyset_1$ は電車／ではありませんでした。 (図C4-13)

これは、C4-12) に「でした」を付加したもので、「だ・ある」の構造を

図C4-12 の「ませんでした基」(動詞の場合と共に)に入れたものになる。結果として 図C4-13 のようになる。



図C4-13 彼Ø₁は電車／ではありませんでした

#### C4.5 ほかの例

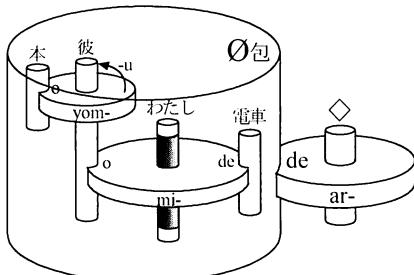
ほかにも「うなぎ文」の例をいくつか挙げておこう。

C4-14) A : ぼくØ₁は本を読む彼~~を~~は図書館で見るね。

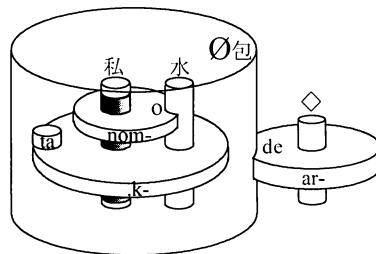
B : そう？ わたしØ₁は電車(で)／だわ。(図C4-14)

C4-15) A : 田中さんØ₁はビールが飲みたいって。

B : 私Ø₁は水／だ。(図C4-15)



図C4-14 わたしØ₁は電車(で)／だ



図C4-15 私Ø₁は水／だ

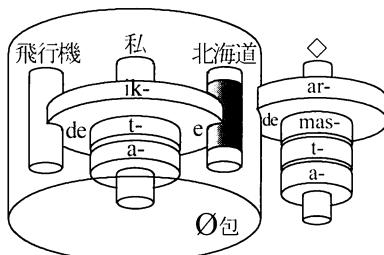
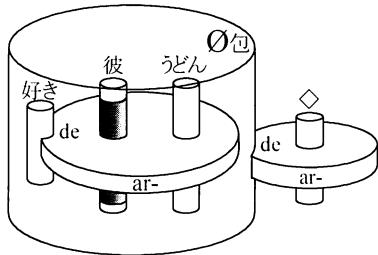
C4-16) A : 彼女Ø₁はパスタが好きだそうだ。

B : 彼Ø₁はうどん／だ。(図C4-16)

C4-17) A : 九州へは新幹線で行ったんですよ。

B : はあ。

A : 北海道(へ)は飛行機／でした。(図C4-17)



図C4-16 彼 $\emptyset_1$ はうどん／だ

図C4-17 北海道(へ)は飛行機／でした

日本語の中の「うなぎ文」は枚挙にいとまがない。形式断定基がいかに便利なものか改めて認識させられる。

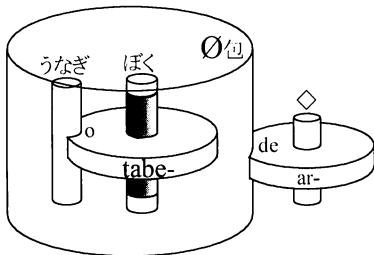
#### C4.6 「うなぎ文」の主語

以上のことから、「うなぎ文」の主語には次の2つの特異性があると言える。

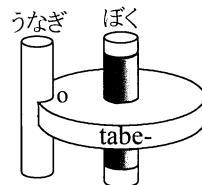
- ・「AはB／だ<sub>2</sub>・です<sub>2</sub>」のAは「だ<sub>2</sub>・です<sub>2</sub>」の主語ではない。
- ・「だ<sub>2</sub>・です<sub>2</sub>」は形式断定基であって、この部分の主体は形式的でしかなく、観念としてはともかく、実質的な主体名を考えることができない（記号 ◇ で表示）。したがって、この主体が描写されて主語となることはない。

#### C4.7 「うなぎ文」の「だ」は述語の「代用」か

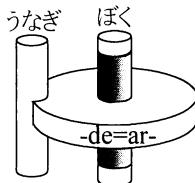
先行研究には「ぼくはうなぎだ」の「だ」を「ぼくはうなぎを食べる」の「食べる」の部分の代用であるとする考え方がある。しかし、構造で考えるとそれはあり得ないことになる。いま下に、両方の図C4-5, -3を対置してみるが、どう見ても、「だ」が「食べる」の代用になっているとは考えられない。敢えて、その考え方に基づいて、「だ -de=ar-」を「食べる」の属性に入れて、「代用」の構造を作ると 図C4-18 のようになるだろうが、構造的にこれはありえない。



図C4-5(再) ぼくø1はうなぎ／-de=ar-



図C4-3(再) ぼくø1はうなぎを食べる



-de=ar- はこうではないから、  
この構造はありえない。

図C4-18 「だ」は -o tabe- の代用？

確かに、表層の文だけを比べていれば

- C4-18) • ぼくはうなぎを食べる。
- ぼくはうなぎだ。

において、「だ」が「をたべる」の代用をしている、とは言えそうだが、それは表層レベルにおいてのみである。構造レベルで検討してみると、両者は構造が大きく異なっているのである、そのようなことはまったく言えない。「だ」は「代用」ではなく、「省略文完結のための形式的補充」なのである。

#### C4.8 「白い／です」も形式断定基を使用

##### C4.8 (1) 「形容詞+です」は昔は文法的に誤りだった

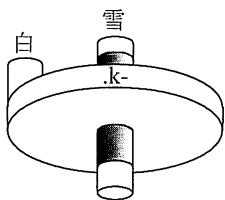
私たちは形容詞に「です」をつけて丁寧な表現にするが、これも形式断定基を使用しているのである。形容詞に「です」をつけることは、以前は文法的に誤りとされていたのであるが、昭和27年に国語審議会で建議された「これから」の敬語で積極的に認められようになった。

(文化庁 [http://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/joho/kakuki/01/tosin06/04.html](http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/joho/kakuki/01/tosin06/04.html))

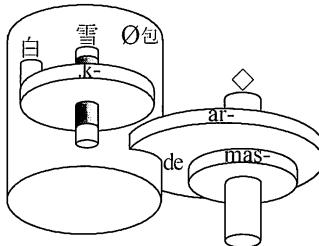
いま、たとえば

C4-19) 雪 $\emptyset_1$ は白い。

という形容詞の文がある。構造は図C4-19のようになっている。



図C4-19 雪 $\emptyset_1$ は白い



図C4-20 雪 $\emptyset_1$ は白い／です

この構造からは、「白いです」という構造は作れない。しかし何とか丁寧な表現にしたい。それで、図C4-20 のように、不自然ではあるが形式断定基を使用することになった。日本語話者は現在ではこの言い方に慣れていて、違和感を感じなくなっている。（昔は不自然さをそのまま不自然と感じていた。）

#### C4.8 (2) 「形容詞+です」は「うなぎ文」ではない

形式断定基を使用していても、これは「うなぎ文」ではない。主語が適切な形容詞述語を持つからである。

C4-20) [うなぎ文] AはB／です。 [述語等省略]／です

C4-21) [形容詞文] 形容詞文／です。 [主語-形容詞述語]／です

もともと「主語-形容詞述語」の適切な主述関係が成立しているところに、丁寧にするためだけに形式断定基が使用されたのである。この形式断定基の「です」を「です<sub>3</sub>」とする。

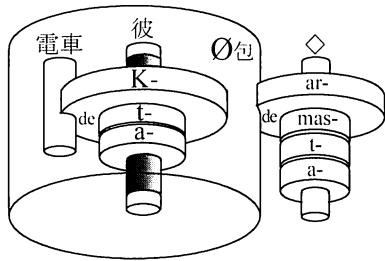
それで、形容詞文は「うなぎ文」とはふるまいが異なっている。過去にするとき、「うなぎ文」では形式断定基の方を過去にするが、形容詞文は形容詞そのものを過去にする。

C4-10(再) [うなぎ文] 彼 $\emptyset_1$ は電車／でした。 (図C4-8(再))

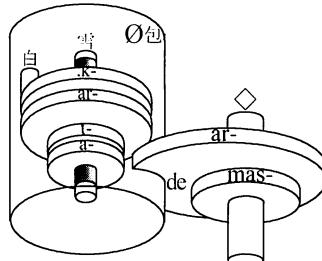
C4-22) [形容詞文] 雪 $\emptyset_1$ は白かった／です。 (図C4-21)

siro.k-Ø=ar-i=t-Ø=a-Ø=Ø包-de=ar-i=mas-u

形容詞文は形容詞の部分で文を完結させてしまう必要があるので、この違いが出てくるのである。



図C4-8(再) 彼Ø1は電車／でした

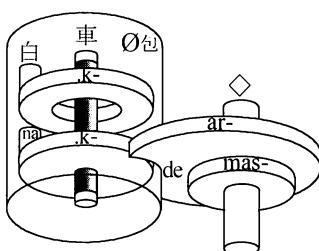


図C4-21 雪Ø1は白かった／です

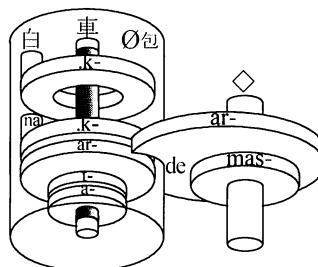
形容詞は否定の場合でも同じで、形容詞そのものを否定する。

C4-23) 車Ø1は白くない／です。 (図C4-22)

C4-24) 車Ø1は白くなかった／です。 (図C4-23)



図C4-22 車Ø1は白くない／です



図C4-23 車Ø1は白くなかった／です

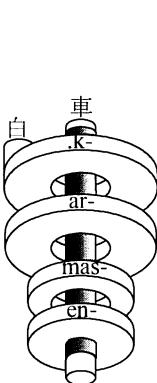
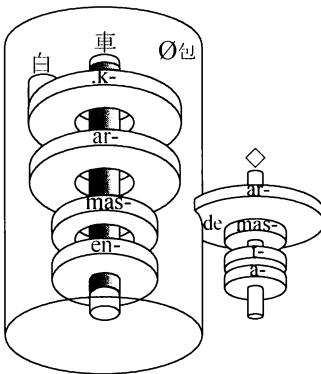
なお、形容詞の場合は「丁寧」にするために形式断定基を使用するので、形容詞そのものが丁寧になっている非過去では、形式断定基を使用する必要はない。(話し言葉では使用されることもある。)

C4-25) 車Ø1は白くありません／モナ。 (図C4-24)

ただ、丁寧の過去の場合には、形容詞そのものが丁寧になっているので、過去にするためだけに形式断定基を使用する。

C4-26) 車Ø1は白くありません／でした。 (図C4-25)

このように形容詞文の場合、形式断定基「です」が使われるのは「丁寧な表現にするのが主な目的なのであって、形式的補充が目的の「うなぎ文」とは異なっている。

図C4-24 車 $\emptyset_1$ は白くありません図C4-25 車 $\emptyset_1$ は白くありません／でした

◎「だ・です」が使われるようになって、推測の形「おいしかろう」が「おいしいだろう・でしょう」のように、「だ・です」の形を借りるようになっていくが、ここに使われる「だろう」の「だ」は「だ3」としておく。

#### C4.9 「だ・です」の3種類……「だ<sub>1</sub>・です<sub>1</sub>」「だ<sub>2</sub>・です<sub>2</sub>」「です<sub>3</sub>」

断定基としての「AはBだ」という表層文の「だ・です」は、3種類のあり方があるということが判明した。簡単にまとめて表にしておく。

表C4-1 「AはBだ・です」の「だ・です」の分類

基の種類	文の種類	A B関係	常体	敬体	「AはBだ・です」例
断定基	断定文	A = B	ダ <sub>1</sub>	デス <sub>1</sub>	彼は学生 <u>だ・です</u> 。
形式断定基①	うなぎ文	A ≠ B	ダ <sub>2</sub>	デス <sub>2</sub>	彼はバス <u>だ・です</u> 。
形式断定基②	形容詞 丁寧化文	A = B	(ダ <sub>3</sub> )	デス <sub>3</sub>	彼はおもしろい <u>です</u> 。

以上、本章では「形式断定基」がいわゆる「うなぎ文」と形容詞文においてどのように使用されているかについて「構造」の視点から論じた。

#### コラム4 すべての格、言語要素を数え上げるという課題

C3.1.4 で、こう述べた。

「を格」といっても、「を格」は「を1格」「を2格」「を3格」「を4格」

……のような異なる格の集合体であると考えざるを得ない

つまり、「を格」の中にはいくつもの論理関係(=格)があるということである。「を格」を取る動詞の数だけその関係が存在するはずだから、総数は相当な数に上るだろう。しかも、C3.1.4 で「みる」という1つの動詞の「を格」の論理関係が2つあることを見て、1つの動詞に複数の「を格」の論理関係があることを知った。ということは、動詞の数だけどころではなく、動詞の数の何倍もの論理関係があるはずであるということになる。中には動詞どうしで共通の論理関係もあるだろうから、その重複の分は差し引くことにはなるが。

いったいそのような「を格」のすべてを取り上げ、数を数え尽くすことはできるのだろうか。どのようにすればそれが可能になるのだろうか。

「を格」だけではない。すべての格はいったいいくつあるのか。「格」とは実体(名詞)と属性(動詞、形容詞等)の論理関係であるから、モノ・コトが動きや、存在様態とどのように関わっているのかを調査すればよいはずである。その際、その関わり方の法則が見つかれば、労多い調査をしなくとも、自動的に数え上げができるようになるはずである。そのような法則はあるのか、ないのか。どのようにすれば見つかるのか。

アメリカ海軍天文台の USNO-A2.0 星表には、もちろんすべての天体というわけではないが、それでも5.26億個の恒星のデータが掲載されている。日本語、というより人間の認識・思考に何千とあるであろう格にもそれぞれの特徴にちなんだ記号をつけることができれば、すべての格が体系的に把握できることになる。

格だけではない。さらに、すべての詞・語・連語・句・文型等の言語要素にも記号づけが可能となれば、1言語の総体が体系・構造として把握できるようになり、言語研究を進める上で大きな助けとなるだろう。

## C 5 章

## 活用

## C5.0 日本語用言の「活用」

日本語には古くから用言の「活用」の概念があり「活用表」があった。旧来の活用表について論じつつ、構造伝達文法の新しい活用表の考え方を提示する。

## C5.0.1 新=活用表（動詞）

## C5.1 日本語動詞の伝統的な活用表……五段活用

## C5.2 疑問……未然形、仮定形……仮=修正活用表

## C5.3 日本語動詞の伝統的な活用表……一段活用

以上、新=活用表を提示してから、従来の活用表の問題を論じる。

## C5.4 そもそも「活用」とは

## C5.5 動詞を「活用」するための方法

上の2節において、活用とは何か、改めて考察する。

## C5.6 構造を変えずに動詞を動詞語にするだけの形態素……描写詞

## C5.7 動詞に付加される属性の名称である形態素……属性詞

上の2節で活用に用いられる形態素のそれぞれの機能を論じる。

## C5.8 非連体機能による実体修飾

名詞を修飾するのは「連体形」のみではないことを論じる。

## C5.9 拡大活用表=例

言語教育等に向けた実用的な拡大活用表の見本を提示する。

## C5.10 形容詞の新活用表

## C5.11 断定基の活用表

形容詞と断定基(形容動詞)の新=活用表に触れる。

## C5.12 (C5.K) 木村論文「動詞連用形の名詞化・名詞修飾」

動詞連用形についての考察を行った木村泰介君の卒業論文。

## C5.0.1 新=活用表（動詞）

次のような活用表が構造伝達文法の考える動詞活用表である。本章において詳しく述べたい。

表C5-1 新=活用表（動詞）（活用のための一次形式のリスト）

構造を変えずに、動詞を動詞語にするだけの形態素……描写詞 C5.6		
(1) その動詞で文を終止するための描写詞		C5.6 (1)
① -(r)u	基本描写詞	(旧・終止形)
② -e / -ro	命令描写詞	(旧・命令形)
③ -(y)oo	意志・推量描写詞	(旧・未然形はこの一部)
(2) その動詞の後に主文を続けるための描写詞		C5.6 (2)
④ -(i)	中止描写詞	(旧・連用形)
⑤ -(r)eba	条件描写詞	(II・仮定形はこの一部)
(3) 動詞を他属性や構造内外の実体と関係づけるための描写詞		C5.6 (3)
⑥ -(i)	他属性連続描写詞	(旧・連用形)
⑦ -(r)u	実体修飾第1描写詞	(旧・連体形)
⑧ -(i)	実体修飾第2描写詞	(旧・連用形)
動詞に付加される属性の名称である形態素……属性詞 C5.7		
(4) 動詞否定属性詞		C5.7 (4)
⑨ -(a)na.k-	否定詞	(旧・未然形はこの一部)
(5) 態属性詞 (⑩／⑪／⑫一部／では動詞主体が変わる)		C5.7 (5)
⑩ -(s)as-	原因態詞	(旧・未然形はこの一部)
⑪ -(r)ar-	受影態詞	(旧・未然形はこの一部)
⑫ -e-	許容態詞	(旧・扱いなし)

動詞に直接付く「一次形式」だけがこのリストにある。「貸して」のように「て」が動詞に直接付いているように見えるものもあるが、実は kas-i=te- であり、動詞 kas- は上表の⑥の一次形式 -i を取ってから =te- を後続している。いわゆる「テ形 =te-」は「二次形式」で、動詞に直接付いているわけではないので活用表には現れない。（「て」を基の形 -i=te- で構成要素とするような拡大活用表を考えることは可能である。拡大活用表については C5.9 で触れる。）

## C5.1 日本語動詞の伝統的な活用表……五段活用

国語学には伝統的な活用表がある。国語の教科書でおなじみの表であるが、たとえば「飲む」という五段活用の動詞の活用表は次のようなものである。

表C5-2 五段動詞「飲む」の活用表 (拍単位)

動詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
飲む	の	ま も	み ん	む	む	め	め

この活用表の特徴は、ひらがなを使用しているところにある。音素 (a, u, k, m, t など) が単位にならずに、拍 (ka, su, no, me など) が単位になっているので正確な分析ができないという弱点がある。例えば、「飲む」という動詞の場合、語幹は変わらない部分であるから、nom- のはずなのに、仮名では表せないので「の」だけになってしまい、表C5-2 のような活用表になってしまう。これに対して、音素を単位とする活用表は正確なものになり、表C5-3 のようになる。ただし、活用語尾 (-a, -i など) の形は仮名の活用表に従っておく。

表C5-3 五段動詞「飲む nom-u」の活用表 (音素単位)

動詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
飲む	nom- (non-)	-a / -o	-i	-u	-u	-e	-e

上の両表をよく見てみると、疑問がわいてくる。もちろん上に述べたように、仮名表記での語幹の扱いそのものは大いに疑問である。そのほかの疑問点について触れたい。

nom- は「飲む」という動作の概念を表すものであることは理解でき、-i(連用形), -u(終止形), -e(命令形) の機能は一応理解できるが、-a(未然形) と、もう 1 つの -e(仮定形) については納得がいかない。

連用形の「ん」は、例えば「飲みて」という形態が音声的な理由で歴史的に「飲んで」という音便形を生じたものである（なぜそのような音便形になるのかについての詳細はA 3 章参照）。音素単位で考えると n は便宜的に語幹の中に入れることになるので、音素活用表での扱いは表C5-3 のようになり、「かな」活用表とは異なることになる。ただし、新活用表の語幹は nom- のまま。

## C5.2 疑問……未然形、仮定形……仮=修正活用表

上に述べたように、「未然形 飲ま nom-a」，「仮定形 飲め nom-e」の2形について疑問がある。他の4形，「連用形 飲み nom-i」，「終止形 飲む nom-u」，「連体形 飲む nom-u」，「命令形 飲め nom-e」については次のようによく理解できる。

「連用形 飲み nom-i」の -i は nom-i=naos-u のように，その後に用言を続けることができるので，確かに連用の機能がある。

「終止形 飲む nom-u」の -u は「私は水を nom-u.」のように，-u で文を終止することができるので，確かに終止の機能がある。

「連体形 飲む nom-u」の -u は「nom-u 水」のように，その後に体言を続けることができるので，確かに連体の機能がある。

「命令形 飲め nom-e」の -e は「水を nom-e.」のように，確かに「命令の気持ち」を表現する機能がある。

「未然形」……ところが，「未然形 飲ま nom-a」の -a にどのように「未然」の機能があるのか理解できない。そもそも「未然」というのはどのような機能なのか。「未だ然らず（まだそうなっていない）」の意味であることは承知している。しかし日本語話者は「飲ま nom-a」でそのような意味を感じているだろうか。未然形にはもう1つの形「飲も nom-o」もあるが，この形でもそのような意味を感じているだろうか。-a や -o にそのような意味・機能が本当にあるのだろうか。

試みに日本語話者のだれかに聞いてみたい。「飲ま」「飲も」ってどんな意味？「そんな言い方はない。」という返答があるだろう。「飲ませる，飲まれる，飲まない，飲もう，の頭の部分だよ。なんで無意味に頭の部分だけで聞くの。」と怪訝な顔をされるに違いない。

確かに，-a は -as- (nom-as- 飲ます) 及び，-ar-e- (nom-ar-e- 飲まれる)，-ana.k- (nom-ana.k- 飲まない) の先頭部分なのであり，-o は -oo (nom-oo 飲もう) の先頭部分なのである。つまり -a や -o は形態素 (-as-, -ar-, -ana.k-, -oo) の一部分なのであって，そのように切り離しては何の意味も機能もないである。つまり「未然形」というものはないのである。

「仮定形」……また，「仮定形 飲め nom-e」の -e には，いくら頑張っても

「仮定」の意味を感じることはできない。そのような機能があるようには思えない。日本語話者のだれかに聞いてみたい。「飲め」で仮定の感じがするか? 「飲め」はどうしたって「命令」である。これも -e が -eba (nom-eba 飲めば) という形態素の先頭1音という「部分」なのであって、それだけでは「仮定」の意味を持てないのである。つまり -e による「仮定形」というものもない。 (古語では若干事情が異なるが。)

#### 活用表の存在意義……仮=修正活用表

すると、活用表にはどんな存在意義があるのか、という疑問がわいてくる。もしこの活用表を生かすのであれば、未然形と仮定形を修正した仮の修正表(表C5-4)を作らねばならないことになる。

表C5-4 五段動詞の活用表(仮=修正表)

動詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
飲む	の	まない ます まれる もう	み	む	む	めば	め
	nom-	-ana.k- -as- -ar- -oo	-i	-u	-u	-eba	-e

しかし、「まない」は「まなく(て)」と使ったり、「ます」は「ません」と使ったりするから、表中にかなで示したものだけではとうてい不十分である。仮名表示の限界がここにある。ローマ字で示せば、表C5-4 下段に見るよう、非常に適切に、不变部分のみを示すことができる。例えば、-ana.k- の後ろについている - (ハイフン) はその後に -i や -u=t=e-Ø= のようなものの添加があることを示している。(C5.9 拡大活用表も参照していただければ幸いである。)

国語の伝統的な活用表は、五段活用動詞(例: nom- のむ)の場合、動詞の後続要素(-as- のま-す)を要素の先頭の母音(-a ま)の順序に配列したものであるといえる。これも一種の整理法ではある。しかし、便宜的なものであって、科学的整理法であるかと言えば、不備なものであるとしか言えない。私たちはもう少し科学的に整理してみたいと思う。

## C5.3 日本語動詞の伝統的な活用表……一段活用

上で検討したのは五段活用の表である。ここに、一段活用の表も「食べる」「見る」の例で掲げておきたい。一段動詞というのは、動詞が母音の i- か e- で終わるものであるが、tabe- は e- で終わっている。「見る mi-」は i- で終わる動詞である。ここにもやはり語幹の扱いに対する疑問がある。たとえば、「食べる」の語幹はなぜ「たべ」ではなく「た」なのか。やはり「仮名」で文法を扱う限界をここに見る。

「食べる」「見る」はローマ字で表示すると正確に語幹が示せる。

表C5-5 一段動詞の活用表

動詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
食べる	た	べ	べ	べる	べる	べれ	べろ
	tabe-	-	-	-ru	-ru	-re	-ro

tabe-ru は動詞末が e- であるのでこのような表になる。

i- で終わる動詞も同様の表になるのであるが、「見る mi-」のような2拍の短い動詞は従来の活用表では語幹がないという不合理なことになってしまう。(「経る he-」のような e- で終わる2拍動詞でも同じである。)

表C5-6 動詞「見る」の活用表

動詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
見る	○	み	み	みる	みる	みれ	みろ
	mi-	-	-	-ru	-ru	-re	-ro

「○」は国語学の活用表ではその欄に該当するものがないことを表す。

ここにも「仮名」で活用を扱うことの限界を見ることができる。

仮名表記の活用表に合わせてローマ字で表記すると、未然形と連用形のところが - になって、何のことか分からなくなってしまう。それで、五段活用動詞の場合と同じように仮=修正表を作成してみたい。仮定形のところも修正する。すると表C5-7のような表になる。

一段動詞の未然形と連用形は、後続の形態素が母音なので母音が連続することになってしまい (tabe-a, tabe-i)。古代の日本語は母音連続を忌避していたので、これを解消する必要があった。

未然形の場合は、-ana.k- では先頭の a を消して na.k- にし (tabe-na.k-), -as- では先頭に s を付けて -sas- にし (tabe-sas-), -ar- では先頭に r を付けて -rar- にし (tabe-rar-), このようにして母音連続を解消した。-oo の場合は発生したのが江戸時代という比較的新しい時期だったので、-o と o の母音連続はそのまま容認されたが、語幹との間には y を入れることになった tabe-yoo)。

連用形の場合は、tabe-i から -i が省略された (tabe-Ø) と考えることにし、この -i が省略されたことを -Øi という記号で表示することにする (tabe-Øi)。このことを反映した活用表が表C5-7である。

表C5-7 一段動詞の活用表（仮=修正表）

動詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
食べる	た	べない べさす べらる べよう	べ	べる	べる	べれば	べろ
	tabe-	-na.k- -sas- -rar- -yoo	-Øi	-ru	-ru	-reba	-ro

従来の「活用表」は、五段活用動詞（子音末動詞）の場合は、動詞(nom-)に直接後続する形態素(-as-)の頭の母音(a)と動詞末の子音(m)の結び付いた拍(ma)をひらがなで表して語尾とし、また、一段動詞（母音末動詞）の場合は、動詞(tabe-)末の 1 拍(be)と、直接後続する形態素(-reba)の頭の部分(re)の 1 拍を並べて語尾(-bere, べれ)とし、便宜的にアイウエオ順に並べたものである。

いま、動詞(xxx-)に直接後続する形態素を、音素を単位にするローマ字で表記してリストにすれば、新しい表C5-1 及び 表C5-8 のような活用表になる。これが構造伝達文法が考える動詞の新=活用表である。

これから考察を進めるにあたって、まず「活用」自体を考える必要がある。

#### C5.4 そもそも「活用」とは

「活用」について考えてみる必要がある。国語学での考え方とは、上に見たような不合理を導き出すので、依拠することはできない。自分で根本から考えなければならないことになる。

構造伝達文法では「詞」と「語」を次のように定義している(『文法』5.1)。

「詞」とは、深層（文法構造分析段階）で「形態素」のことであり、それ以上分解すると（文法的）意味が消失してしまうような、意味・機能を担う最小の単位体である。したがって、「飲む」という語では「動詞」という「詞」としては nom- である。-u は終止機能、連体機能を持つ詞（描写詞）である。

「語」とは、表層（実際の言語表現活動段階）で安定する最小の単位体のことである。動詞 nom- は表層ではこのままでは安定せず、-u や -oo や -eba などの「描写詞」を必要とする。-as-u や -i=mas-u のように「態詞」や「助動詞」が付いた上で描写詞が付いたりもする。（「=」の記号は「併合記号」であり、「みかけの詞・語」あるいは「基」を作る。）それで、動詞 nom- は nom-u や nom-eba, nom-i, nom-i=mas-u となって「動詞語」となる。実際の言語表現活動での単位として認識されるのは「動詞語」の形である。「飲む」という語は「動詞語」という「語」としては nom-u である。

この前提に立って「活用」について考えてみる。『明鏡 国語辞典』には「活用」の意味がこうある。

活用……その物や人が持っている機能・能力を十分に  
生かして使うこと。

つまり、「動詞の活用」ということは「動詞が持っている機能・能力を十分に生かして使うこと」ということになる。「動詞の機能・能力を実際の言語表現活動で生かして使うこと」ということになる。それで、私たちはここで「動詞の活用」と「活用表」をこう定義することになる。

動詞の活用……動詞の機能を実際の言語表現活動で生かして使うこと。

活用表……動詞を活用するために、動詞に直接後続する要素（形態素）を表にしたもの。

動詞使用の実用性を配慮した拡大活用表もある(C5.9)。

上でみたように、動詞（nom-）を実際の言語表現活動で使うときには「動詞語」にして使う。では、動詞語を作るためにはどのような方法があるのだろうか。その方法について考える必要がある。

### C5.5 動詞を「活用」するための方法

動詞を活用するためには何種類かの方法がある。ここでは、動詞の後に付く形態素を構造図と共に挙げるが、参考のために、その形態素が対応している従来の活用形の名も、活用表と共に掲げることにする。**⑫**の -e- は従来は形態素としての認識がなかったために、古来の活用表では扱われていなかった。

①～⑧の形態素は構造を読むだけの「描写詞」であり、構造の形を変えない。  
⑨～⑫の形態素は否定属性と態属性の名称となっている形態素であり、構造に新たに付加されて構造の形を変える。

表C5-8 動詞に直接に接続する形態表（新=活用表）

形態の機能	詞	形態 nom-/tabe-	形態の名称	旧名称
構造の形を 変えない	(1) 文を終止する	描写詞	① -(r)u	基本描写詞
			② -e / -ro	命令描写詞
			③ -(y)oo	意志・推量描写詞 (未然形)
	(2) 主文を続ける	描写詞	④ -(i)	中止描写詞
			⑤ -(r)eba	条件描写詞 (仮定形)
	(3) 他属性や実体 と関連づける	描写詞	⑥ -(i)	他属性連続描写詞
			⑦ -(r)u	実体修飾第1描写詞
			⑧ -(i)	実体修飾第2描写詞
構造に 付加する	(4) 否定する	否定詞	⑨ -(a)na.k-	否定詞 (未然形)
	(5) 態を構成する	態詞	⑩ -(s)as-	原因態詞 (未然形)
			⑪ -(r)ar-	受影態詞 (未然形)
			⑫ -e-	許容態詞 なし

旧名称欄で（ ）内のものは形態の一部しか該当しないことを表す。  
⑩⑪は動詞の主体（主語）が変化する。⑫でも変化する場合がある。

## C5.6 構造を変えずに動詞を動詞語にするだけの形態素……描写詞

まず「構造の形を変えない形態素」(描写詞)について考える。表C5-8 の①～⑧ [(1)の①②③と、(2)の④⑤、及び(3)の⑥⑦⑧] がそれである。これらは構造をただ読んで、動詞を動詞語にするだけの描写詞である。

## C5.6 (1) その動詞で文を終止するための描写詞 -(r)u, -e/-ro, -(y)oo

ここに挙げる描写詞 ①-(r)u, ②-e/-ro, ③-(y)oo は、それを動詞に付加すると文を終止する動詞語を作る描写詞である。

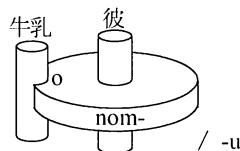
※ ( ) 内の要素はその前が子音であるか母音であるかの条件によって出没する出没性の音素である。たとえば、-(r)u の ( ) 内の r は「tabe-」のような、動詞末が母音である場合に「tabe-ru」のように現れ、「nom-」のような動詞末が子音の場合には「nom-u」となり、消える。このようなものには (r) のほかに(i), (s), (y) がある。

表C5-9 動詞の從来の活用表 (未然形、終止形、命令形)

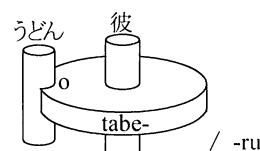
動詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
飲む	の	も		む			め
	nom-	-o		-u			-e
食べる	た	べ		べる			べろ
	tabe-	-		-ru			-ro

## ① -(r)u 基本描写詞 [從來の終止形]

-(r)u は動詞に付いて nom-u, tabe-ru のような動詞語を作り、文を終止させる。-(r)u は構造をそのまま認定して描写する機能があるので「認定描写詞」と呼んでもよいが、辞書の見出し語になつたりするなど、日本語話者にとっては動詞の基本の形としての認識があるので「基本描写詞」と呼ぶことにする。從來の名称「終止形」に倣つた「終止描写詞」と呼ぶと、②③も該当してしまう。



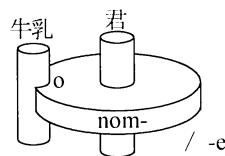
図C5-1 牛乳を nom-u.



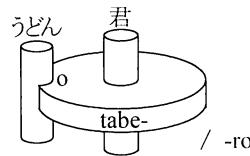
図C5-2 うどんを tabe-ru.

## ② -e / -ro 命令描写詞 [従来の命令形]

-e は子音で終わる動詞に付いて nom-e のような動詞語を作り、-ro は母音で終わる動詞に付いて tabe-ro のような動詞語を作り、文を終止させる。命令の対象者（聞き手）に対し、構造の表す事態が対象者によって現実世界に実現されることを発話者が優越者として強く望んでいる、その気持ちを伝える機能がある。それで「命令描写詞」と呼ぶ。



図C5-3 牛乳を nom-e.

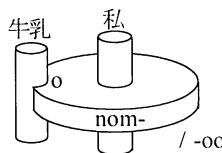


図C5-4 うどんを tabe-ro.

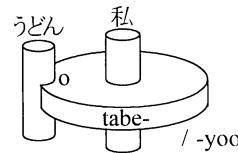
「命令描写詞」は、例えば「〈振り込め〉詐欺」「〈金送れ〉メール」のように実体（名詞：詐欺／メール）を修飾することもあるが、このことについては後述する（C5.8）。（-e / -ro 自体が修飾機能を持つものとは考えない。）

## ③ -(y)oo 意志・推量描写詞 [従来の未然形]

-oo は子音で終わる動詞に付いて nom-oo のような動詞語を、-yoo は母音で終わる動詞に付いて tabe-yoo のような動詞語を作り、文を終止させる。構造の表す事態を自分の力により現実世界に実現する意志を自分が持つこと、あるいは、構造の表す事態が他者の力により現実世界に実現する可能性があることを伝える機能がある。それで「意志・推量描写詞」と呼ぶ。「実現見込み描写詞」と言うこともできる（『文法』5.2、表5-6）。



図C5-5 牛乳を nom-oo.



図C5-6 うどんを tabe-yoo.

従来の活用表（表C5-9）には、例えば「飲もう nom-oo」の「も」（未然形）が載っていても、それに相当するはずの「食べよう tabe-yoo」の「べよ」は載っていない。もし載せるとすれば、未然形の欄に「べよ」が載るはずである。載

らずに現在に至っているのは、国語文法では「飲もう nom-oo」の最後の 1 つの o と、「食べよう tabe-yoo」の -yoo が同じ「(不変化)助動詞」であると考えているからである。かな文字使用ではそう扱わざるを得ないので認識が制約を受けているといえる。正しくは -oo と -yoo が同じ形態素であると考えるべきである。

この「意志・推量描写詞」は、例えば「〈英語で話そう〉会」のように実体(名詞：会)を修飾することもあるが、これは命令描写詞の「〈振り込め〉詐欺」の場合と同様のこととして考えられる(C5.8)。( -yoo 自体が修飾機能を持つものとは考えない。)

#### C5.6 (2) その動詞の後に主文を続けるための描写詞 -(i), -(r)eba

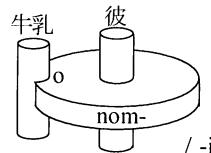
ここに挙げる描写詞 ④ -(i), ⑤ -(r)eba は、それだけでは文を終わらせずに、後に主文を続ける機能を持つ。動詞は -(i), -(r)eba が後続することによって動詞語となり、表層で安定する。

表C5-10 「飲む」 動詞の従来の活用表(連用形、仮定形)

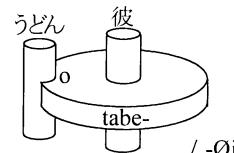
動詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
飲む	の		み			め	
	nom-		-i			-e	
食べる	た		べ			べれ	
	tabe-		-			-re	

#### ④ -(i) 中止描写詞 [従来の連用形]

-(i) は文を終止せずに、中止めにする描写詞である。



図C5-7 牛乳を nom-i,



図C5-8 うどんを tabe-Ø,

C5-1> 牛乳を nom-i, うどんを tabe-Øi, 元気になる。(図C5-7, -8)

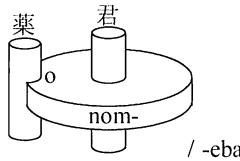
この文では、「牛乳を飲む」ことで文を終わらせずに、その後の「うどんを食べる」ことにつなげるために、中止めの -i を使用している (nom-i)。同じことを「うどんを食べる」ことにも適用し、「元気が出る」につなげているが、動詞 tabe- が母音で終わっているので、母音の連続 (tabe-i) を避けるために -i が省略され -θ の形態になっている (tabe-θ)。-θ を -θi と表記することもあるが、これは省略された詞が -i であることを明示するためである。

##### ⑤ -(r)eba 条件描写詞 [従来の仮定形十ば]

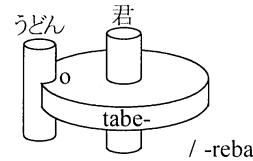
-(r)eba も文を終止せずに、中止めにする描写詞であるが、この場合は、動詞に条件の意味を付与する。

C5-2> 薬を nom-eba, 治る。 (図C5-9)

C5-3> うどんを tabe-reba, 元気が出る。 (図C5-10)



図C5-9 薬を nom-eba (治る)



図C5-10 tabe-reba (元気が出る)

動詞 tabe- は母音で終わっているので、母音の連続 (tabe-eba) を避けるために -r が挿入され、-reba の形になっている (tabe-reba)。

なお、「薬、飲めば nom-eba.」のように「-eba」の形で文を終止することもあるが、これは「いい」のような後件の省略されたものと考える。「-eba」そのものが終止機能を持つものとは考えない。(-ebaについては、A8.4 参照。)

#### C5.6 (3) 動詞を他属性や構造内外の実体と関係づけるための描写詞

ここに挙げる描写詞は2種類ある。

##### (3)a 動詞に他の属性と結び付く機能を与える描写詞

⑥ -(i)

##### (3)b 動詞に構造内外の実体を修飾する機能を与える描写詞

⑦ -(r)u と ⑧ -(i)

の2種類である。両者ともに動詞を他の要素と関係づけるための描写詞である。

## (3) a 他属性連續描写詞 -(i)

動詞が他属性との連続描写をする場合には描写詞 -(i) を使用する。これは從来の連用形である。nom-i=hazime- のような「みかけの詞」を作つて、さらに基本描写詞 -ru を伴い、nom-i=hazime-ru のような「みかけの語」となり、表層で安定する。助動詞との併合、他の動詞との併合がある。

「併合」については『文法』5.1 注1を参照。「=」は併合手である。

表C5-11 動詞の從來の活用表（連用形）

動詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
飲む	の		み				
	nom-		-i				
食べる	た		べ				
	tabe-		-				

## ⑥ -(i) 他属性連續描写詞 [從來の連用形]

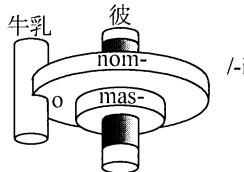
## [助動詞との連続]

-(i) は動詞に他の属性を連続させる描写詞であるが、まず他の属性が助動詞の場合を見てみる。「助動詞」には、=(ma)s-、=t(e)-、=a(r)-がある（第10章）。

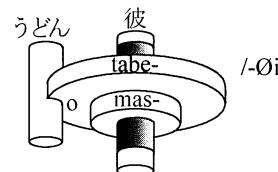
次の例文では助動詞の =(ma)s- が適用されている。

C5-4> 牛乳を nom-i=mas- (図C5-11)

C5-5> うどんを tabe-Øi=mas- (図C5-12)



図C5-11 nom-i=mas-



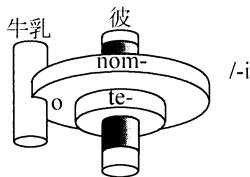
図C5-12 tabe-Øi=mas-

「飲んで」のようないわゆる「テ形」は、nom- にこの -i が付いたうえで =te- が後続したものである。動詞に直接 te が付くわけではない。

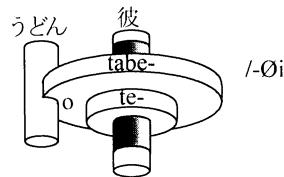
C5-6> 牛乳を nom-i=te- (図C5-13)

nom-i=te- は音便化して non-Ø=de- になる（A 3 章）。

C5-7> うどんを tabe-Øi=te- (図C5-14)



図C5-13 nom-i=te- 飲んで



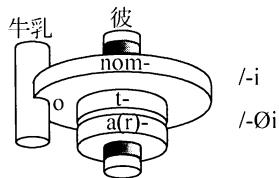
図C5-14 tabe-Oi=te- 食べて

「飲んだ」のような「タ形」は、このテ形にさらに助動属性  $a(r)$ - が付いたものである。

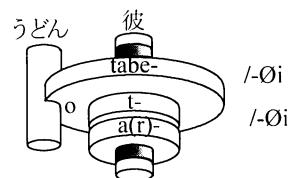
C5-8> 牛乳を nom-i=t-Oi=a(r)- (飲みた) (図C5-15)

non-O=d-Oi=a(r)- 「飲んだ」への音便化はA 3 章参照。

C5-9> うどんを tabe-Oi=t-Oi=a(r)- (食べた) (図C5-16)



図C5-15 nom-i=t-Oi=a(r)- 飲んだ



図C5-16 tabe-Oi=t-Oi=a(r)- 食べた

この  $=t-Oi=a(r)-$  「た」の  $r$  は条件描写詞 -eba が後続する場合に出現して、  
 $=t-Oi=ar-aba$  となる。(食べたらば)

-aba の ba は省略しても同じ意味が保てるので、

$=t-Oi=ar-a$  (食べたら) となることもある。

条件描写詞 -eba は、なぜこの「たら  $=t-Oi=ar-a(ba)$ 」のときだけ -a(ba) で、  
その他の場合は「飲めば nom-eba」のように -(r)eba であるのか、という疑問  
がわく。これについては歴史的理由がある(A8.4参照)。

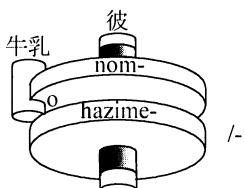
### [他の動詞との連続]

-i- は 2 つの属性を連続させる描写詞であるが、上に見たのは他の属性が助動詞の場合であった。次に他の属性が動詞の場合を見てみる。

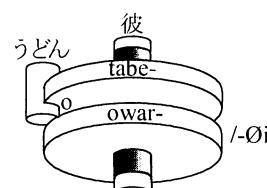
C5-10> 牛乳を nom-i=hazime- (飲みはじめる) (図C5-17)

C5-11> うどんを tabe-Oi=owar- (食べおわる) (図C5-18)

このように、他の動詞が続く場合には複合動詞を作ることになる。



図C5-17 nom-i=hazime-i



図C5-18 tabe-Øi=owar-Øi

## (3) b 実体（名詞）修飾機能の描写詞

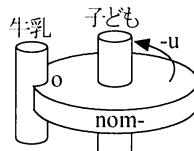
動詞で実体（名詞）を修飾する場合には描写詞 -(r)u, -(i) を使用する。

表C5-12 動詞の從來の活用表（連用形, 連体形）

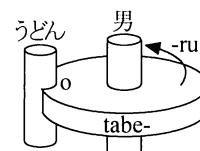
動詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
飲む	の		み		む		
	nom-		-i		-u		
食べる	た		べ		べる		
	tabe-		-		-ru		

## ⑦ -(r)u 実体修飾第1描写詞 [從來の連体形]

-(r)u は「牛乳を nom-u 子ども」(図C5-19), 「うどんを tabe-ru 男」(図C5-20) のように実体（名詞）を修飾する動詞語を作る描写詞である。



図C5-19 牛乳を nom-u 子ども



図C5-20 うどんを tabe-ru 男

もちろん、「子どもが nom-u 牛乳」(図C5-19), 「男が tabe-ru うどん」(図C5-20) のように、別の実体を修飾することもできる。

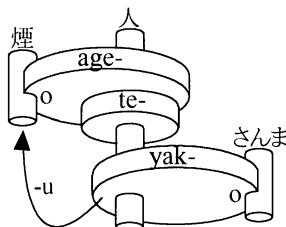
これらは動詞が自身に主格やヲ格という「格」関係で関わっている実体（名詞）を修飾しているので、いわゆるウチの関係の修飾である。

-(r)u は次のようにソトの関係の実体（名詞）も修飾できる。

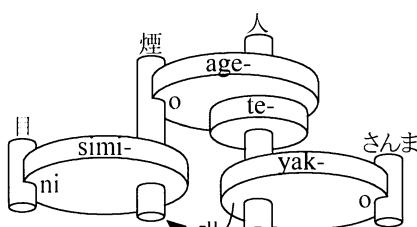
C5-12> 人が煙を上げてさんまを焼く。

という文があるとき、構造は 図C5-21 のようになっているので、「さんまを焼く煙（yak-u 煙）」のように「煙」を修飾したとすれば、「焼く」という動属性が自分に直接「格」関係で関わっていない実体「煙」を修飾することになるので、ソトの関係ということになる。ちなみに、この修飾された実体「(さんまを yak-u) 煙」を、例えば図C5-22のような拡大構造中の他の属性「simi-」の主格に置けば、次のような文ができる。

C5-13> さんまを焼く煙が目にしめる。 yak-u 煙



図C5-21 さんまを焼く煙

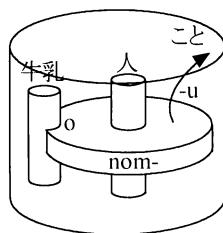


図C5-22 さんまを焼く煙が目にしめる

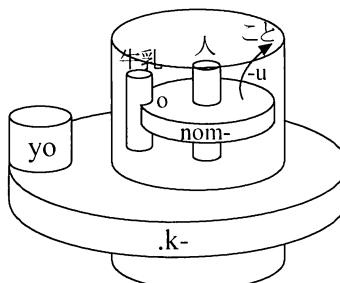
この名詞修飾関係のことについてはA16章を参照されたい。

また、動詞構造が「こと・もの・の・はず・まで……」のような包含実体の中に入って、「(人が)牛乳を nom-u こと」(図C5-23)のように包含実体(包含名詞)を修飾する場合もある。このとき、動詞構造が全体として名詞として使えるようになり、主格に立ったりする。

C5-14> [牛乳を nom-u こと] は良い。(図C5-24)



図C5-23 牛乳を nom-u こと



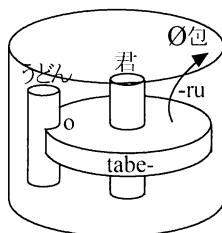
図C5-24 牛乳を nom-u こと $\emptyset_1$ は良い

動詞構造が「こと」ではなく、ゼロの包含実体「 $\emptyset$ 包」の中に入って「 $\emptyset$ 包」を修飾すると(図C5-25)，あたかも動詞語(tabe-ru)がそのまま名詞になって

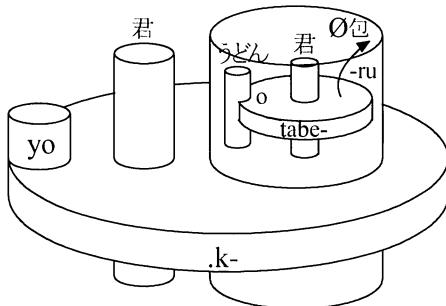
いるものと感じられるようになる。古代語で動詞連体形がそのまま名詞として使用された現象がこれに当たる。

C5-15> 君は [うどんを tabe-ru  $\emptyset$ 包] がいい。(図C5-26)

この文では、「君」が本主体、「うどんを tabe-ru  $\emptyset$ 包」は属性主体である。



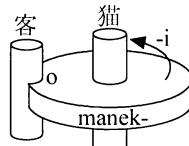
図C5-25 tabe-ru  $\emptyset$ 包



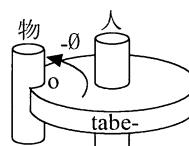
図C5-26 君は [うどんを tabe-ru  $\emptyset$ 包] がいい

#### (8) -(i) 実体修飾第2描写詞 [従来の連用形]

-(i) は「manek-i=猫」(招き猫) や「tabe- $\emptyset$ i=物」(食べ物) のように、動詞について名詞を修飾する。これを実体第2修飾と呼ぶが、第2修飾の場合は「招き猫」や「食べ物」のように「みかけの詞」(『文法』5.1 注1)のようになることが多い。みかけの詞では、それがたかも1つの詞(この場合は実詞<名詞>)であるかのように感じられる。



図C5-27 manek-i=猫



図C5-28 tabe- $\emptyset$ i=物

みかけの詞は、そのまま扱う場合と1つの実詞のように扱う場合があるので、

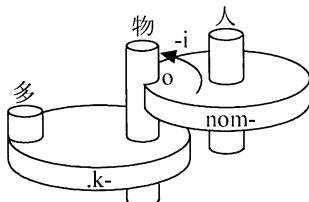
C5-16> 飲み物が多い。

という文の構造は2とおりで表現できる(図C5-29, -30)。

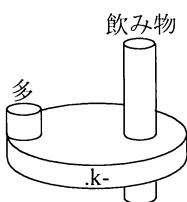
また、

C5-17> 甘い飲み物が多い。(図C5-31)

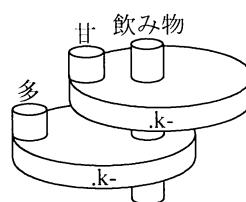
のように修飾される場合は「飲み物」を1実詞とする方が扱いやすい。



図C5-29 nom-i=物が oo.k-i



図C5-30 飲み物が

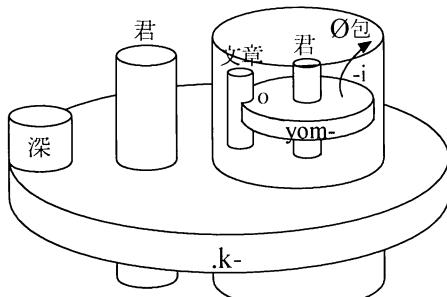


図C5-31 甘い飲み物が

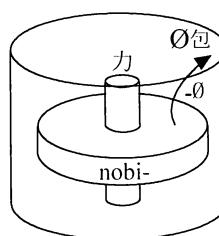
- (i) は 包含実体を修飾する場合もある。『文法』9.2を参照されたいが、ここにはゼロの包含実体を修飾する場合を挙げておく。これは従来、動詞の連用形が名詞として使用される現象として扱われていたもので、次の例の中の「読み」「伸び」に当たる。

C5-18> 君は文章の読み(yom-i=Ø包)が深い。(図C5-32)

C5-19> 君は力の伸び(nobi-i=Ø包)が速い。(図C5-33, 「伸び」のみ図示)



図C5-32 yom-i=Ø包 が深い



図C5-33 nobi-Ø i=Ø包

◎なお、動詞連用形の名詞化と連用形による名詞修飾に関して木村泰介君が考察を行い、卒業論文にまとめたので、C5.12 (C5.K) にその内容を本書の形式に合わせて掲載する。分かりやすい記述で、動詞の Ø 名詞修飾について論じているほか、「よりコンパクトな - (i), より説明的な -(r)u」として要約される、連用形による修飾と連体形による修飾の異同に関する新見もある。

## C5.7 動詞に付加される属性の名称である形態素……属性詞

C5.6で扱った①～⑧の詞は構造の形を変えることはなかったが、ここで扱う⑨～⑫の詞は動詞に付加される形のものであり、構造が拡張する。

⑨ -(a)na.k-、⑩ -(s)as-、⑪ -(r)ar- は從来の活用表では a を捉えて未然形として扱われていた。⑫ -e- は、例えば yom-e-(読める)となる場合、新たな「可能動詞」が形成されたものとして扱い、yom-という動詞の「可能形」という「活用形」であるとの認識はほとんどなかった。このため、-e- は活用表には入れられていなかった。

表C5-13 動詞の從来の活用表

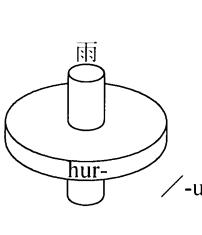
動詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
飲む	の	ま					
	nom-	-a					
食べる	た	べ					
	tabe-	-					

## C5.7 (1) 動詞否定属性詞 [從來の未然形+ない]

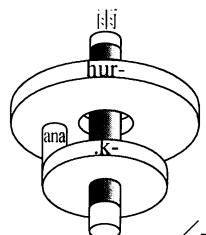
## ⑨ -(a)na.k-

動詞否定属性は -(a)na.k- である。これが動詞に付くと、主体はその属性を持たなくなる。-(a)na.k- は形容詞の活用 (C5.10) になるので、基本描写詞は -(a)na.k-i のように、-i となる。

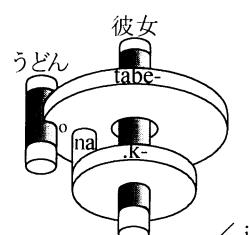
-(a)na.k- は否定属性である。詳しくは『文法』第26章を参照されたい。



図C5-34 雨が降る



図C5-35 雨①は降らない



図C5-36 うどんは食べない

旧活用形の考え方では hur-ana.k-i の下線部 (ふら) を未然形としていた。つまり「ふ」が動詞の語幹で、「ら」が活用語尾であると捉えていた。

## C5.7 (2) 態属性詞 [従来の未然形+(さ)す]

## ⑩ -(s)as- 原因態詞

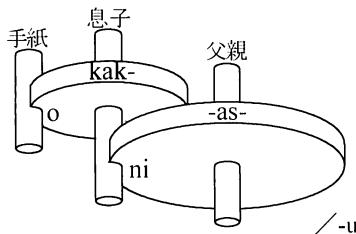
-(s)as- は原因態詞である(『文法』第12章, B 2章, B 4章などを参照)。

①から⑨までの動詞の主体が, ⑩になると動詞の主体ではなくなる。

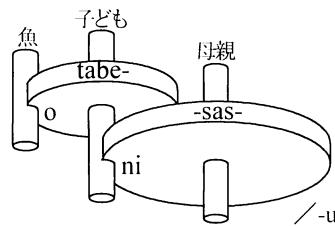
C5-20> 父親が kak-u。 (「父親」が kak-の主体)

C5-21> 父親が息子に kak-as-u。 (「父親」は kak-の主体ではなくなる)

動詞「書く」の活用とはいえ, 動詞の主体を変えての活用である。



図C5-37 父親が息子に手紙を kak-as-



図C5-38 母親が子どもに魚を tabe-sas-

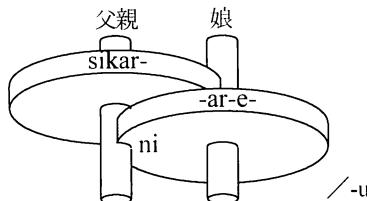
旧活用形の考え方では kak-as-u の下線部(かか)を未然形としていた。  
つまり前の「か」が動詞の語幹で, 後ろの「か」が活用語尾であると捉えていた。

## ⑪ -(r)ar- 受影態詞 [従来の未然形+(ら)る]

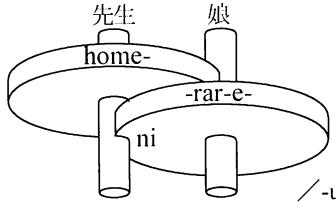
-(r)ar- は受影態詞(受動態詞)である(『文法』第12章など)。-(r)ar- には許容態の -e- が付くことが多いので, ここでの構造図示は -e- を付加しておく。  
この⑪でも⑩と同様に, 動詞を活用させると動詞の主体が変わる。

C5-22> 娘が sikar-u。 (「娘」が sikar- の主体)

C5-23> 娘が父親に sikar-ar-e-ru。 (「娘」は sikar- の主体ではなくなる)



図C5-39 娘が父親に sikar-ar-e-



図C5-40 娘が先生に home-rar-e-

旧活用形の考え方では sikar-ar-e-u の下線部(しから)を未然形としている

た。つまり「しか」が動詞の語幹で、「ら」が活用語尾であると捉えていた。

⑩ -(s)as-, ⑪ -(r)ar- の両者は歴史的に動詞を態拡張（『発展B』BJ5④）させた。⑩ -(s)as- は新たな他動詞を作り、⑪ -(r)ar- は新たな自動詞を作ることが多く、nar-as-（鳴らす）、uk-ar-（受かる）のような動詞の場合は nar-（鳴る）、uk-（受く）から動詞としての意味を変化させ、新たな別の動詞として形成されたものである。yom-as-（読ます）、sikar-ar-（しからる）のような動詞の場合には動詞の意味がそのまま保たれており、態拡張ではなく、yom-（読む）、sikar-（しかる）の活用形として認識された。

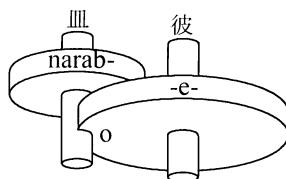
#### ⑫ -e- 許容態詞 [従来の活用表にはない]

-e- は許容態詞である。詳しくは第12章、B 3 章などを参照されたい。

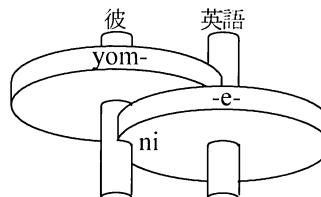
この -e- は⑪⑫同様、-e- 添加による動詞の活用において動詞の主体が変わることと、①～⑩同様、変わらない場合がある。

C5-24> 彼が(列に) narab-u。 (「彼」が narab- の主体。)

C5-25> 彼が皿を narab-e-ru。 (「彼」は narab- の主体ではなくなる。)



図C5-41 彼が皿を narab-e-

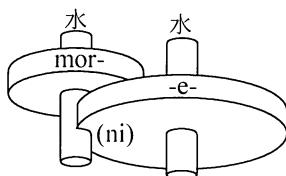


図C5-42 英語が yom-e-

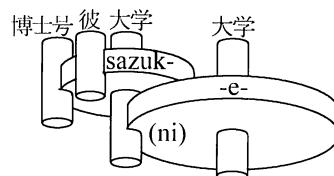
次のような「態補強」(B 3 章)の場合は動詞の主体は変わらない。

C5-26> 水が mor-u。 (「水」が mor- の主体。)

C5-27> 水が mor-e-ru。 (「水」が mor- と -e- の主体。対自許容)



図C5-43 水が mor-e-



図C5-44 博士号を sazuk-e-

C5-28> 大学が彼に博士号を sazuk-u。 (「大学」が sazuk- の主体)

C5-29> 大学が彼に博士号を sazuk-e-ru。 (「大学」が sazuk-e- の主体)

この ⑫ -e- の場合は (古代語の -ur- と共に) 動詞に適用されて, ak- (あく), kir- (切る), mor- (漏る) のような子音幹動詞を, ak-e- (あける), kir-e- (切れる), mor-e- (漏れる) のような母音幹動詞に拡張し, 新たな(可能動詞を含む)自動詞, 他動詞を作った。 -e- は, 適用された動詞においてことごとくこのような新しい動詞が形成されたものと認識されたために, 元の動詞の活用形と認識されることがなかった。これが活用表に記載のない理由である。

「可能動詞」を元の動詞の活用形の 1 つであるものとして捉えていれば「可能形」(よ・め)(仮定形?)というものができたはずである。現代語の構造としては「読める yom-e-」(図C5-42)という形でこれが認識できる。ただし, 母音幹動詞では「食べられる tabe-rar-e-」(未然形?)となり, 構造が異なるので, 活用形としての「可能形」が立てられなかつたのだろうと考えられる。

なお, -ur- は -e- と 機能が同じもの (許容態) であったために -e- に統一されて消滅した。この現象が下二段活用の下一段活用化と言われる現象である (『発展B』B5章)。(-i- にも言及する必要があるが, -i- は数も少ないので, -e- に準ずるものとしておく。B5章参照。)

## C5.8 非連体機能による実体修飾

「命令描写詞」「意志・推量描写詞」は連体機能を持つわけではないが、「第3修飾法(ノ複合)」「第4修飾法(+複合)」(A17⑯⑰)により実体(名詞)を修飾することがある。

「命令描写詞」は, たとえば「〈振り込め〉詐欺」「〈金送れ〉メール」のような形で実体(名詞: 詐欺・メール)修飾をする。このとき「振り込め・金送れ」は

C5-30> 犯人が詐欺で「金を口座に振り込め」と言う。(図C5-45)

C5-31> 息子が父親に「金を送れ」というメールを出す。(図C5-46)  
の引用部分であり, この「 」内の引用部分が実体(名詞)として扱われて引用の「と」格に立つものと考えられる。このような, 引用部分が実体(名詞)として扱われることを記号〔 〕で表し, [hur-i=kom-e] のようにする。

また、このときの実体修飾法は第4修飾法（+複合）であり、記号 + を用いて表示し、

「[hur-i=kom-e] + 詐欺」 「[振り込め] + 詐欺」

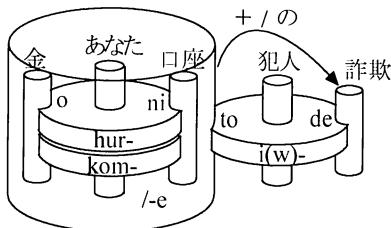
「[金 Ø を okur-e] + メール」 「[金遅れ] + メール」

のようにする (A17⑯)。もし、第3修飾法（ノ複合）で修飾すれば「+」が「の」になり、

「[振り込め] の詐欺」 「[振り込め] との詐欺」

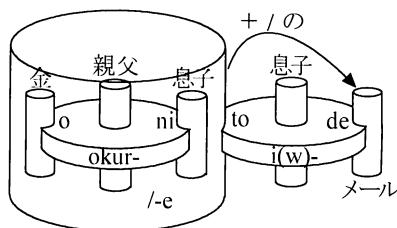
「[金送れ] のメール」 「[金送れ] とのメール」

のようになる (A17⑰)。



[hur-i=kom-e] + 詐欺  
[hur-i=kom-e] の 詐欺  
[hur-i=kom-e] との 詐欺

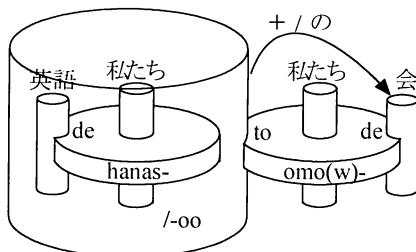
図C5-45



[金 okur-e] + メール  
[金 okur-e] の メール  
[金 okur-e] との メール

図C5-46

「意志・推量描写詞」は、たとえば「[英語で話そう] 会」のような形で実体（名詞：会）修飾をする。これは命令描写詞の「[振り込め] 詐欺」の場合と同様のこととして考えることができる。こちらの場合も「[英語で話そう] の会」「[英語で話そう] との会」の可能性もある。



[英語で hanas-oo] + 会  
[英語で hanas-oo] の 会  
[英語で hanas-oo] との 会

図C5-47

## C5.9 拡大活用表=例

拡大活用表は国語教育、日本語教育等何らかの実用性をめざして作成されるもので、目的に応じて構成内容が異なり、二次的接続形式をも取り入れる。ここでは見本として拡大活用表の一例を掲載する。それぞれの拡大活用形態の構造図はここに示さないので、適宜、該当図を参照されたい。

表C5-14 新拡大活用表=例（動詞に二次的に接続する形態を含む表）

(注) ⑨はスペースの関係で「拡大活用表例」の欄で -(a)na.(k)- が省略してある。

一次形式の機能		活用表 (nom-/tabe-)	拡大活用表例	語 例 (形態の名称は省略)
構 造 の 形 を 変 え な い	(1) 文を終止する	① -(r)u	-(r)u	飲む。
		② -e / -ro	-e / -ro	飲め。
		③ -(y)oo	-(y)oo	飲もう。
	(2) 主文を続ける	④ -(i)	-(i)	飲み,
		⑤ -(r)eba	-(r)eba	飲めば,
	(3) 他属性や実体と関連づける	⑥ -(i)	- -(i)=te- $\emptyset$ i -(i)=t- $\emptyset$ i=a- $\emptyset$ u -(i)=t- $\emptyset$ i=ar-a(ba) -(i)=t- $\emptyset$ i=ar-i -(i)=mas-u -(i)=mas-en -(i)=mas-yoo -(i)=nagara	飲み [始める] 飲んで 飲んだ 飲んだら (ば) 飲んだり 飲みます 飲みません 飲みましょう 飲みながら
			- -(r)u -(r)u= $\emptyset$ 包-t $\emptyset$ -(r)u= $\emptyset$ 包-n $\emptyset$ =ar-a(ba)	飲む [人] 飲むと 飲むなら (ば)
			- -(i)	飲み [かた]
	(4) 否定する	⑨ -(a)na.(k)- (注)	- -i -i= $\emptyset$ 包-de -i= $\emptyset$ 包-de=(ar-i=ma)s-u -u=te- $\emptyset$ i - $\emptyset$ u=ar-oo - $\emptyset$ u=ar-i=t- $\emptyset$ i=a- $\emptyset$ u	飲まない 飲まないで 飲まないです 飲まなくて 飲まなかろう 飲まなかつた
			- (s)as-u (s)as-e-ru (s)as-ar-e-ru	飲ます 飲ませる 飲まされる
	(5) 態を構成する	⑩ -(r)ar-	- (r)ar-u (r)ar-e-ru	飲まる 飲まれる
		⑪ -e-	- -e-ru	飲める

## C5.10 形容詞の新活用表

ここで、形容詞の新活用表を動詞の新活用表との対比で示したい。

表C5-15 動詞／形容詞に直接に接続する形態表（新活用表）

形態の機能		詞	形 態			形態の名称 (内は形容詞にない形態)
			番	動詞 nom-	形容詞 yo.k-	
構 造 の 形 を 変 え な い	(1) 文を終止する	描写詞	①	-(r)u	-i	基本描写詞
			②	-e / -ro		(命令描写詞)
			③	-(y)oo		(意志・推量描写詞)
	(2) 主文を続ける	描写詞	④	-(i)	-u	中止描写詞
			⑤	-(r)eba	-ereba	条件描写詞
	(3) 他属性や実体と関連づける	描写詞	⑥	-(i)	-u	他属性連続描写詞
			⑦	-(r)u	-i	実体修飾第1描写詞
			⑧	-(i)	-u	実体修飾第2描写詞
構 造 に 付 加 す る	(4) 否定する	否定詞	⑨	-(a)na.k-		(否定詞)
	(5) 態を構成する	態詞	⑩	-(s)as-		(原因態詞)
			⑪	-(r)ar-		(受影態詞)
			⑫	-e-		(許容態詞)

表C5-16 従来の形容詞の活用表

形容詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
長い	なが	かろ	く かつ	い	い	けれ	○

形容詞は xxx.k- という形をしている (naga.k- ) (『文法』第8章)。

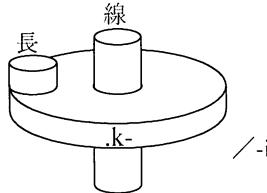
## C5.10 (1) 文を終止する描写詞 -i

形容詞の文を終止する描写詞は、①の基本描写詞 -i のみである。動詞と異なり、②命令描写詞、③意志・推量描写詞がない。

形容詞の基本描写詞を使用するとき、現代語では .k- は発音されない。

C5-32) 線 $\emptyset$ は naga.**k**-i。 (線は長い。)

**█** (□で囲まれた音素) は発音されないことを示す。



図C5-48 線 $\emptyset$ は naga.**k**-i

## C5.10 (2) 主文を続ける描写詞 -u, -ereba

形容詞の主文を続ける描写詞は、動詞と同様、④と⑤の2種類がある。

## ④中止描写詞 -u

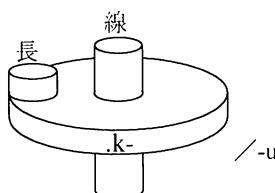
中止めは、中止描写詞 -u で行う。このとき .k- は発音される。

C5-33) 線が naga.k-u, …… (線が長く、……)

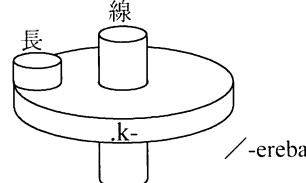
## ⑤条件描写詞 -ereba

条件描写は、⑤条件描写詞 -ereba で行う。.k- は発音される。ただし、-ereba は研究が進めば  $-i=\emptyset$ 包 $-\emptyset$ ga=ar-eba に分析される可能性があり、その場合には⑦に別形態の加わった拡大活用形態ということになる。

C5-34) 線が naga.k-ereba, …… (線が長ければ、……)



図C5-49 naga.k-u



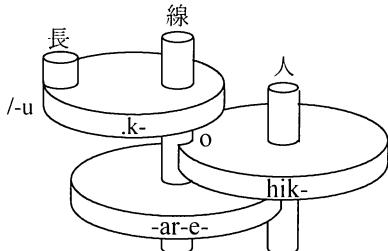
図C5-50 naga.k-ereba

## C5.10 (3) 他属性や実体と関連づける描写詞 -u, -i, -u

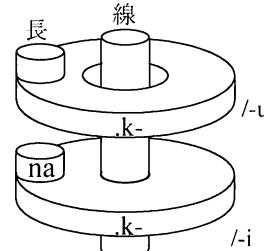
## ⑥他属性連続描写詞 -u

形容詞の後に他の属性を続けて描写するときは、⑥他属性連続描写詞 -u を使用する。このとき .k- は発音される。

C5-35) 線が naga.k-u 引かれた。(線が長く引かれた。)



図C5-51 naga.k-u hik-ar-e-



図C5-52 線が naga.k-u na[k]-i

形容詞は否定もこの⑥で行う。「ない」という別の形容詞が続く。(この否定のための形容詞は一般に補助形容詞と呼ばれている。)

C5-36) 線が naga.k-u na[k]-i。(線が長くない。)

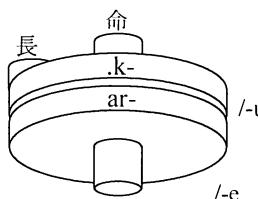
また、形容詞は、そのままでは、②命令描写と③意志描写ができない。これを可能とするためには形容詞を⑥の他属性連続描写詞 -u で動詞 ar- と併合して疑似動詞 (naga.k-Øu=ar- 長かる) にする必要がある。疑似動詞になるので、後に続く描写詞は動詞と同じものになる。

② 命令描写詞      naga.k-Øu=ar-e      長かれ

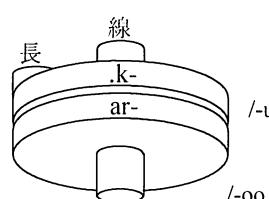
③ 意志・推量描写詞      naga.k-Øu=ar-oo      長かろう

形容詞を過去にするときも疑似動詞形が必要である。

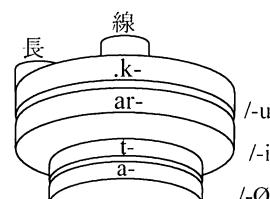
⑥ 他属性連続描写詞      naga.k-Øu=ar-i=t-Ø=a-Ø      長かった



図C5-53 naga.k-Øu ar-e



図C5-54 naga.k-Øu ar-oo



図C5-55 naga.k-Øu ar-i=t-Ø=a-Ø

## ⑦実体修飾第1描写詞 -i

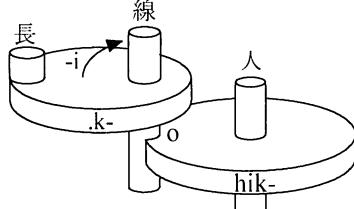
形容詞で実体(名詞)を修飾するときは、⑦実体修飾第1描写詞を使用する。

このとき .k- は発音されない。

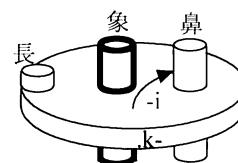
C5-37) naga.k-i 線を引く。

C5-38) (象の) naga.k-i 鼻

(修飾関係は『文法』19.3 参照)



図C5-56 naga.k-i 線を hik-

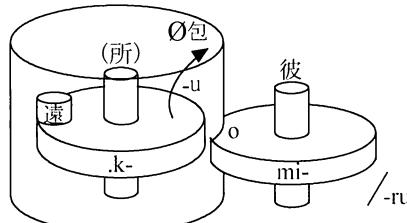


図C5-57 naga.k-i 鼻

## ⑧実体修飾第2描写詞 -u

形容詞を実体(名詞)のようにするときは、⑧実体修飾第2描写詞 -u を使用して、 $\emptyset$ の包含実体を修飾する。.k- は発音される。

C5-39) 彼  $\emptyset_1$  は too.k-u  $\emptyset$ 包を見る。



図C5-58 彼 $\emptyset_1$  は too.k-u  $\emptyset$ 包を見る

## C5.11 断定基の活用表

断定基の活用表も考えてみたい。断定基は -de=ar- という形式をしている (19.2.2)。従来の「形容動詞」と重なる部分もある。

表C5-17 断定基に直接に接続する形態表（新活用表）

形態の機能		形 態			形態の名称	
		番	断定基	活用詞		
構 造 の 形 を 変 え な い	(1) 文を終止する	①	-de=ar- -de=ar-	-u □	である。 だ。	基本描写詞
		②	-de=ar-	-e	あれ。	命令描写詞
		③	-de=ar- -de=ar-	-oo -oo	であろう。 だろう。	意志・推量描写詞
	(2) 主文を続ける	④	-de=ar- -de=ar-	-i □	であり, で,	中止描写詞
		⑤	-de=ar- -ni=ar-	-eba -a(ba)	であれば, なら(ば),	条件描写詞
		⑥	-de=ar-	-i	あり	他属性連続描写詞
	(3) 他属性や実体と関連づける	⑦	-de=ar- -ni=ar-	-u □	ある な	実体修飾第1描写詞
		⑧	-de=ar-	-i	あり	実体修飾第2描写詞
		⑨	-de=ar-	-a.na.k-	でない	否定詞
	(4) 否定する	⑩				原因態詞
		⑪				受影態詞
		⑫				許容態詞
	(5) 態を構成する					

□ 内は発音されない部分である。

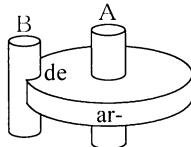
表C5-18 従来の形容動詞の活用表

形容動詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
元気だ	元気	だろ	だつ で に	だ	な	なら	○

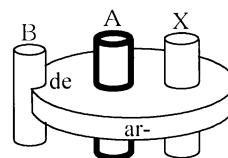
断定基は -de=ar- という形式をしており、次の構造を持つ(第11章、19-22))。

C5-40) AØ₁はB-de=ar- ここ(A)は公園(B)である

C5-41) AØ₁はXがB-de=ar- 公園(A)は桜(X)がみごと(B)である



図C-59 AØ₁はB-de=ar-



図C-60 AØ₁はXがB-de=ar-

断定基には单一の主体が立つ場合(单主語・図C5-59)と、複数の主体が立つ場合(複主語・図C5-60)があるが、複主体の場合は单一主体の場合に準じて考えることができるので、本節では单一主体の場合について論じることにする。

断定基は -de=ar- という形式をしていて、基末が ar- という動詞であるので、基本的には動詞と同じ活用になる。ただし、(5)の「態を構成する」場合、「構造に付加する」形態を使用することは、次のような特殊な場合に限られる。

⑩ AØ₁はB-de=ar-as-e-rar-e- (AØ₁はBであらせられる。尊敬)

⑪ AØ₁はB-de=ar-ar-e- (AØ₁[／]はBであられる。尊敬 [／受影])

⑫ AØ₁はB-de=ar-e- (AØ₁はBである。可能)

これらは現代語としてほとんど生産性がなく、語として扱えば十分であると考えられるので、本節では⑩⑪⑫を扱わないことにする。

断定基の基末の動詞 ar- の r は C5-44) などのように、発音されない場合がある。

de 格に置かれる実体(名詞)は、事物を表すものと様態を表すものに分けて考えることにする。これは両者には ⑦の実体修飾第1描写において若干の相違があるからである。事物を表す例として「学生」を、様態を表す例として「元気」を使用する。

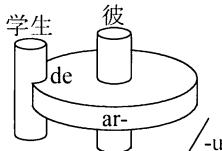
## C5.11 (1) 文を終止する描写詞 -u, -e, -oo

## ① 基本描写詞 -u

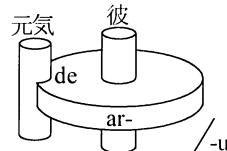
-u は文を基本描写で終止する描写詞である。

C5-42) 彼 $\emptyset_1$ は 学生-de=aru。(彼は学生である。)

C5-43) 彼 $\emptyset_1$ は 元気-de=aru。(彼は元気である。)



図C5-61 学生-de=ar-u

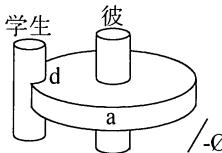
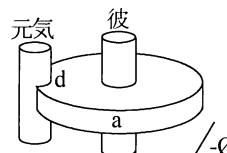


図C5-62 元気-de=ar-u

断定基の場合は、「である」を「だ」という形にして文を終止することができる。次の例文の中にある  $\square$  のような、四角い枠内の要素は、表層文には形態(音声)として現れないことを意味している。この場合は r-u も発音されない。

C5-44) 彼 $\emptyset_1$ は 学生-de=ar $\square$ 。(彼は学生だ。)

C5-45) 彼 $\emptyset_1$ は 元気-de=ar $\square$ 。(彼は元気だ。)

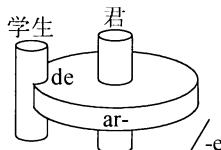
図C5-63 彼 $\emptyset_1$ は学生だ図C5-64 彼 $\emptyset_1$ は元気だ

## ② 命令描写詞 -e

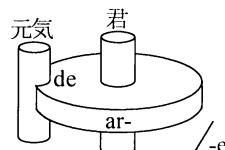
命令描写詞 -e は命令・依頼・祈願等の気持ちで文を終止する描写詞である。

C5-46) 君 $\emptyset_1$ は 学生-de=are。(君は学生あれ。)

C5-47) 君 $\emptyset_1$ は 元気-de=are。(君は元気あれ。)



図C5-65 学生あれ



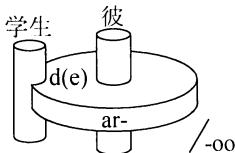
図C5-66 元気あれ

## ③ 意志・推量描写詞 -oo

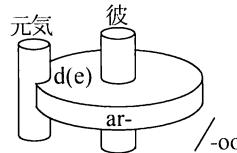
意志・推量描写詞 -oo は、意志や推量を表す気持ちで文を終止する描写詞である。ただし、推量の場合は基の先頭の -de を -d のみにすることが多い。

C5-48) 彼<sub>01</sub>は 学生-d(e)=ar-oo。(彼は学生であろう／だろう。)

C5-49) 彼<sub>01</sub>は 元気-d(e)=ar-oo。(彼は元気であろう／だろう。)



図C5-67 学生であろう／だろう



図C5-68 元気であろう／だろう

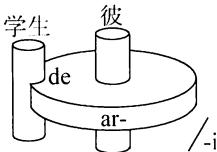
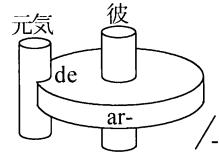
## C5.11 (2) 主文を続ける描写詞 -i, -eba

## ④ 中止描写詞 -i

中止描写詞 -i は、文を中止めにして、主文を後に続ける描写詞である。

C5-50) 彼<sub>01</sub>は 学生-de=ar-i, (彼は学生であり, …[主文]…。)

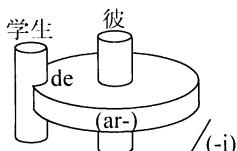
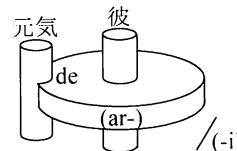
C5-51) 彼<sub>01</sub>は 元気-de=ar-i, (彼は元気であり, …[主文]…。)

図C5-69 彼<sub>01</sub>は学生であり,図C5-70 彼<sub>01</sub>は 元気であり,

断定基の中止めの場合は、-de=ar-i の =ar-i の部分が省略されることも多い。

C5-52) 彼<sub>01</sub>は 学生-de[ar-i], (彼は学生であり, …[主文]…。)

C5-53) 彼<sub>01</sub>は 元気-de[ar-i], (彼は元気であり, …[主文]…。)

図C5-71 彼<sub>01</sub>は学生で,図C5-72 彼<sub>01</sub>は 元気で,

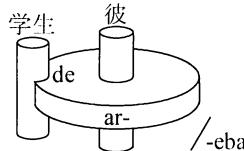
なお、旧活用表で連用形とされている「で」はこのように実は格詞である。

## ⑤ 条件描写詞 -eba

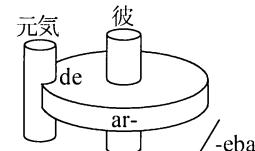
条件描写詞 -eba は、文を条件の形にして、帰結文である主文を後に続ける描写詞である。

C5-54) 彼が 学生-de=ar-eba, (彼が学生であれば, …[主文]…。)

C5-55) 彼が 元気-de=ar-eba, (彼が元気であれば, …[主文]…。)



図C5-73 彼が学生であれば,



図C5-74 彼が元気であれば,

断定基の条件描写の場合には、

「であれば -de=ar-eba」のほかに、

「ならば -ni=ar-aba」の形もある。

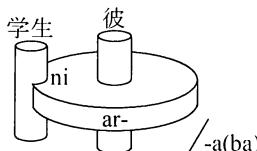
「ならば -ni=ar-aba」の形の方が古い。この形は平安時代末期に「にて nite」から「で de」が生じるよりはるか以前、前記録時代より存在していた。-aba は、日本語の前記録時代に仮定の「む -am-」と条件の「は -fa」が結合して

-am-fa → -amba → -aba

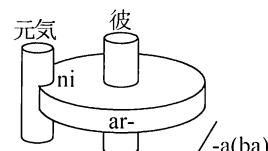
のように音声的に変化して生じた仮定条件を示す形態である (C7.3, A 6 章参照)。この「ならば」の「ば」は省略しても意味に変化がないので、近世に入ると、「ば」を省略することが一般的になってきた (A 8 章参照)。

C5-56) 彼が 学生-ni=ar-a(ba), (学生ならくば), …[主文]…。)

C5-57) 彼が 元気-ni=ar-a(ba), (元気ならくば), …[主文]…。)



図C5-75 彼が学生なら(ば),



図C5-76 彼が元気なら(ば),

「であれば -de=ar-eba」の方は比較的新しいので、de 格の形式は依然として保たれており、「(学生／元気)だれば -de=ar-eba」にはなっていない。また「であれば -de=ar-eba」の「ば」を省略すると、「であれ -de=ar-e」のよ

うに、命令形及び古い已然形と同じになってしまふので、「であれば」の「ば」は省略できない。

ちなみに、現代語で頻繁に使用される条件を示す -eba という形態は、もともとそれだけで既定の条件を示すものであった -e に、仮定の条件を示す -aba との類推から、本来無関係の ba が加えられるようになったものである。これが既定条件のほかに確定条件、恒常条件、さらに -aba の仮定条件まで表すようになって今日に至っている。(ただし、確定条件には制限がつくようになっている。) それで現代語では -aba の方が条件を示せるのは、-ni=ar-a(ba) [ナラ(バ)] と =t-Ø=ar-a(ba) [タラ(バ)] の場合のみになった(A 6 章)。

### C5.11 (3) 他属性や実体と関連づける描写詞 -i, -u, -i

#### ⑥ 他属性連續描写詞 -i

他属性連續描写詞 -i は、他の動詞との併合をもたらすこともある。次の例では「すぎる」という動詞と併合している。図は図C5-17, -18 に準じる。

C5-58) 彼<sub>01</sub>は学生-de=ar-i=sugi-ru ([長年]学生でありすぎる)

C5-59) 彼<sub>01</sub>は元気-de=ar-i=sugi-ru (元気でありすぎる)

他属性連續描写詞 -i は、助動詞との併合をもたらすこともある。次の例では「ます」という助動詞と併合している。「ます」が元来動詞であったことについては10.2参照。)

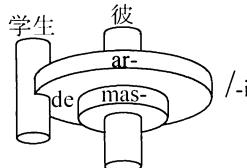
C5-60) 彼<sub>01</sub>は学生-de=ar-i=mas-u (学生であります)

C5-61) 彼<sub>01</sub>は元気-de=ar-i=mas-u (元気であります)

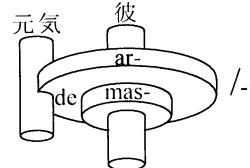
このとき、構造は同じままで、描写において次のように省略が行われることがある。

C5-62) 彼<sub>01</sub>は学生-de=ar-i=mas-u (学生で・・・す)

C5-63) 彼<sub>01</sub>は元気-de=ar-i=mas-u (元気で・・・す)



図C5-77 学んでいます／です



図C5-78 元気であります／です

また、他属性連続描写詞 *-i* は、基である「た =t-Øi=a(r)-」のような複合助動詞との併合をもたらすこともある。「ありた」は「あった」のように音便化するが、これについてはA 3章参照。

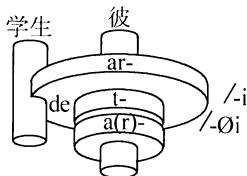
C5-64) 彼Ø<sub>1</sub> は学生-de=ar-i=t-Øi=a(r)- (学生であった)

C5-65) 彼Ø<sub>1</sub> は元気-de=ar-i=t-Øi=a(r)- (元気であった)

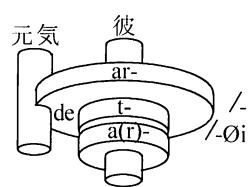
このとき、構造は同じままで、描写において *de* の *e* が省略されることがある。

C5-66) 彼Ø<sub>1</sub> は学生-de=ar-i=t-Øi=a(r)- (学生だった)

C5-67) 彼Ø<sub>1</sub> は元気-de=ar-i=t-Øi=a(r)- (元気だった)



図C5-79 学生であった／だった



図C5-80 元気であった／だった

さらに、「ます」「た」と併合することもある。

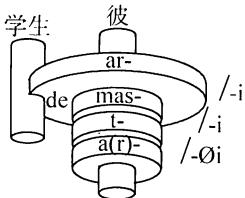
C5-68) 彼Ø<sub>1</sub> は学生-de=ar-i=mas-i=t-Øi=a(r)- (学生であります)

C5-69) 彼Ø<sub>1</sub> は元気-de=ar-i=mas-i=t-Øi=a(r)- (元気であります)

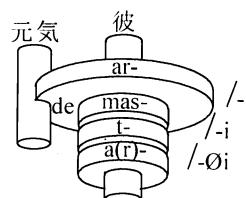
このとき、構造は同じままで、描写において *ar-i=ma* の部分が省略されることがある。

C5-70) 彼Ø<sub>1</sub> は学生-de=ar-i=mas-i=t-Øi=a(r)- (学生でした)

C5-71) 彼Ø<sub>1</sub> は元気-de=ar-i=mas-i=t-Øi=a(r)- (元気でした)



図C5-81 学生であります／でした



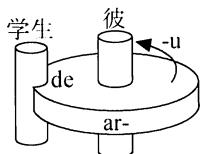
図C5-82 元気であります／でした

## ⑦ 実体修飾第1描写詞 -u

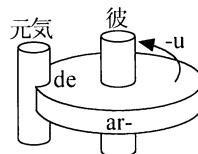
実体修飾第1描写詞 -u は、動詞 ar- に実体(名詞)を修飾する機能を与える。

C5-72) 学生-de=ar-u 彼 (学生である彼)

C5-73) 元気-de=ar-u 彼 (元気である彼)



図C5-83 学生である彼

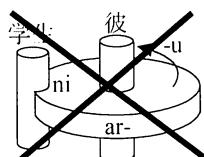


図C5-84 元気である彼

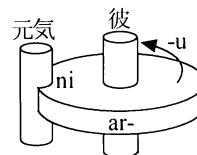
実体修飾第1描写詞 -u は、古い断定基である -ni=ar- の ar- にも実体(名詞)修飾機能を与えるが、その場合には、現代語では実体(名詞)が様態を表す場合にのみ実行され、-ni=ar-u (な) という形での描写詞となる。「に ni」格の母音 i と、ar-u の r-u の部分が省略される。様態を表さない実体(学生)には適用されない。

C5-74) \*学生-ni=ar-u 彼 (\*学生な彼) (「学生」は様態ではない。)

C5-75) 元気-ni=ar-u 彼 (元気な彼) (「元気」は様態である。)



図C5-85 学生な彼

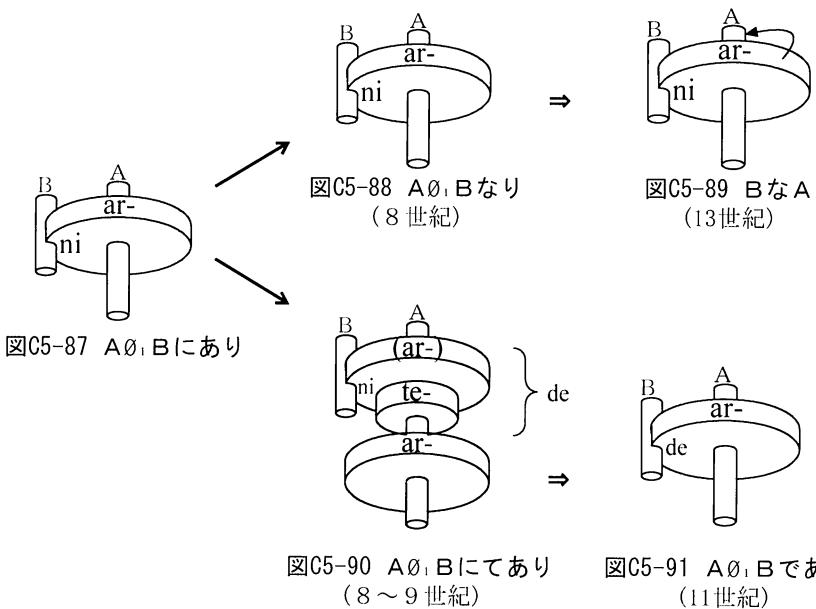


図C5-86 元気な彼

この現象の原因是「なり」の歴史に関係がある。「なり」について『日本文法大辞典』(p. 611) にこのような記述がある。(ここでいう「形状的」は本書の「様態を表す」と同じである。)

奈良・平安時代に最も栄え、鎌倉時代にはいると形が崩れはじめ、断言的なものは「である」の方向へ、形状的なものは「な」という方向へ変じて存在した。

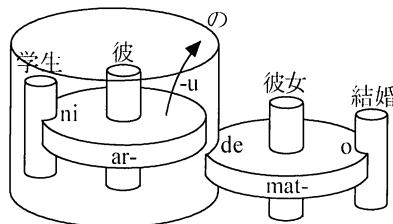
つまり、実体(名詞)の修飾は -ni=ar- 基を使用する場合は、様態を表す実体(名詞)のみに行われ、それは「な」の形で行われるようになったわけで、この歴史的推移を図示すれば、図C5-87～図C5-91のようになる(『文法』11.3を引用)。



5図 「にあり」から「な」「である」へ（『文法』11.3 から引用）

ただし、-ni=ar- 基が -u で包含実体「の」を修飾して「なので／なのに」の接続形式となる場合には「学生」のような様態以外の実体のときでも可能になる。

C5-76) 彼が学生-ni=ar-u の-de 彼女01は結婚を mat-



図C5-92 彼が学生なので、彼女は結婚を待つ

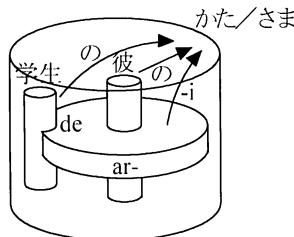
一方、(-ni=ar- 基ではなく) -de=ar- 基を使用する場合は、現代語の場合、上に見たように、実体(名詞)の性質には関係なく -u による修飾が可能である。包含実体を修飾する場合には「元気-de=ar-u こと／元気-de=ar-u そう(だ)」のように「だ -de=ar-u」の形による修飾も可能である。

## ⑧ 実体修飾第2描写詞 -i

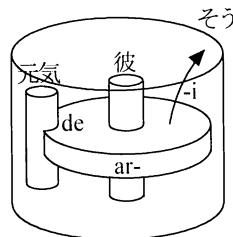
実体修飾第2描写詞 -i は、たとえば包含実体「かた／さま」や「そう」を修飾するが、前者では構造構成要素が個別に包含実体を修飾する。「彼の」「学生／元気での」「ar-i」のすべてが「かた／さま」を修飾する。後者では「元気-de=ar-i=そう」となるが、「元気そう」と省力されることもある。

C5-77) 彼 の 学生／元気-de の ar-i=かた／さま

C5-78) 彼 は 元気(-de) ar-i=そう



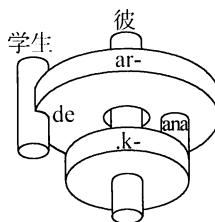
図C5-93 彼の学生(で)のありかた／さま



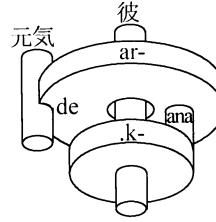
図C5-94 元気(であり)そう

## C5.11 (4) 否定属性詞 -ana.k-

⑨ 否定属性詞 -ana.k- は、否定構造を付加して断定基を否定構造にする。ただし、ar-a の部分は省略される。このことについては『文法』第30章参照。

C5-79) 彼 0 は 学生-de ~~ar-ana.k-i~~ (彼は学生であらへない)C5-80) 彼 0 は 元気-de ~~ar-ana.k-i~~ (彼は元気であらへない)

図C5-95 彼は学生であらへない



図C5-96 彼は元気であらへない

## C5.12 木村泰介論文 「動詞連用形の名詞化・名詞修飾」

木村泰介君が杏林大学外国語学部の卒業論文(2000年度)で動詞連用形について考察した。分かりやすく新見もあるので内容をここに掲載する。p. 85参照

## C 5. K 動詞連用形の名詞化・名詞修飾

— 肩たたき／焼き魚・焼く魚 —

木村泰介

## C5. K. 0 はじめに

この論文では、まず、「動詞連用形名詞用法」と「動詞連用形と名詞の複合名詞」について、日本語構造伝達文法の視点から論じる。この二つは従来「派生」と「複合」という違う現象として扱われてきているものであるが、日本語構造伝達文法の視点からは、-(i)という形態素により動詞と名詞が結ばれた同一の現象として捉えられることになる。

「動詞連用形名詞用法」である、例えば「肩たたき」という一つの形式が、なぜ「行為そのもの」「道具」「それを行う人」という意味を持つのかについて、また、この「肩たたき」と「動詞連用形と名詞の複合名詞」である「肩たたき棒」との関係について、深層構造・表層構造という設定を行った上で考え、モデルを使って目に見える形での説明を試みる。

そして、次に、この形態素-(i)と、同様に動詞と名詞を結ぶ働きをもつ形態素-(r)u(連体形)との違いについて考える。なぜ「焼き魚」と「焼く魚」では、アスペクト的な差が生まれるのか、なぜ-(i)を用いるものよりも-(r)uを用いる名詞修飾の方が自由に行われるのかということに対しても、説明を試みる。

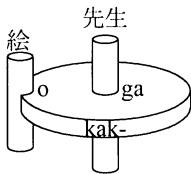
## C5. K. 1 動詞連用形名詞用法の構造

## C5. K. 1. 1 構造と描写

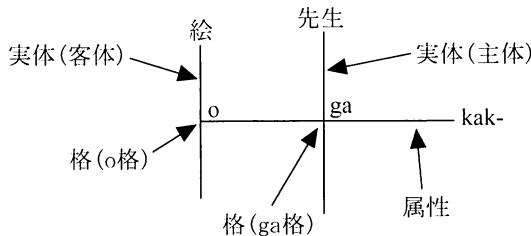
日本語構造伝達文法では言語を深層構造と表層構造という二つの層をもつものと考えている。我々が実際に目にしたり耳にしたり考えたりすることのできる言葉の形が表層構造で、その言葉の形となるための前提、根拠となるものが深層構造である。

ここでは深層構造のことを指して単に「構造」とする。構造は「実体」と「属性」、その関連のしかたである「格」という三つの要素から成り立ってい

るものと考える。ここでは簡単に実体は名詞、属性は動詞に対応しているものとしても良いと思う。下に一つ例を挙げる。「先生が絵を描く」という表層の形に対応する構造である。図C5. K-1は立体構造表示であり、図C5. K-2は簡略構造表示である。



図C5. K-1 「先生が絵を描く」



図C5. K-2 「先生が絵を描く」(簡略表示)

このようなモデルで表される深層構造を描写すると表層の言葉の形式になる。

### C5. K. 1. 2 動詞の名詞化

では、「動詞の名詞化」というのはどのような現象として捉えるべきものなのであろうか。

動詞は構造上では属性として存在する。属性は必ず実体とともに認識される。属性があれば、その属性をもつ実体も一緒に存在するのである。とすれば、属性を実体化する(動詞を名詞化する)ということは、属性と実体の一つの結合体を実体のように扱う、つまり一つの構造を一つの実体のように扱うということを意味する(C5. K. 1. 3参照)。

では構造を実体のように扱うというのは何を意味するのか。実体というものは、必ず属性と何らかの関連をもって存在するのであるから、一つの構造を実体として扱うことになると、その構造はある別の属性と関連をもって存在することになり、それはつまり、その構造が新たな構造の一要素として存在することになることを意味している。

以上から、動詞の名詞化とは、一つの構造を実体化して他の構造の中に組み込むという認識のしかたであると言ふことができる。

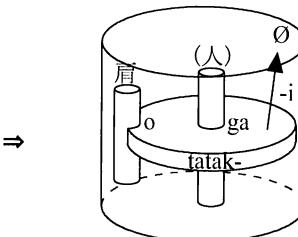
## C5. K. 1. 3 包含実体Ø(ゼロ)

一つの構造を実体化(動詞を名詞化)することをモデルで表すために日本語構造伝達文法では「包含実体」という実体を設定している。一つの構造全体を包むカプセルのような形をもち、それが他の属性と格関係を結び、より大きな構造を成立させる。

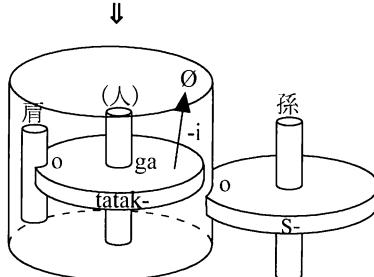
例えば、「肩たたき」という語の構造は、「肩をtatak-」という構造(図C5. K-3)を収めた包含実体で表される(図C5. K-4)。この包含実体が「肩たたきをする」(図C5. K-5)という、より大きな構造の一部となる。



図C5. K-3 肩をたたく



図C5. K-4 肩たたき



図C5. K-5 肩たたきをする

「動詞の連用形」というのは属性詞に描写詞である-(i)が膠着したものであるが、この-(i)が属性を実体に修飾させる役割をしているので、日本語構造伝達文法ではこの-(i)を「実体修飾描写詞」と名付けている。「肩をtatak-」という構造が包含実体内に存在することができる原因是-(i)で包含実体とつながるからである(図C5. K-4)。

ここに用いられている包含実体は他の包含実体「もの・こと」などと異なり、表層に形として表れない。構造を考える上でのみ存在の考えられる包含実体で

あり、Ø(ゼロ)形式という扱いになっている。つまりこの実体は「包含実体Ø」ということになる。

#### C5. K. 1.4 意味の広がりは構造の異なり

従来の国語文法では、動詞の連用形は一つの形で様々な意味を持つ、というふうに考えられてきた。例えば「肩たたき」であれば肩をたたく行為のことを表したり、肩をたたく道具のことであったり、肩をたたく人のことであったり、という具合にである。しかしこの考えは構造伝達文法の考え方とは合致しない。深層・表層という概念に基づく日本語構造伝達文法では表層においては結果的に似たような形をしていても、意味が違うのであればその構造は別の形をしている、というふうに考える。つまり意味の広がりとは構造の異なりを意味するのである。

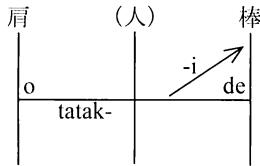
#### C5. K. 1.5 構造と描写の関係

実体と属性は格関係において構造を形成している。そして、その格構造を表層の言葉の形に変換する作業が描写である。一つの格構造は様々な言葉の形に描写をすることが可能である。たとえば「おじいさんは畑で芋を掘った。」という文でも、その文を他の文に組み込んで「おじいさんが畑で芋掘ったから食べていきな。」という他の文に組み込む形で描写をしても、「おじいさん、芋、畑」という実体と「掘った」という属性の格関係は全く損なわれていない。つまり一つの構造を使いたい状況に合わせて描写をし分けている、というふうに考えられる。

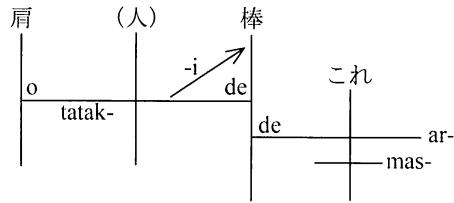
#### C5. K. 1.6 「肩たたき棒」の構造を考える

では「肩たたき棒」について考えてみよう。これはどのような構造をしているのだろうか。これは「肩をたたく棒」としても全く同じ構造であろう。そしてだいぶ形が変わるが「棒で肩をたたく」としても格関係は損なわれていない。つまり「肩たたき棒」は「ある主体が肩をたたく」という構造の、道具を表すde格に「棒」という実体が立っている、図C5. K-6 のような構造をしているものと考えられる。その構造を「棒」を中心に「主体が肩をたたく」という部分

が修飾するという描写をして、その修飾を受けた「棒」が他の構造の中に組み込まれていき、例えば「これは肩たたき棒です」のような文になっていくのである(図C5. K-7)。



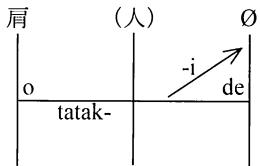
図C5. K-6 肩たたき棒



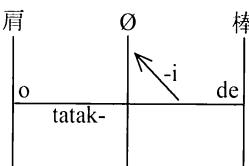
図C5. K-7 これは肩たたき棒です

### C5. K. 1.7 実体の

「肩をたたく道具」の意味での「肩たたき」はこの「肩たたき棒」と全く同じ格構造を有していると考えられる。「ある主体が肩をたたく」という構造の、道具を表すde格に立つ実体に向け、実体修飾描写をするのである。このように深層構造を考えるとde格に実体があると考えられるが、表層にその形が表れていない。ということはこの実体は $\emptyset$ 形式の実体であると考えられる。実体 $\emptyset$ である。図C5. K-8 のような構造になっているものと考えられる。



C5. K-8 (道具の)肩たたき



図C5. K-9 (行為者の)肩たたき

同様に例えば「肩をたたく人」の意味で「肩たたき」という語を使うのであればそれは「肩たたき人」と同じ構造であり、「主体が肩をたたく」という構造を、その主体を中心とした描写をし、その主体が表層では $\emptyset$ 形式をしているというふうに考えられるのである(図C5. K-9)。

### C5. K. 1.8 日本語構造伝達文法の視点の利点

従来は連用形の名詞用法は一つの形で様々な意味の広がりを持つというような説明をされてきたのであるが、日本語構造伝達文法の視点で考えることによ

り、それぞれの意味の違いは、その構造の違いがもたらすものであるということを、目に見える形で説明することが可能になる。また動詞の連用形一つでのみ構成されるものと、その後ろに名詞が来るものとでは「派生」「複合」という別の現象とされてきたのであるが、構造伝達文法では深層構造を設定し、実体のという道具立てをすることによって、どちらも「描写詞-(i)による実体修飾」という同じ現象として扱うことができるのである。

## C5. K. 2 動詞と名詞をつなぐ連用形と連体形の棲み分けのルール

### C5. K. 2. 1 連体形 -(r)u

前章において動詞と名詞をつなぐ連体的な機能を持つ連用形、日本語構造伝達文法でいう「実体修飾描写詞-(i)」の基本構造について考えてきたが、この機能を持つものにはもう一つ「連体形」が存在する。日本語構造伝達文法でいう「実体修飾描写詞-(r)u」がそれである。どちらも実体修飾描写をしているわけであるが、何らかのルールに基づく棲み分けがなされているはずである。それは一体どのようなルールなのだろうか。

### C5. K. 2. 2 同じ構造の文で比べてみる

- (i) と - (r)u はどちらも描写詞であり、どちらを用いようとその格構造には何ら影響を及ぼすものではない。では何が違うのだろうか。同じ構造を - (i) と - (r)u で描写した文で比較して検討する。下の各ペアでそれぞれ上のものが - (i) の形式、下のものが - (r)u の形式になっている。

・布団たたき	・自動米研ぎ機
・布団をたたく棒	・自動で米を研ぐ機械
・牛乳一気飲み	・牛乳早飲み大会
・牛乳を一気に飲むこと	・牛乳を早く飲む大会
・二軍どまり	
・二軍でとまる程度	

### C5. K. 2.3 格詞の表層化

まず、それぞれの文の属性(動詞)の前の部分に着目してみると、上段である-(i)の文では格詞がなく、下段の-(r)uの文には格詞がついていることに気がつく。構造はどちらも同じであり、また深層において実体は必ず属性との格関係にあるのだから、-(i)の文でも格が存在しないわけではない。ということは-(i)による描写では格は表層化されないというふうに考えられる。

### C5. K. 2.4 修飾される実体の独立性

次に属性(動詞)の後ろの方に視点を移すと、それぞれの描写において、実体が異なる形をしているペアがある。どちらの文も意味は同じであり認識されているのは同じ構造、同じ実体であると考えられるが、その表層化に差がある。例えば「牛乳一気飲み」の文で、上段下段どちらの文も包含実体を用いるような構造をしているが、修飾される包含実体は、-(i)の方では Ø 形式、-(r)uの方では「こと」という表層形式をしている。-(r)uの文の「こと」のかわりに Ø を用いて「牛乳を一気に飲む Ø」としても、十分内容は分かるが「古文」のような感じがしてしまう。

また「自動米研ぎ機」の「機」など音数の少ない漢語などの実体は-(r)uによる描写では「機械」などに変えた方がいいやすく、先程の例での「肩をたたく人」なども-(i)による描写では「肩にんたき人」のような描写が可能であると思われる。

このように見てみると-(i)の後ろの実体と-(r)uの後ろの実体とでは、一つの単語としての独立性、安定性が求められるかどうか、という差があるようである。-(i)の後ろのものは Ø 形式や「機き」「人にん」といった、意味や機能は十分に備わっているが単語としての独立性、安定性は低いようなものも来ることができる。一方-(r)uの後ろのものは十分な意味、機能に加えてそれ一つでの安定性、独立性が要求されている。

### C5. K. 2.5 よりコンパクトな-(i)、より説明的な-(r)u

これらのことから、-(i)は構造をよりコンパクトに描写し、-(r)uは構造をより説明的に描写するという違いがあるのではないかと考えられる。よりコン

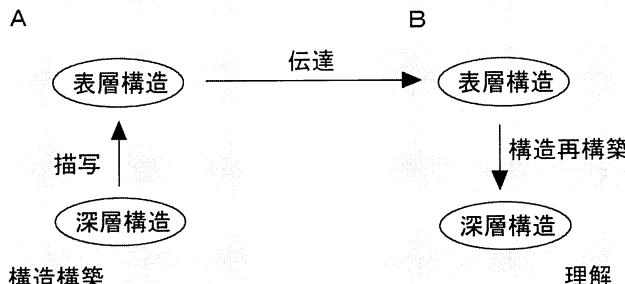
パクトに構造を描写するには意味が分かる必要最小限の描写に抑えればよい。格詞のことを考えれば、わざわざ描写をしなくともよいことが多い。例えば「布団たたき」であれば「布団」という実体と「tatak-」という属性があり、その実体と属性のイメージだから十分「を格」という格関係を構築できる。  
-(i)による描写であれば、それは表層化しなくとも良い。逆に-(r)uによる描写であれば、その構造に忠実に描写をするので、格詞も表層化していると考えられる。

後ろの実体に関しては、コンパクトに構造をまとめることが目的の-(i)の描写であれば、全体としての概念が通じればよいわけで、たとえ一つ一つの要素の独立性が低くとも必要な意味さえ通じれば問題ではなく、Ø 形式や「機」などの、独立性は低いが意味は十分備えている形式が用いられる。

「牛乳早飲み大会」の文などからも分かることおり、「早飲み」の「早」など形容詞は語幹（構造伝達文法では「形容実体」）のみの描写になっている。また少し極端な例かもしれないが、例えば「布団圧縮袋」などは-(r)uの描写では「布団を圧縮する袋」になる。「圧縮」という実体のみで動作的な概念を十分含むような、いわゆる「する動詞」と呼ばれる類は、-(i)による描写では属性詞（「する」）すらも描写されない。

#### C5. K. 2. 6 話し手、聞き手に対する負荷の面から

構造伝達文法では図C5. K-10のような要領で、話し手であるAから聞き手であるBに向けて言葉の形に変換されたAの認識が伝達されるものと考えている。



図C5. K-10 表層の言葉を介した認識のやり取り

ある人（A）が物事を認識して構築した構造を表層の形に描写、それを別の人（B）に伝達する。Bは、その言葉をもとに構造を再構築して理解をする、というふうに上の図の矢印に沿った順で、認識が表層の言葉を介してやりとりされる。C5.K.2.5 のコンパクト、説明的という違いはこの構造を伝達する側（A）と伝達される側（B）に対する負荷の違いであるとも考えられる。

#### C5.K.2.7 構造の補完

- (i) の描写においては A の側の負荷が小さくなる。その構造を伝える必要最小限の要素のみの描写で済ませ、伝達する言葉を量的に小さいものにすることができる。しかしこれだと、B、つまり伝達され構造を再構築する側により大きな負荷がかかってしまう。

言葉を伝える人はその瞬間に認識した構造のすべてでなく一部を描写して言葉にしているものと考えられる。そのような言葉から構造を再構築するには必然的に構造の補完が必要となる。- (i) を用いた表層の形を小さくする描写だと、構造を再構築する側の補完に多くを頼ることになる。

逆に - (r) u による説明的な描写では、描写をする側が構造をできるだけ正確に描写することで表層構造である言葉は量的に大きいものになるが、伝達された側はその言葉に忠実に構造の再構築を行えば良く、補完しなければならない割合も自ずと小さくなる。

- (i) と - (r) u というのは、このような描写の目的によって使い分けているものと考えられる。

#### C5.K.2.8 アスペクト的な違いの捉え方

いずれにせよこの - (i) と - (r) u はともに描写詞であり、どちらを使おうともその格構造に変化は与えないものである。しかし、次のようなものに対してもこのような説明は成り立つのであろうか。

- ・ 焼き魚
- ・ 焼く魚

上の二つの文を比べると、- (i) で描写をした「焼き魚」の方はもう焼いてある、もしくはもう焼いてあると想定される魚に対して用いられるのに対し、- (r) u

での描写である「焼く魚」の方はどうちらかというとこれから焼くような魚に対して用いられる。こうした違いが生まれるのはなぜなのだろうか。描写の違いは意味の違いを生むことはなく、意味の違いは構造の違いを反映するものである。しかし「もう焼いてある」と「これから焼く」とでは、いってみればまるで正反対の内容のものである。となると構造の違いを念頭において分析するべきである。ではどのような違いがあるのか。

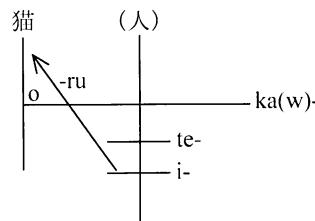
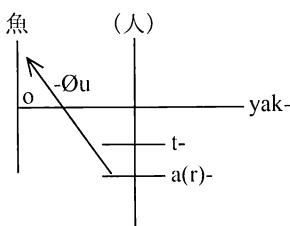
### C5. K. 2. 9 「焼き魚」は「焼いた魚」

「焼き魚」というのは、もう焼いてある魚、もしくはもう焼いてあると想定される魚に対する名称であり、この言葉に対しては「焼く魚」よりもどちらかといえば「焼いた魚」の方が同じ内容を表す。つまり「焼いた魚」と同じ構造をしているのではないかと考えられる。今でこそ「焼いた」という形式をしているが、もともとこれは「焼きてある魚」、「焼きたる魚」という形をしていたものであり、その形態素は

yak-i=te-Ø=ar-u sakana

→ ya -i =t -Ø=a -Ø sakana

というように分析できる(図C5. K-11, yak-, =t-, =a-の属性動詞、助動属性をつなぐ-(i)は連続描写詞)。時代が移り今では実体修飾描写詞が Ø 形式をしているが、この文は立派に-(r)uという機能を用いた文である。構造を考える際には共時的な視点だけでは無理なのである。



図C5. K-11 「焼いた魚」の構造

図C5. K-12 「飼っている猫」の構造

もう一つ例を挙げよう。同様に「飼い猫」という言葉について考えてみる。これも「飼う猫」と比べるとアスペクト的な差が感じられるのであるが、「飼い猫」は、どちらかというと今飼っている、またはそのように想定される猫で

あり、これに対しては「飼う猫」ではなく「飼っている猫」が同じ構造をしているものと考えられる（図C5.K-12）。

#### C5.K.2.10 -(i)は構造のアスペクト的な要素を表層化しない

このことと先程の-(i)と-(r)uの描写の違いを合わせて考えると、次のようなことが言える。

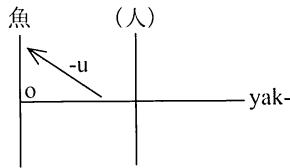
「-(r)uは構造を説明的に正確に描写する。-(i)は構造をよりコンパクトにまとめ上げて描写をし、格詞やアスペクト的な要素は表層化しない。」

-(i)による描写の際は属性のアスペクト的なものは表層化されていないものの、聞き手には「焼いた魚」「飼っている猫」というような認識のされ方をする、つまり聞き手はこの部分も自ら補完して再構築をしていると考えられる。

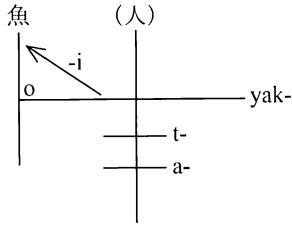
「焼き魚」は図C5.K-11の「焼いた魚」と同じ構造をしているのであるがアスペクト的な要素は表層化せずに実体修飾をする、つまり構造においては属性の下に=t-や=a-といった助動属性が存在しているのだが、それらは経由せずに属性から直接実体に向けて実体修飾描写詞が用いられているのである。そうして表層化された言葉を伝達される側も構造を再構築する際には=t-や=a-を補完しているのである（図C5.K-14）。

逆に-(r)uによる描写では、アスペクト的な属性も細かく描写するので、表層形式が「焼く魚」（図C5.K-13）の時は構造にも=t-や=a-といった要素はないのであり、それらの要素が構造にある場合にはその構造通りに「焼いた魚」（図C5.K-15）という描写になる。伝達された側はその言葉に忠実に構造の再構築をすればよいのである。

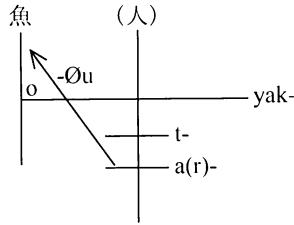
図C5.K-13～図C5.K-15から分かるように、「焼き魚」の構造は「焼いた魚」と同じで、「yak-」の下には「=t-θ=a-（タ）」がついているのである。しかしアスペクト的な要素である「=t-θ=a-」を経由しないで属性「yak-」から実体「魚」に向けて実体修飾がなされているので、その表層の形は「焼く魚」と非常に近いものになるのである。



図C5.K-13 「焼く魚」



図C5.K-14 「焼き魚」



図C5.K-15 「焼いた魚」

このように-(i)と-(r)uの描写では、「焼き魚」と「焼く魚」のように一見するとアスペクト的な違いが生まれるようにも見えるのだが、実はこれも-(i)と-(r)uの描写法の違い、つまり「よりコンパクトに伝達内容をまとめる-(i)」と「より説明的に構造を細かく描写する-(r)u」との違いが生み出す現象なのであり、構造モデルを用いることでその違いを容易に示すことができる。

### C5.K.2.11 -(i)の描写の制約と自由に行われる-(r)uの描写

こうした-(i)と-(r)uの描写の態度の違いが、-(i)による描写が可能である表層形式は比較的限られていて、逆に-(r)uによる描写が比較的自由に行われているということの原因になるのではないかと考えられる。

-(i)による描写では構造をよりコンパクトにまとめることが目的であり、表層形式は量的には小さくできるが、聞き手に対する負荷が大きい。格詞もアスペクトも表層化されていないので言葉を伝達された側が理解するためには自分でそれらを構造に補完しなければならない。アスペクトなどは表層化されないのであるから、もとの構造にそれがあってもなくても形は同じである。図C5.K-13～図C5.K-15の例でいえば、実は「焼く魚」でも「焼いた魚」でも、-(i)による描写を行えばどちらも同じ「焼き魚」になってしまうと考えられる。聞き手が慣習

的にアスペクトを補って、「焼き魚」を「焼いた魚」として理解したとしても、話し手はアスペクト無しの「焼く魚」の構造を伝えたかったのであれば、不都合が生じてしまう。そのようなことを避けるためには、慣習化しているものや、それに似た類推の容易なものなど「分かりやすい」ものでなければ-(i)による描写には向きであると言える。それでいわゆる「合成語」のような、比較的固定した言い方に多く用いられ、どのような場合にでも使えるというような自由さが制限されているのである。

それに対して-(r)uは構造をより細かく正確に描写をするので、聞き手の側もその表層形式の通り、忠実に構造を再構築すればよい。表層にアスペクト的なものがなければ構造にもそれはなく、アスペクトのある構造はアスペクトのあるように表層化がなされる。「焼く魚」も「焼いた魚」も、そのとおりに構造を再構築すればよい。

このようにして考えれば-(i)と-(r)uの描写によるアスペクト的な違いというのも、コンパクトに構造を描写する-(i)と、説明的に細かく構造を描写する-(r)uという描写詞の性質によって起こるものであることが分かる。

### C5. K. 3 まとめ

以上、日本語構造伝達文法の視点から実体修飾描写詞-(i)について考えた。動詞連用形の名詞用法という一つの現象も、そこに深層構造を設定することで、一つの表層形式が様々な意味を持つことの原因を、目に見える形で示すことができた。また、これまで連用形の後ろに名詞が有るか無いかで「動詞の派生」「動詞と名詞の複合」という別の現象として分類されてきたのであるが、この文法理論を用いることで、どちらも「実体修飾描写」という一つの現象として一元的に分析をすることが可能であることが明らかになった。実体修飾描写詞-(r)u、いわゆる連体形との違いも、深層・表層という概念を用いることで明確に表すことができた。